
不思議の国の有栖!?

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国の有栖！？

【Nコード】

N3182J

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

ペットショップで働く大学生の僕、有栖利輝18歳。脱走した白兔を車から救ったはいいいけれど、穴に落ちた先は『不思議の国』ミラ国。そこで摩訶不思議な住人に囲まれて、勝手に神子に仕立てあげられた！名作『不思議の国のアリス』と日本神話を融合した異色ファンタジー！！

序話

最後の神が地上を離れ、天上に帰るとき、最後にこう残したと云う。

『この世に金剛石の時代が戻るまで、決して地上には戻りません』

そして片方だけ残った翼を広げ、一筋の光となって天に昇っていった。

しかし女神の残していった神子の一族だけは、

天上におわす女神の意を汲み、地上に伝えることができるという。

我が声を聞き、我が姿を見よ。

さすれば影、汝のもとにひれ伏せり。

我が影をとらえ、我が名を呼べ。

さすれば汝、天の力を受け継がん。

「…ついに見つかったのか」

弟は床に膝をつき、床にぼうつと浮かぶ丸い模様をなぞっていた。

「本当にそいつが“有栖の神子”なんだな？」

問われた姉は白兔を撫でながら微笑んだ。

「ええ。あらゆる占いで調べてみたけど、彼が“有栖の神子”であることは間違いないわ。あとは私たちが丁重に迎えに行くだけ」

「…じゃあ…さっさと済ましちまおうぜ…」

円柱にもたれ掛かっている兄の声は無視して、姉は抱いていた白兔を床の模様の上に置いた。

「弥生、よくやったわ。あとは頼んだわね」

「…本当に、私が行って宜しいのですか？」

室内には彼等と白兔以外、誰もいない。その声は明らかに、模様の上に座る白兔が発したものだっただけ。

姉は面白げに笑う。

「あなたが一番適任です。あなたは神子の“影欠片”^{かげら}として、異界

にいる神子を見つけた。“有栖の神子”はあなたが迎えに行くべきです」

「ですが…」

「さあ、行きなさい。事態は一刻を争うのですから」

弥生と呼ばれた白兎は黙りこみ、姉が手を離しても動かなくなった。弟は模様から離れ、それを確認すると、姉は額の鈿に指を宛がう。

「異界に生まれし有栖の神子、我が声を聞き、我が姿を見よ！」

すると、床の模様が薄ぼんやりと輝きだし、下から風のようなものが起こった。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！！」

その瞬間。

光る模様は深い深い穴へと変じ、白兎は風に吸い込まれるようにして穴へと落ちていった。

風が収まる頃には、そこはただの床に戻っていた。

「…無事に帰ってこいよ…」

弟が膝をついて模様をなぞりながら呟いた、その直後。

「いやぁぁぁぁッ」

さっきまでの、凜と涼やかな女声とは違う絶叫が室内に響きわたった。

「なんであんたが時環ときわ持つてるのよおお！」

姉は円柱に背を預けた兄に掴みかかっている。よくよく見ると男の手には、真ん中に円形の板を付けた黒い帯が握られていた。

「…ああ…弥生…に、渡すの…忘れてた…」

「忘れてたじゃねええ！！　これがないと弥生、こっちの世界に帰ってこれないんだから！」

あちゃー…と弟は目を覆った。それは“有栖の神子”を連れてくるにも一大事だ。

「い、今ならまだ間に合うかも…ツキヨミ！　早くその模様の上に時環を…」

「…ぐー…」

……ぐー？

「つて、寝るなあああ！！」

兄に容赦ない往復ビンタが炸裂！　しかし兄に起きる気配はない。

恐るべし、兄の睡眠障害。

「スサ！ この万年睡眠男を模様の上に乗っけてちょうだい！」

「はいっ」

とても逆らえる気がしない。

「ああもう、あまり『力』使いたくないのにつ…異界に生まれし有栖の神子…」

…兄は、眠ったまま穴の中に吸い込まれていった。

一話 穴に落ちて

真夏の朝が今日もやって来た。

「おはようございまーす」

「おはよう。今日も頑張ろうね」

開店にはまだ早い6時30分、和田^{わた}店長は僕に店内の掃除を指示して自分は餌の調合に向かった。

世間は夏休み真っ最中だが、合コンもできないような苦学生には無縁の話だ。特にここペットショップは人も多い。それを和田店長とバイトの僕だけで切り盛りしている。

そう。僕は今年の春、大学に入学してすぐ親元を離れ、この『犬猫専門ペットショップALICE』で働いていた。

『君、動物は好き？』

『はい』

『じゃあ来週から働きに来てね』

…こんな感じであっさり採用されてしまったのだ。

後で店長に訊いたところによると、僕の名前が採用の決め手の一因

になったらしい。

僕の名前は、ありす・としき有栖利輝

ペットショップの名前『ALICE』と重なる。

店のエプロンにはデカデカと『ALICE』と印字されており、そのうえ『有栖』と書かれた名札を付けなければならない。

気付いたお客さんには『息子さん？』と訊かれ、そうかと思えばクスクスと笑われる事もある。勘弁してほしいよ、ホント。

「それで…利輝くんはまだそのストーカーに付きまとわれてるのかい？」

犬の餌を調合しながら、ゲージの中を掃除する僕に問いかけてきた。

「まあ、付きまとわれてるといいいますか…お世話になってるといいますか…」

僕は最近になって、生まれて初めてストーカーの被害にあっていた。被害にあつてるといふより、お世話になってるといふ方が正しいかもしれない。

そりゃ帰宅途中に電信柱の陰から尾行されたし、個人情報満載のゴ

ミもあさられた。こないだなんか郵便受けも勝手に覗かれた。一言『あの…』って声をかけたら、文字通り脱兎のごとく逃げられたっけ。

そのお詫びのつもりなのか、翌日バイトから帰るとドアの取っ手にレジ袋がさがっていて、中にはおにぎりが3つほど入っていた。鮭と昆布と梅干の。

というわけで、僕は3つとも美味しくいただきました。

翌日『おにぎり、美味しかったです』と書いたメモをレジ袋に入れてさげておいたら、今度はお漬物もセットで入っていた。

この事を大学の友達に話したら、『うわキツモ！ お前それ絶対食うなよ』と言われたけど、その忠告を守れたことは一切ない。

だって、彼女の料理めっちゃ美味しいんだもん。

おにぎり週間が終わると今度はカツ丼とか親子丼とか“丼物週間”になり、それが終わるとポークソテーとか麻婆豆腐とか肉じゃがとか、本格的な家庭料理を持ってきてくれるようになった。

貰ってばかりでも悪いので、ある日僕は安物の腕時計に『いつも美味しい料理をありがとう。これはそのお礼です』と手紙を添えてレジ袋に入れておいた。彼女の雰囲気合うような、小さなピンクの腕時計。

もっともまだ返事が届いてないので、気に入ってもらえたかどうかは分からない。

「利輝くん完璧に餌付けされちゃったね。」

店長の呟きに軽く反抗しようとした、その時。

僕はゲージの下に置いてある檻、の中にいる小動物に目をとめた。
犬猫専門ペットショップなのに…。

（か、可愛い…）

「あゝその子？　なんか間違えて入荷しちゃったみたいなんだよね。」

そこにいたのは白い毛糸玉みたいな可愛いウサギさんだった。モコモコして手触りよさそう…。

「犬や猫ならともかく、ウサギは専門外だからな。ニンジンとかなら食べるかな。」

そう言っただけで店長が店の奥に消えた。

その時だった。

カランカラン。

と来客を告げるベルが鳴ったのは。

「あゝすいません。お店まだ開いてない…」

僕はそこで思考停止した。したがって次の言葉も出てこない。

（うつわー…なんだろうこのド派手なお兄さん…頭が4色…）

真夏だというのに見るからに暑苦しい長髪をそのまま垂らし、太古の国から持ってきたようなヒラヒラの服を着ている。おまけに腕輪とかネックレスとかピアスとか、装飾品をジャラジャラ着けている。

（いろんな意味で）見とれてた僕は、このド派手なお兄さんが僕のすぐ近くまで来ていることに気付かなかった。

「…そのウサギ…」

「へ？ ああこの子ですか。すいません、これ、売り物じゃないんです…」

「これ着けさせてくれないか」

はい？

（何言ってるんだろ、このお兄さん…）

お兄さんは着けていた黒い腕時計を外し、檻を開けてウサギさんの首に装着しようとしていた。

「ちよっ…！勝手にそんなことされたら困ります！」

けれどもそのとき。

ゲージから飛び出してきた仔猫が僕たちの間…つまり檻に激突し、ウサギさんは外に放り出された。

そのままピョンピョン跳んでいく先は…車のビュンビュン行き交う国道。

「！ 危な…っ！！」

僕は反射的にウサギを追いかけて、反射的に捕まえて抱き抱えていた。そして目の前にトラックが現れる。

（！ やば…っ！！）

きつとこのまま跳ねられて、弱冠18歳にして即死しちゃうんだろ
うなあ（涙）僕はウサギをぎゅっと抱えて目を瞑った。心の準備、
死んじやう心の準備をしてるんだよ！……、……って。

（あれ？）

しかし来るかと思っていた衝撃は訪れず、体は引力の法則に従って
移動中だった。手っ取り早く言っと、落ちている！

（噓おおおおおーっ）

バカな！ 都会の国道のド真ん中に、蓋のないマンホールがあるな
んて！ しかもなかなか下水道に到着しない。こんな地中深くに下
水道が通ってるなんて！

しばらく落っこちてるうちに、僕の体は下水に辿り着いた。一度深くまで潜ったあと、息継ぎのために一旦浮上する。

「ぷはあっ！　ウサギさん、大丈夫？　一体どこにガゴボ…」

下水にしては透明度が高い水のどこを見渡しても、ウサギさんの白いモコモコは見当たらなかった。小さな命を救ってやれなかった自分が不甲斐ない。

そうこうしているうちに流れは速くなり、水かさも増してきた。もう僕の体力的にも限界だった。

父さん、母さん、そして本ばかり読んでいた姉さん。

先立つ僕をどうかお許してください…。

二話 流されて雪国

チクタクと、時計の音がする。

「…う…ん…？」

チク、タク、チク、タク。

「…あ、れ…？」

生きてる？ 良かった。ここがどこか分からないけど、なんとか命をとりとめた。

「…ウサギさん…？」

どこか薄暗いところで大の字になっていたようだ。ウサギさんの安否を確かめようと体を起こそうとするが、まるで鉛を飲んだように重い。

いや、重すぎる。何だろうかと頭をあげると、シマシマの仔猫が丸くなって眠っていた。

（か、可愛い…！）

すると猫も起き出して、僕の上で大きく伸びをすると、そのまま大きくあくびした。

「…よう。やっと起きたようだな、坊主」

「うん。君もよく寝てたみたいで…」

あれ？

いま誰が喋ってました？

「なんだ。空耳か」

「空耳じゃねえよ。間違いなく喋ったのはオレだよ、オレ」

「……………」

僕は叫びをあげて後ずさった。可哀想なことに猫を突き飛ばして。

「いつ！？ ……てえなあ！！ 何なんだよイキナリ！」

「だって、だって…猫が、喋っ…喋…」

「猫が喋ったってか？ バーカ」

猫は大きくあくびをすると、ゆったりした足取りでこっちに近寄ってきた。

「普通の猫なら喋るかよ。オレはチエシヤ猫」

「あ、どうも。有栖利輝です」

ご丁寧にも猫相手に自己紹介。

「…どこどこ？」

「まあとにかく…ついてきな。こっちだ」

右も左も上も下も木で出来た狭い空間の中、猫は器用に引き戸を開けて外に出た。屈めば人間も通れる大きさなので、這いながら僕も外に出る。そこは。

（…富良野？）

キタキツネが似合いそうな銀世界。ツンと鼻にしみるような澄んだ空気。左手は常緑の木々が茂る林で、右手は雪に埋もれた休耕地だ。でも待てよ？ たしかいま日本は夏じゃなかったっけ。季節が逆ということとは。

「…南半球？」

「じゃなくて、ここはミラ国だ。不思議の集う不思議の国」

頭上でリーンゴーンと鐘が鳴る。振り向けばそこは時計塔だった。つまり僕は（多分）下水に流されて、この時計塔に着いたわけか。

「どうした？ こっちだ」

慌てて猫についていく。この雪の中、半袖にエプロンはさすがにキツかったが、歩いているうちにどうにかなるだろう。

歩いているうちに色んな生物と出会った。鳥類に関しては、アヒル、インコ、ワシ、カササギ、カナリヤ、鳩、ドードー（まだ絶滅してないようだ）。

その他にはハツカネズミ、トカゲ、子犬（可愛いなあ）、芋虫（冬眠しないのかな）、蟹が3匹（調理済みの色してるよな）、エトセトラ、エトセトラ…。

「…不思議なところだなあ」

しみじみ呟くと、猫は笑った。

「当たり前だろ、ここは『不思議の国』なんだから」

「…ここはどこなんですか？」

猫はこっちを振り向いて首をかしげた。

「ここはミラ国だ。不思議の集う不思議の…」

「いや、そうじゃなくて…」

僕はなんとか言葉を探す。

「テーマパークだとは思うんだ。だって喋る猫とかあり得ないし…ここは何て言うテーマパークなの？ それとも外国？」

猫はそのどれにも『YES』と言わなかった。

「…それとも僕、全然別の世界に来ちゃったのかな」

まさか
下水道に流されて。

猫はまた正面を向いて歩き出した。

「…かもな」

「そっかあ…」

なるほど、よくある話だ。映画でも漫画でも絵本でもアニメでも、そんな話はザラにある。たしか、かの有名な童話の主人公も、ウサギを追いかけて異世界に落ちたんじゃなかったっけ。

ひとり納得する僕に、先行く猫は急に止まって“お座り”した。

「…マジで？ 信じるの？」

「だって、他に考えようがないじゃん」

こんなに凝ったテーマパークがあったとしても。

「…ぶっ」

ぶっ？

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！ ありえねー。今度の神子様はこんな天然坊主かよ！ ぶっクク腹いてー」

文字通り笑い転げる猫に、僕はちよっとだけカチンときた。

「そ、そんなに笑わなくてもいいじゃ…神子様、って?」

「気に入った。ついてきな。いいもん食わしてやるからよ」

「いいもの?」

何かなんだかサッパリだが、とりあえず僕は猫のあとをついていくことにした。

三話 真冬の果実

「…見失っ、たあ？」

弟は姉に睨まれてガクガクぶるぶる震えていた。ちなみに隣で正座している兄は器用にもそのまま熟睡している。

「なにしてんのよアンタたち！！ 弥生に時環わたして“有栖の神子”をこっちに丁重にお迎えするって言ったでしょ！ なのになんでツキヨミだけ帰ってきてきて弥生と“有栖の神子”は行方不明なのよっ！！」

「すすすスミマセンっ！！」

謝ったのは弟の方で、兄はぐっすり眠っていた。

姉の手には鋭利な剣が…。

「…ツキヨミ…あんまり寝こくつてると、首チヨン切るわよ」

弟はぶるりと震えた。早く起こさなければ兄の命が危ない！

けれどそのとき。

部屋につながる階段を、白兔がピョコピョコ跳ねて上ってきた。

姉は目を丸くした。

「弥生！ あなたどうして…」

「先に非礼を申し上げます。ヒルメ様！」

白兎は長い耳をピクピクさせながら体を伏せた。

「神子様はチェシャ猫殿と一緒にです！！」

…その場の空気が凍りついた。

+++++

それは雪に埋もれた果樹園の、葉を落としきつた木になりていた。

「木守りかぁ」

「お前、木守りなんて知ってるのか？」

実家が果樹園なので。

「だったら話が早い。それ食ってみな」

「はい食ってみま…え？」

僕は何を食べるべきなのか分からなかった。

「だーから、食つの」

「…何を？」

「木の実」

「木の実？」

木にはリンゴともイチジクともザクロともつかないフルーツがなっている。

「これを食べつの！」

猫は木に登って器用にそれをもぎ落とした。すかさずその奇妙な果実をキャッチする。

「これ…食べるの？」

毒々しい色をしたそれは、とてもじゃないが食用だとは思えない。

しかし猫はそれを涼しい顔で食べている。毒もなければ食あたりもしないらしい。

「……………」

僕は黙って猫と果実を交互に見比べた。

こうなりや覚悟あるのみだ。

（えーい、もう死ぬわけじゃないし！）

僕は大きく一口かじって飲み込んだ。酸味と苦味が互いに自己主張しあう味だ。手っ取り早く言つと。

「…うえ…ま、不味い…」

「それは申し訳ない。でも効き目はバッチリだからな」

効き目？

「さてと。オレは用事があるからもう行くぜ」

「え？ 僕を道案内してくれるんじゃないの？」

「は？ いつ誰がそんなこと言った」

何イ！？

「道が分かんねえなら、この先で茶会してる奴等がいるから、そいつらに訊いてみな」

猫は木から木へと跳び移った。

「機会があればまた会おうぜ、有栖利輝」

そして猫の姿は幽霊のように消えていった……。……。

じゃなくて！

「ちょっと待って！ 待ってってば！ ねえ聞こえないの！？」

消える…消える…消える…。

「待ってたら！ おい！！」

消える…消える…消える…消える…。…キレた。

「っ、待てっつってんだろっがよ猫おおおオーッ！！」

珍しく荒げた僕の叫び声は、銀世界に虚しく消えていった。

+++++

花莫蔭、茶菓子、錫の茶道具。

季節外れの花見の設えのなか、座っているのは2人の人間と1匹の小動物。

温かいお茶に口をつけようとした、そのとき。

「…どうした、スサ」

兄が問う。弟はその微かな足音を正確にとらえていた。もちろん、獣のものではない。

弟は側に置いていた暗器をとって駆け出した。

「スサ？」

「気配があつた。ツキヨミ、弥生を頼む」

+++++

僕は半袖という寒々しい格好で、ひとり雪道を歩いていた。

「くっそーあのトラベえめ。今度会ったら絶対…あれ？ あのトラベえなんて名乗ってたっけ。なんかちよっと小難しいような…まあいいや。思い出すまでトラベえでいこう」

ひとりブツブツと呟きながら歩いてきたときだった。

ヒュッ！

「？」

僕の頬を、何かが掠めた。その部分からじわじわと痛みが広がってくる。

何だろうと何かが通過したあとを辿っていくと、木の幹に鏃のようなものが突き刺さっていた。

（え？ なにこれ…吹き矢…？）

感心している場合じゃなかった。

誰かに突き飛ばされたかと思うと、その誰かに馬乗りにされて身動きが一切とれなくなった。

（忍者！）

頭の中では、このままじゃ危険だと警鐘が鳴っている。

相手の顔は逆行で見えない。けれど殺気だけは感じられた。やはりその手には刃物が握られていて…。

（こっ、殺される…！）

僕の首めがけて大きく振りかぶる！

「うわぁああああ！！」

「…有、栖…？」

「…へ、っ…？」

名前を呼ばれて目を開けると、僕を襲ってきた人の顔がすぐ間近にあった。

忍者さんの目は僕の名札に向けられている。どうやらそれで名前を呼んだらしい。かと思ったら、胸ぐらをグイとつかまれて顔と顔が急接近した。

「あっ、あの僕是有栖利輝という者でして決して怪しい者では…」

「お前が、“有栖の神子”なのか？」

「だから有栖利輝だと言って…はい？」

「…どうもそのようだ…スサ…」

忍者さんと同じ声が別の方向から聞こえた。が、辺りを見回しても人影が見当たらない。

「だっ、誰!？」

「…俺は…ツキヨミ…今そっちに行く…」

また声が聞こえた。すると、柔らかい風がふわりと頬を撫でる。そして目の前に見覚えのある人物が舞い降りた。

(あっ！ ペットショップに来たド派手なお兄さん!!)

「…弥生が証明してくれた…そいつが“有栖の神子”だとな…」

「こいつが？ だが、今までの神子とは、全く…」

「ああ…俺もそれが気掛かりなんだが…」

僕は2人の会話を何を思うでもなく聞いていた。頭の中ではただひとつの言葉が渦を巻いていた。

(…クローン人間…)

目の前にいる2人は、見事なまでに顔が同じだった。

四話 喋る白兔

瓜二つな兄弟というのは、本当に存在する。

生年月日は一緒だという兄・天田ツキヨミあまたのさんは、僕のペットシヨップに来たド派手なお兄さん。4色の髪は太古の人風に結ってあるけど。相変わらずジャラジャラした格好で、それでも実によく似合っている。

一方の忍者さんもと天田スサさんは、髪が短いのと帽子かぶってるせいで頭は推定2色。双子のお兄さんと違って装飾品は帽子と腰に挿した剣だけだが、それ以外は肌の色から睫毛の長さまでそっくりだ。

とにかく僕はその2人の間に挟まれて、『自分に何が起きたのか』を聞かされることになった。

「…というわけだ。トシキがこの世界に来たのには、ちゃんとした理由がある」

「なあんだそうだったんですか！。僕はてっきり、何かの事件に巻き込まれたんだと思ってましたよ」

「…へ？ は??」

スサは信じられないというような目付きで僕を見た。

「マジで！？ 信じてくれんの？」

「なんかさっきも同じこと言われたような…だって、それなら話が通るじゃん。僕の先祖はこの世界の神様の血を引く一族で、大昔に迫害を受けて異界…日本に移り住んだ。何事もなければそのまま日本で一生を終えるはずだったけど、ミラ国がいま問題を抱えてるために、神子である僕を呼び戻した。そこで僕を迎えに行ったのが」

僕は膝に乗せていたウサギを抱き上げた。

「この弥生っていう白いウサギさん。呼び戻したのは時環とかいう腕時計っぽい腕輪。どこか違うところある？」

「…ご名答…」

ツキヨミさんが眠たそうに答えた。

「にしてもさ、スサたちが搜してる神子って本当に僕で合ってるの？ 僕の体には『神子様の証』みたいなアザとかないし、異世界に呼ばれるのって普通中学生とか高校生とかもつと若いものでしょ」

「トシキは若い方だぞ。いつかの神子は72歳で呼び戻されて、ここで余生を送ったからな」

「ホントですかそれ！？」

まあそれはともかくとして、問題は…。

「それで僕がその『問題』を解決すれば、日本に戻してくれるって

わけ」

白ウサギさんが僕の手から逃れて目の前にちょこんと座った。

「その事で、お話があります」

「なに？」

「……………」

「……………」

その場を包み込む妙な沈黙。

「…あの…兎が人語を話しているのに、驚かれないんですか？」

「え？ あ、そうだね。ウサギが喋るなんておかしいよね。うわ、ウサギが喋った！」

「…トシキ…それ…わざとらしい…」

これは失礼。なにしろここに来て初めて出会ったのが『喋る猫』だったのだ。

「まあ喋っても珍しいことじゃない。弥生は精霊だからな」

精霊？ 精霊というとフェアリーとかピクシーとかエルフとかドワーフの仲間ですか。いやそんなことより…。

「それよりあのー、もし僕がその『問題』を解決したら、日本に帰れるんですか？」

「…帰れます」

「本当に!？」

やったー、と心の中で万歳三唱。

「…ですがいつ帰れるかは分かりません。神子様がミラ国に呼び戻されたのは、時環が神子様を導いたからです。ですから、時環が神子様を日本国に導かない限り帰れません」

「エ…」

「すみません…私にもよく、分からないのです。ただ『この国に災いが訪れる』という占いの結果が出て、『すぐに“有栖の神子”を迎えよ』と女王陛下の命令を受けただけなのです…神子様をこのような目に遭わせておいて何もご説明できず、本当に申し訳ございません…」

うわ、目が！ 目が赤くなってるよッ。それともそれは生まれつき？ なんにせよこんな可愛いウサギさんに、しよげられるとこっちが悪いことした気分になってくる。

僕は慌てて言葉を探した。

「とととにかくっ、僕がその女王様に会って説明聞けば、いつまでの滞在になるかも分かるんでしょ！？　だったらすぐ行こうよ！　どこのお城に行けばいいの？　交通手段は何で期間はどれくらい？」

「…期間は…半刻かららない…」

はい？

「お前が望むというのなら…今すぐ王城に連れてってやる…スサ」

「はいはい。じゃトシキ、茶道具と茶菓子退かすから、弥生抱いて花莫薩の真ん中に座って」

言われるままに弥生を抱いて真ん中に移動する。茶道具と茶菓子を両手に持ったスサは、花莫薩から少し離れた所に立つツキヨミさんの横に移動した。

ツキヨミさんが『ふう…』と息を吐くと、首にさげていた勾玉を摘まんで下唇に宛がった。

「…異界に生まれし有栖の神子…我が声を聞き、我が姿を見よ…さすれば影…」

びよわっ。

ビュオッでもビュゴッでもゴオッでもなく、びよわっ、という擬音とともに花莫薩が浮いた。

って、花莫塵が、浮いた!?

「な、なにこれっ」

「神子様、動かないでください! 動くと落ちて死にますよ!」

「死!?!」

「流れに身を任せてください!」

「…汝のもとにひれ伏せり…」

びよおおおおお!!

「うわぁぁぁぁぁ!」

僕は心の準備が何一つできないまま、大空へ飛び立っていった。

五話 さわさわわ？

僕たちが降り立ったのは、櫓や柵で守られた王都の、巨大な門の前だった。

どういう手段でここまで来たのか、ツキヨミさんとスサもすぐに追いついてくる。

「トシキ、大丈夫か？」

「…あ…ちよつと…無理…」

空飛ぶ絨毯ならぬ花萼座で飛ぶという慣れない移動手段によって、すっかり乗り物酔い（？）になってしまったようだ。フラフラの僕にスサが肩を貸してくれる。ツキヨミさんが弥生を抱き上げる。

「さて、参りましょう。不思議の集う不思議の国、ミラ国へようこそ」

僕はスサに支えられ、弥生はツキヨミさんに抱き抱えられて、一行は三列でメインストリートを進んだ。住民らしき人たちが深々と腰を折ってくれるのだが、いちいち返礼する気力もなく笑顔で返す。

王都は太古の国のような佇まいをしていたが、その住民たちは様々なタイプのものがいた。

ヒト型に限定すれば髪や肌や目の色は、実に多彩で非現実的だった。金髪碧眼のコーカソイドから、黒目黒毛のネグロイドまで。中にはスサヤツキヨミさんみたいに、どの国のどの人種ともつかない方々もいる。

ヒト型とは称しがたい方々としては、鳥の上半身&翼とライオンの下半身を融合させた生き物（グリフォン？）、子牛と海亀が合体したような生き物（ハーフ？）、上着を着たカエルに、道路を濡らしてデカデカと横たわる魚など。

「…蛙にサカナですか…」

服装はやっぱり太古の国のような格好で、男性は上着に丈の短いズボン、女性はロンズカが基本のようだった。その中に一際目立つ格好の人がいる。頭がカラフルで装飾品がてんこ盛りなのだ。

「…あの人は？」

「ちたの地田公爵夫人。この国の第二位の権力者だ。前国王が彼女の夫だったから」

「じゃあ、あの人は？ 隣で赤ちゃん抱いてる」

「あれは…、公爵夫人の料理女だろう」

何だかんだ言って、不思議の国なのね。

それにしてもなんでこの国の人は、みんな名字に『田の』がつくんだろう。ひょっとしたら田という字は多い名字の代表格で、中田さんとか本田さんとか田畑さんとかいるのかもしれない。姓に『の』

がつくのは平安貴族を気取っているのか、それとも…。

訊きたそうな僕を察して、ツキヨミさん、に抱かれた弥生が説明してくれた。もうすぐ城門に辿り着くという頃合い。

「このミラ国は王の直轄地と、八の豪族の領地に分かれてるんです。姓は名田…土地の名前です」

あれ？ 弥生の名前には…。

「ツキヨミ様とスサ様の場合、乾の方角にある天田を治めていらっしやる豪族の出ですから天田あまたのとお呼びします」

僕たちは何事もなく進み、幅80メートルはあるメインストリートを歩き抜いた。沖縄にある守礼門そっくりの門が開かれる。

「…うつわ」

このとき僕の頭の中では確かに、雪の中からドングリを探すエゾリスと、ざわわざわとサトウキビ畑を駆け抜ける風がシンクロした。

首里城、に雪って降り積もってていいんですか？

「…あのさ、僕もう何をどう言ったらいいのかわかんなくなってきたよ」

「何を仰らずとも、ここが神子様がしばらく御滞在になる王城でございます」

引っ掛かる単語を聞いた気がする。

「しばらく！？　僕はそんな長い間あそこにいるの！？」

大変なことになってきた。このままでは間違いなく単位がとれない。もしかしたらしばらくの社交界デビューどころか、どこかの山奥で滝に打たれて修行するはめに遭うのかも。

「一応、神子の宮も城の奥にあるからな。さて、参りますか」

地獄の1日が始まるうとしていた。

六話 クノイチ見参

王宮最奥にある宮にある一部屋、鏡の間。

その部屋でひとり集中を高めていた女の目がゆっくりと開いた。

「…ついに来たか」

女は鏡を覗きこむ。映っていたのは自分の顔ではなく、ひとりの男だった。

見知らぬ衣をまとい、庭園をさまようように歩いている。

「いま迎えに行つてやるぞ。“有栖の神子”よ」

そして女は衣を翻して部屋をあとにした。

十々十々十

「みんなあー、どこいつちゃったのおく？」

吐き気がピークに達して慌てて教えられたトイレに駆け込んだのだが、誰ひとりとして待っていてはくれなかった。

雪景色に映えるようにして、道なりに椿や梅や寒木瓜や水仙が咲いている。綺麗だなあ。

（つて、感心してる場合じゃないぞ僕！！）

半袖で寒いし、王宮だというのに人っ子一人いない。『異界人、王宮に忍び込んで凍死す』とかいう見出しを考えてしまい、最悪の事態を想像してしまった。あまりの寒さに思考まで凍結しそうだった。

「なにをしているッ」

凜と涼やかなアルト声が響き渡るまでは。

「はへ？」

「男のくせに剣も持たぬとは何事か！」

「は？ い？」

「受け取れっ！！」

受け取れと言われましても、あなたは一体どこにいらっしやるんですか？ 訊こうとして足元に何かが刺さった。先も鋭利な短剣だ。

「ひっ……！」

「覚悟……！」

その声と共に屋根から飛び降りた人影を見て、僕はその場にへたりこんだ。

（クノイチ……！）

相手の持っている直刀は、剣というより活きのいい太刀魚みたいだった。

そりゃないよお（涙）武器からして相手の太刀魚の方が殺傷能力も高そうだし、それ以前に使い手のレベルにも格段の差が。

振りがざされた影が額に落ちる。僕はぎゅっと目を瞑り、唯一の武器・短刀（たぶん鉄製）を握って、幽霊でも追い払うみたいにブンブン振り回していた。

キィイーン！

と金属のぶつかり合う音がしたかと思うと、ぽこつ、と僕の頭に何か当たった。恐る恐る目を開けると相手の太刀魚は頭の部分が取れており、そいつは僕のお尻の側に落ちていた。

まさか！ こんな短刀が！ あの太刀魚を！？

「どうかしたのかトシキ！」

「どうなさいました神子様！」

今まで僕を放ったらかしておきながらに、双子がこっちに駆けつける。雪と同系色で見分けがつきにくいのが、弥生も跳び跳ねてやってくる。

「…神子様…これが？」

コレとは何ですかコレとは！ と抗議するよりも早く、僕の頭では彼女の顔を、よくよく観察中だった。

……。…4色の髪、この肌の色、この睫毛の長さ…まさか…まさか…もしかして？

「姉上！」

「姉上！？！」

弥生以外のどちらが叫んだにしろ、結局は2人のお姉さんだ。しかし見た目に歳がそう変わらないような…。双子じゃなくて、彼等は三つ子だったのか。

僕が驚いて口に出す前に、弥生が雪の上にひれ伏した。

「女王陛下！」

「女王陛下！？！」

三つ子ショックが抜けきれないまま言ってしまい、なんともすっとなきような声になってしまふ。この、たいして僕と歳が変わらないようなクノイチさんが、この国の最高権威だつてえ！？

「ミラ国へようこそ、“有栖の神子”様。あたしはこのミラ国女王、天田ヒルメです。あたしの占いで『災いが起こる』と出たから、神子様をお呼びすることになったの」

「じゃあ僕はあなたのお陰で…うー、いや、えー、女王陛下」

「どうか『ヒルメ』とお呼びください」

2色の髪に帽子に剣、三つ子の末っ子が割って入る。

「とにかく、こんな場所で立ち話もなんだし、中に入ろうぜ。特にトシキ、その格好で寒くないのか？」

「へ？ は…はつくしよん！！」

恐怖とはまた違う鳥肌を立てて、僕は思わずくしゃみをした。

七話 ストーカーの正体

建物に入って男女の召し使いらしい人たちに囲まれた僕たちは、弥生を抱いたヒルメさんと引き離されて奥まった部屋に押し込まれた。

「あの…えつと…」

「こちらで、お召し替えを。お湯の準備は調っております」

どうやら汚い格好でお城をつろつくな、ということらしい。そりやそうだ。下水に流された挙げ句、忍者とクノイチ…親王様と女王様に2回も襲われたんだから。

お湯のたつぷり入った石造りのお風呂に、肩まで入って夢心地。体を拭いて次の部屋に行くと、広い部屋の広いテーブルの上に新しい服が用意されていた。

「これ、着るの…?」

服をつまみ上げようとしたとき、ツキヨミさんに手首を握られた。

「…トシキのは、反対側のだ…」

「え? ああ、うん…」

一番上にあった絹の布を持ち上げると、それは上着の一種らしかつ

た。

「…なーんでここでもエプロンなのさあ」

「一応、それが神子の正装なんですね」

ズルズルしたズボンと薄いシャツ並みに薄い着物、青くて裾の長い上着、そして例のエプロンで一揃いのようだった。

エプロンの紐を結んだところで、扉の陰からスサが呼び掛けた。

「着替えは済んだかトシキ？」

「うん…」

返事をする、扉が全開された。

「じゃ、ご対面」

扉の向こうには…おそらく正装なのだろう、古代風ドレスに着替えたヒルメさんと、ちよっと年下くらいの可愛い女の子が佇んでいた。

「まあトシキ、よくお似合い！」

ヒルメさんが心底嬉しそうに手を叩く。こちらはさっきまで同じような格好してたんですが。

「お、お美しいですヒルメさん…。…そういえば、弥生は？」

キョロキョロと足元に白いモコモコを探す。いない。

ふと、ヒルメさんの側にいた女の子が僕から視線を逸らした。心なしか目が赤い。

……。まさか。

「まさか…弥生??」

スサが僕の肩に腕を乗つけてきた。

「ただの兎なら喋るかよ。弥生は精霊だって言っただろ?」

確かに言われた。2時間か、半日前くらいに。

『ただの猫なら喋るかよ』

同じフレーズが頭の中で再生される。

そうだ、あのトラベえ。もしあの猫が精霊だとしたら、あいつも…。

「トシキ、あちらもご覧になって。あれがあたし達の聖地、大御神殿の光よ。貴方の遠いご先祖の、唯一お声を聞ける場所」

その、狼さんだか三上さんだかいう人は誰ですか。窓の向こうには山肌が広がり、頂上付近に灯りが見える。全面鏡ばりなのか真昼の日光を反射して、眼に痛いくらい強く瞬いていた。

だが、そのご先祖様^{おじいさま}偉い神様のお告げだか言葉だかのせいで、僕はここまで連れてこられたのだ。

「…本当に神子かどうか分からないってのにさ」

「神子様、この廊下は展示室も兼ねておりまして、この国を見守ってくださる神々のお姿を飾っております」

延々と続く廊下にはよくある甲冑の代わりに、ルーブル美術館に展示してあるような、以外にも台座に乗った石膏像が8体ばかり置いてあった。

どれもこれも精密に彫られていて、ルネサンスの彫刻並にリアルに出来ている。

「天上に帰られた順に手前から並んでおります。こちらが大浦須命様、天と夜空を司る神でございます」

「天空神かぁー。やっぱりこの国でも似たようなカミサマ考えるもんだね」

「こちらはおおびなすのみこと大美成命様、沢と貧富を司る神でございます。そして大おあ丸素命様、火と戦争を司る神です。大透瑠命様は雷と武器の神。大おあ竜見命様は風と疾病の神…」

「…なんかだんだん不吉な神様になってきてない？ もっとうこう愛と美の神様とか、お酒と娯楽の神様とかいないの？」

「…さあ…この国にはこの八大神と大御神しか…伝わってないからな…」

「おおつちかけのみこと大土欠命様、水と災害の神。 おおさたんののみこと大佐丹命様、山と死者の神。 おおがいの命様、地と冥土の神…」

やっぱりだんだん不吉になってく。

服装は袈裟か貫頭衣がメジャーらしく、髪も全部が長髪だった。半分くらいは女性だったし、半分くらいは少年少女としかいえないような年格好の神様もいた。

「そしてこちらが、神子様のご先祖にあらせられる、大御神様でございます」

この像だけは、完璧な形で彫られてなかった。ミロのビーナスみたいに両腕がなく、サモトラケの二ケみたいに頭と片翼がない。しかし胸にしっかり押し出された膨らみからすると、この偉い神様は女性、いや女神なのだろう。

「これじゃご先祖様って言われても、似てるかどうか分からないよ。名前は？」

「御名はみだりに口にできないのです」

「あ、そ、そうなの？」

なんて狭量な神様なんだ。

罰当たりなことを考えたと思う。すべて自分に跳ね返ってくるとも知らずに。

「とにかく、分からないことは全部弥生に訊いてくれればいい。お前の“影”だから、基本絶対服従だし」

「…ところでトシキ…昼餐の準備が調ったようだ…」

「昼餐？」

それよりツキヨミさん、なぜにあなたは昼間だというのにそんなに眠たそうなんですか。続きはスサが答えてくれた。

「これから世話になる連中の顔くらい覚えなくてどうする。料理は全て弥生の指揮のもと作った。お前の国でかなり料理を勉強してきたみたいだしな」

「僕の国で…？ あ…！ じゃじゃじゃあ毎日毎日料理持ってきてくれてたのって…！」

弥生は跪いて頭を下げた。言われて気が付いたが弥生の腕には、僕がいつかあげた小さいピンクの腕時計がある。

「お察しの通り私でございます。数々のご無礼をお許し頂きたく、あちらにて料理修行をしておりましたが…やはりお気に召さないところがおありだったでしょうか」

「お気に召さないどころか！」

美味しかったですとも…！！

八話 猫、再び

これは本当にお食事会なんですか？

床に直に置かれたお盆を見て、僕は率直な意見を口にした。

「お昼ご飯というより、キャンプファイアみたいだけど」

そこには先客が3人いて、トランプの裏面みたいな幾何学模様の服を着ていた。たぶん彼らも正装なんだろう。ツキヨミさんが耳元で囁く。

「…トシキ。左から順にいつて…ニイ、ゴオ、ナナだ…」

「あ。ども、コンチハ」

挨拶すると一同が僕を見て深々とお辞儀した。…って！

「え？ それ本名なんですか！？」

「奴等は一応爵位持ちじゃないからな」

どうやら公爵位じゃないと名字がつかないようだ。だからってニイ、ゴオ、ナナはないでしょ2、5、7は。そういうところは理解したい。というか、身分って難しい。

カマドの鍋料理を囲むのは8人。席順は若い方から時計回り。

神子の“影欠片”精霊の弥生、神子の僕・有栖利輝、三つ子の次男・天田スサ、三つ子の長男・天田ツキヨミさん、三つ子の長女・天田ヒルメさん、巫女見習いにあたるらしいナナさん、僧兵にあたるらしいゴオさん、同じく僧兵のニイさん。

そういうわけで僕に怪我（といっても掠り傷）を負わせたスサと、食事をするにも気もそぞろ、な弥生（人間形）に挟まれて、8人は身も心も温まる寄せ鍋をついついているのだ。

「はああやつぱりお鍋はいいなあ。向こうじゃ鍋料理なんて、あと半年経たないと食べられないと思ってたから」

向こう、って。僕は日本人じゃなかったっけ？ 自分の国籍を忘れそうになる。

「それで、神子様。神様はどんな国でお育ちになられたのですか？ 私どもの国とは、どのような違いがあるのでしょうか」

弥生が白菜を箸でつまみながら、無邪気にそう訊いてきた。特にモテ期のなかった男子四大生は、その笑みに体温が2 ばかり上がる。

「ど…どうっていても、特に変わったところもないデスが。ああでも、こことは随分と違うデスよ。魔法を使う人もいないし、もっと文明が進歩してるし、みんな名字もってるし、精霊さんもいらっしやらないデスし…」

自分でも何言ってるのか分からなくなってきた。

弥生は見た目にも分かるくらいしょんぼりする。

「そうですね…あちらの世界に精霊はいらっしゃらないのですね」
民族や能力や職業によっては、妖精とか幽霊とか見える人もいるのですが。哺乳類の肉をつまんだスサが、いかにも適当に割って入ってきた。

「そんなことより、トシキもなんか訊いた方がいいぞ。あつという間に夜になっちまうから」

本当に夜になってしまった。

（はあ…本当に何なの、この世界）

神子の宮、と呼ばれる一室にあるふかふかベッドの中で、僕はこれまでとこの先の我が身を想った。
どうするどうなる有栖利輝!?

（本当に夢じゃないの？ 今時RPGにだってこんな世界ないよ。半獣人の精霊さんはいるし、ツキヨミさんには空飛ばされるし…魔法使い？ そういえばスサは兵士みたいだな。魔法を使うイメージはない…ヒルメさんは…さっきの巫女見習いさんと同じ雰囲気だったな。神様と交信とか出来るのかな）

頭でごちゃごちゃ考えてるうちに、すっかり眠れなくなってしまった。何か暇潰しできるものがあればいいのに。

「テレビ無いしゲーム無いし、ケータイ日本に置いてきちゃったし
〜イ」

それ以前に電気もガスも水道もない。車もそれほど走ってない。

「…ベッド…めちゃくちゃ大きいし…」

ゴロゴロ転げ回っても落ちないほど、この部屋のベッドは広がった。
あまりに広すぎて淋しいくらい。こんなとき仔犬でも抱きしめれば、
夢の世界に行けるかもしれないのに。

せめてクッションかぬいぐるみでもないかと部屋を見渡すと、窓の
ところに黒い影があった。

……………ん？

黒い影？

「よう、無事に到着したみたいだな。有栖利輝」

この聞き覚えのある声は。この見覚えのあるシマシマ模様は！

「あーッ！　トラベえー！！」

「おいコラ、トラベえってのは誰のことだトラベえってのは。はじ

めにちゃんと名乗ったろが。オレはチエシヤ猫」

そうだ、チエシヤ猫。思い出した。思い出したというより忘れてた。

「お前に忠告があつて来てやったんだ」

そう言うとチエシヤ猫はぴょんと窓枠から降りた。これであの性格じゃなければ、抱き締めたくなるような可愛らしさなのに。

「忠告？」

「有栖利輝、弥生兎にあまり心を許すな」

.....。

「へ？」

「弥生兎はお人好しで捕まりやすい。いつ誰かの術にかかって、お前を殺しに来ないとも限らない」

「ちょ、ちょっと待って。弥生が何だつて？ あと『術』とか『殺しに来る』って何...」

首に微かな痛みが走ったのは、重要な質問の途中だった。

九話 光る腕時計

「ちょ、弥生！ どうしたの！？」

「トシキ！ 大丈夫か！？」

身の危険を感じて外に出た僕に、ツキヨミさんとスサが駆けつけながらそう訊いてきた。けど。

「大丈夫なわけないでしょコレがー！！」

弥生は身の丈に余るような大鎌を、これでもかと軽々と振り回していた。僕めがけて。僕に何の恨みがあるんだ。間にスサが入り込んでくる。

「スサ？」

「トシキ、ごめんな！」

「ぐえっ！」

スサは腹部に強烈な蹴りを入れて、僕をツキヨミさんのいる場所まで蹴り飛ばした。

「…トシキ…大丈夫か？」

「…無理…」

「すまない…まさかこんなに早く狙われるとは…とりあえず…」

ツキヨミさんは首の勾玉を下唇に当て、何かを唱え始める。

「…異界に生まれし有栖の神子…我が声を聞き、我が姿を見よ…」

フアアアアア…。

あくびでもリコーダーの『フア』の音でもなく、その擬音で僕たちを暖かい風が包んだ。視界が微かに緑色になる。まるでわんこになった気分。

「目眩ましの術だ…これでしばらくは見つからない」

「ねえ、スサは！ スサは大丈夫なの！？」

僕は（たぶん）逃がしてくれたんだと思うスサを探した。緑色した視界のすぐ傍で、大鎌を持った弥生と闘っている。

弥生の持つ大鎌は、タロットカードの死神が持つてるような巨大さで、華奢な体には似合わないそれを、弥生は巧みに操作していた。

スサの表情はよく見えないが、スサは攻撃を避けてばかりいる。押されてるみたいだ。

「スサ押されてるよ！？　どうなっちゃってるの？　僕、弥生にどんなマナー違反やっちゃったの！？」

ツキヨミさんは特に顔色を変えるでもなく説明してくれた。

「…作法違反はやってない…弥生は今、術にかかっている」

「術？」

「ああ…トシキを殺すようにと、誰かが弥生に術をかけたんだろう…」

「え、でも弥生は…」

「ああ…弥生は間違いなくトシキの“影欠片”だ。“有栖の神子”には絶対服従、守りこそすれ、危害を加えるようなことがあってはならない」

「じゃあ、なんで」

ツキヨミさんは少し悔しそうにした。下唇を軽く噛む。驚いた。彼もこんな表情を見せるんだ。

「…精神破壊術を使えば…できなくもない」

「精神破壊術？」

「ああ…文字通り精神を破壊する術だ…。辛い記憶を一気に引き出し、精神に一気に負荷をかける…。これが人なら気を紛らすスベを

持つが…精霊の場合は気を紛らすどころか体の自由を奪われる…。
死にも勝る負担をかけられ、ひたすら精神を破壊される。…そこに、
ひとつの救いを差しのべる」

「救い？」

「『命令を聞けば助けよう』と取引をする」

スサは攻撃もしないが、離れることもしない。自分に弥生を引き付け、僕たちに意識を向けさせないようにしているのか。

「取引…なんで、それで命令を聞くの？ 自分を追い込んだ人間の言うことを…」

「それは…相手を救世主だと思うからだ」

「救世主？」

「今にも死んで消えたい自分に、たったひとつの希望を与えた救世主だと錯覚する。善悪の判別もできない」

弥生に、少し変化があった。

動きが急に鈍くなり、振り回してる鎌の勢いが弱くなる。

「そして命令を聞くと、遂行するまで止まらない…その先に死が待っていたとしてもだ」

胸の中に、何とも言えない虚無感が広がってゆく。僕はぎゅっと手を握り締めた。

「…どうにかならないの、それ」

「それ…とは、何だ。トシキ」

「なんとかして、弥生を止めることはできないの？」

「…心を、治すことを…か？ それは…あ」

「え？ なに？ なにか方法あるの！？」

ツキヨミさんはただ首を横に振って、僕の手首を見ている。それに
つられて僕も手首を見た。

「…なに…これ…」

「…この、光は…まさか…」

僕の手首は“時環”と呼ばれている、腕時計タイプの黒い腕輪を装着していた。こっちに来たときツキヨミさんに渡され、ずっと着けていると言われたものだ。

でもなんで、その文字盤が『受信しました』とばかりにピコピコ光
ってるの？ 頭の中が真っ白になる。

「っ…!!」

「ちよっ、トシキ！ 何を…」

＋＋＋＋＋

ツキヨミが何か言っている。しかし利輝にはほとんど聞こえていなかった。ただ遠くで人の声がする、くらいにしか思えなかった。

利輝はいつの間にか走り出していた。自分でも制御できなかった。まるで足が勝手に動いているかのように、全速力で走り出していた。その向こうにはスサと、大鎌を振り回してる弥生がいた。

利輝の視界は緑の靄が消え、クリアになっている。もうツキヨミの術は効いてないようだった。

自分を守ってくれているものは、もうない。このまま進めばあの鎌に首を跳ねられるかもしれない。しかしそれでも、利輝は走った。弥生のもとへ。

スサは自分たちめがけて走ってくる利輝を見つけて、目を見開いた。

「なぜ…！？ ツキヨミはどうして止めな…、つつ！」

避けきれなかった鎌がスサの頬を掻き斬った。

ツキヨミは利輝を止めようとした。だが、止められなかった。

利輝の手首で点滅する時環…あの輝きは間違いなく『神子の力』の光だったのだ。

（…トシキなら、助けられるかもしれない…）

だがどのみち助けたところで、弥生の運命は決まっている。あの女王がそんな慈悲を、精霊にかけるとは思えない。

（…どうして…行かせてしまったんだ…）

しかしツキヨミは追いかけなかった。緑色に霞む目眩ましの向こうで、走る利輝の背中を見つめるだけだった。

十話 神子の力

僕はといえば、まるで首里城のどこかに迷い込んだみたいだった。

しかし季節が違う。むしろ空気が違う。足で踏みしめてるのは雪ではなく軟らかな土だったし、僕がホイホイ歩いてた王宮より、ずっと蔵かで観光客も恥じて逃げ出しそうな場所だった。ついさっきまで雪の中にいたのに、ここはどこだ？ どの何月だ！？

「…あれ？ あの池のそばにいるのって…」

『声を聞いて』

「うわっ、だ、誰！？」

『私を見て』

「見てと言われましても…」

『そうしたら、あなたの言うことを聞くから』

「…あのー、あなたは一体どちらにいらっしやるんでしょうか」

『あなたのそばに』

へ？

『目の前にいる精霊の子供が私』

！？ まさか…！

+++++

「なんだこれ…どうなってんだ」

大鎌を持った弥生を、利輝が抱き締めていた。弥生は抵抗するように身動きしてるが、利輝に離す気配はない。

そしてなにより、2人は光に包まれていた。その光は利輝の時環から発せられているようで、文字盤が眩しいほどの光を放っていた。

「…なぜ…こんなことに…」

ツキヨミが術を解いて2人を見る。鎌は利輝の首にかかっているのだが、弥生に力を入れる様子はない。

「…これが“有栖の神子”の力なのか…？」

スサは誰にでもなく呟いた。

+++++

目の前にいたのは、女の子だった。

弥生によく似ている。けど女の子は弥生よりも小さかった。幼少時代：だろうか。ヒト型になるのも未完全で、両方の耳がウサギのもだった。

…バニーガール？

「ふざけないで頂戴ッ！！」

僕のふざけた考えは、そのキンキン声に相殺された。弥生は耳を塞ぎ、ただでさえ小さな体をさらにちぢこませる。

「あまつさえ、引き取ってきたりなんかして！　ここまで育ててやったけど、もう限界よ！！」

『…やめて』

聞こえないはずの弥生の声が聞こえた気がした。だが、その声は。

(さっきの声…)

「あの精霊に言ってやるわ！ あんたなんか“有栖の神子”の“影欠片”じゃないってッ」

『言わないで』

「せっかく“有栖の神子”に取り入る機会だったのに、ただの精霊だったなんて口惜しい！」

『お願いだから…』

「あんな精霊、いない方がいいのよ！ 今すぐ捨てて!!」

「……………」

僕はどうしたらいいのか分からずに立ち竦んでいた。

女の子の涙は苦手な方だが、泣かなくてもこんなに気まづくなるとは思わなかった。第一声は？ やっぱり頭とかは撫でた方が子供の教育にいいのか!？

すっかりパニック状態だ。

(どうしようどうしようどうしようどうしよう!…!)

『声を聞いて』

「うわまただ弥生の声!」

『私を見て』

「あれ？ さっきとおんなじこと言ってる…」

『そうしたら、あなたの言うことを聞くから』

言うこと聞く？ どういう意味だろう。とにかく今は、この子を慰めるのが先だ。

けど。

(ど、どうしたらいいんだろう)

『名前を呼んで』

名前？

『…と呼んで』

(え？ だって弥生には…)

また女性のキンキン声が響く。ウサギ弥生のあの大きな耳じゃ、塞ごうにも塞ぎきれないだろう。

またも体をちぢこませる。恐怖ではない、逃避…弥生はその声から逃げようとしていた。

『助けて』

「……………」

『助けて!』

「……ッ!」

僕はおずおずと弥生に声をかけた。

「…あ、あの…」

弥生が、ハツとして僕を見上げた。完全にヒトになりきれない赤い目は、期待よりも恐怖の色が濃い。

僕は弥生が池に落っこちないように、背中から抱き締めて引き寄せた。

「泣かないで…そんなに可愛い顔してるんだから…ね?」

「ジャック」

+++++

「な、何だよこれえ！」

「スサ！ 大丈夫か！？」

「俺は大丈夫…でもトシキが！」

2人は手を翳しながら会話していた。利輝と弥生を覆っていた光が、突然吹き出したのだ。眩しすぎてとても直視できない。

「くっそー何なんだよまったく！ トシキ、無事か！？」

「大丈夫だ…多分。俺も“有栖の神子”の力を見るのは初めてだから、何とも言えないが…」

そうこうしているうちに、光が徐々におさまってきた。目映すぎる光のせいで影さえ分からなかった2人の姿が、ぼんやりと見えてくる。

「トシキ！ 大丈夫…え？」

駆けつけた兄弟は足を止めた。

利輝と弥生は…横倒しになっていた。しかし悪い方向には行っていない。

泣きじゃくる弥生の頭を抱えるようにして、利輝は弥生を抱き締めていた。弥生もその胸に顔を埋め、利輝の背中に腕をまわしている。巨大な大鎌は、誰の血に赤く染まるでもなく2人の側で横たわって

いた。

「…どうなっちゃってるの？ これ」

スサは訳が分からずに呟いた。

「…さあ…？」

ツキヨミも訳が分からないといった様子で反応したが、その表情は柔らかなものだった。

弥生にかけられていた『精神破壊術』は、どうやら完全に解けたようだ。

十一話 弥生の危機

誰かが体を洗ってくれて、誰かが部屋に運んでくれた。誰かに着替えさせてもらい、誰かにベッドへ寝かせてもらった。

そして誰かが、夢の中で僕に語りかけた。

声を聞いて。私を見て。

そうしたら、あなたの言うことを聞くから。

私を見て。名前を呼んで。

そうしたら、あなたは天の力を受け継ぐから。

「…我が影をとらえ…我が名を呼べ…さすれば汝…」

「なんの術をかけてるつもりだ」

ぼんやりと天井が見える。覗き込んでくる2色の髪。半ば呆れたような表情で、スサが溜め息をついている。

「…僕…死んだの？」

「…死んではいない…」

ここだけしか相違点のない4色の髪。ツキヨミさんがやはり溜め息混じりに、ベッドに座る僕のもとに近寄ってきた。

「…死にかけていたところを、冥土の途中から引き戻してやったがな…」

「死にかけてた！？　ねえ僕、し、し、死にかけてたの！？」

だろうと思った。あの大きな鎌に突っ込んで、無事に済むはずがないだろうから。

それにしてもあんな鎌に真つ二つにされたにしては、縫い目も目立った傷もない。意外に頑丈にできているのか、それともこの最先端医療で、驚異の治療を試みたのか。

「なにしてんだ？　トシキ」

恐る恐る首を指でチョンチョンしていると、どこからか鐘？　のような音がした。『火のー用ー心ー』と言わんばかりの、カンカンカンとけたたましい金属音だ。

「なんだろ。どっかで火事でも起きたのかな」

「ああ、弥生の処刑が始まるんだろ」

「ああそ。弥生の処刑…えええええッ！？」

まさか。

「処刑って、ま、まさか弥生、電気イス…あつ、電気イスこの国にないか。てことはこつ、絞首刑にされちゃうの!? 十三階段で首絞められちゃうのっ!？」

「絞首…首を絞められることはないと思う」

「…首は跳ねられるけどな…」

イメージ映像、ギロチン台に向かうマリー・アントワネット。

「でででもっ、弥生は誰かに操られてえっ」

「…証拠がない。トシキ、神子に危害を加えたら、それは反逆としてとらえられる。ましてや姓も位もない精霊だと、十中八九、命はない」

「…それにこの国では…王と神子の命令は絶対だからな…」

「じゃあ僕が『処刑反対!』って言ったら、弥生の処刑は取り止めになるんだね!？」

「そういうことになるが…って、は？ トシキ??」

僕は寝癖も寝間着も気にせず、ベッドを抜け出し駆け出していた。

＋＋＋＋＋

『おや、まだ若い精霊だよ』

『一体何をやらかしたんだい？』

『どうも神子様を刃物で襲ったらしいよ』

『まあ恐ろしい…』

両手を後ろに縛られ、縄をかけられて、受刑者は人垣の中央に連れていかれた。

正座し、頭を地面に垂れ、弥生はその瞬間を覚悟する。

（さようなら…神子様）

金属が太陽の光を反射した。

その時。

「その処刑、待ったああああッ！！」

…寝癖の酷いまま現れた利輝の声がこだました。

+++++

お盆、茶葉、お茶セツト。

千利休でも現れそうな茶室の中で、僕たちはお城カフェ（？）を満喫していた。

「やれやれ、寝癖は直してくれたんだな」

「この国に裁判所と弁護士は無いの!？」

まさか、とツキヨミさんが呟く。

「…それは一般民の話だろう…精霊に人権は無いからな…」

「人権がないイー!？」

「うーん、精霊は基本的に奴隷階級だからなあ…」

「ど、奴隷階級ウー！？」

そんなあー。不思議の集う不思議の国では、人としての権利はどうなっているんだろう。

「コイツの名前の由来、知ってるか？ 本名なんていちいち気にしてらんねえの。獣型の姿が弥生兔だから『弥生』。俺たちが勝手につけた名前」

3月ウサギじゃダメなんですか？

という質問はできなかった。スサが咄嗟に剣柄に手を伸ばし、ツキヨミさんのおネムな目がカツと見開いたのだ。膝に抱えた弥生のウサ耳もピクピクしてる。

「な、何…？」

一拍後、四角い扉の向こうから、悲鳴と大勢の足音が聞こえてきた。一体何があったんだろう。

「失礼致します神子様！！」

壊れるくらい乱暴にドアを開けて、兵士が部屋に駆け込んできた。驚いたことに彼とは初対面ではなかった。昨日、一緒に鍋をつついたニイさんだ。

ニイさんは僕の他にスサやツキヨミさんも一緒にいたことで、険しい顔を一気に驚愕の色に変える。

「もっ、申し訳ございません！　このようなお見苦しいところを」

「構わない。手短に話せ」

「はっ、では申し上げます！」

ニイさんは刃を背に回して片膝をつくと、顔を近づけて低く言った。

「落ち着いて聞いてください。ナナが謀反を起こしました」

「謀反！？」

て、反乱のこと？　ナナという名前も初めてではなかった。やっばり一緒に鍋をつついた、巫女見習いのお姉さんだ。

「ゴオの軍を操って神子様のお命を狙っております。ここは私が足止めますから、神子様は大御神殿へお逃げください」

「えええ！？　じゃあスサもツキヨミさんも、今すぐ逃げなよ！」

「なーに言ってるんだよ」

スサもすらりと剣を抜いた。

「こんなときのために俺たちがいるんじゃないか」

ツキヨミさんも頷いて立ち上がる。

「大御神殿まで続く避難路がある。この様子だとそっちの方が早い

な。弥生！」

「はい！ 皆様、こちらです！」

僕たちはウサギ弥生を追いかけて、その避難路とやらに駆け出した。

十二話 大御神

大御神殿への避難路は神子とその“影欠片”しか通れないということとで、スサとツキヨミさん達とはその入り口で一旦別れた。

弥生に案内されながら避難路に駆け込むと、前方に光が見えてきた。弥生はぴよいらとその光の中に消え、僕はにゅっと片手を出す。手だけではない。じたばた手を動かした後、頭を出し、上半身を出し、そしてようやく全身抜け出した。

「…やっと出られた！！ せま、狭すぎでしょここ！ 桃太郎ってこんな感じだったのかなッ。あー空気が美味しいー。腰が痛い！ 頭も痛い…って、あれ？」

弥生はいつの間にかヒト型になっていた。しかもちゃっかり服を着用している。

「大御神様…どうか私どもをお守りください」

ここが目に痛いほどピカピカ光ってた理由が分かったぞ。

大御神殿はあの首里城風の王宮とは違って、白い石の柱が立ち並んでいた。壁も欄間も全部ガラス、急傾斜の屋根もまたガラスでできており、奥の方だけ壁ではなく人工の滝がサーサー流れている。

…どついう技術で造られたんだろう。

「…昔々のことです」

祈りを終えた弥生が僕に振り返った。

「この世界が金剛石の時代だった頃、人も動物も精霊もみな幸せ一杯、とても仲良く暮らしていました」

金剛石？　金剛石というとダイヤモンドですか？

「1年中がいつでも春で、食物も満ち足りて平和があふれていたからです」

「神話だね」

「そうですね。…やがて、世の中が黄金の時代に入ると、暑さ寒さの四季ができ、人々は自分で畑を耕し、せっせと作物の取り入れをしなければならなくなりました。こうなると…」

「他人の物を盗んだりする人も現れて、何かと争い事が起こるようになる？」

「はい。それが白銀の時代です」

なるほど。そういう神話はクオリティーの差はあるにせよ、ゴマンとはいかないまでも、各文化にひとつは残っているだろう。それが“不思議の国”なら尚更だ。弥生がポツポツと続きを語る。

「人々が争つのを見た神々は、次々と天上にお帰りになられました。

けれど大御神様だけはお望みを捨てず、下界に踏み留まって平和と正義を人々に説きました」

「…それで？」

「…しかし青銅の時代になると人間は武器を作り、国を攻め友人どうし戦をするようになりました。大御神様もこれには我慢がならず…」

『この世に金剛石の時代が戻るまで、決して地上には戻りません』

「…そして片方だけ残った翼を広げ、一条の光となって天上にお帰りになられたのです」

「え？ でも、“有栖の神子”は…」

「はい。有栖の神子は間違いなく大御神様の血を引く者です。大御神様はご自分の両腕、片翼、頭部、血液から神子様をお創りになられました」

ああ。それである石像には、首から上と両腕と片翼が無かったんだ。ひとこと言おうとしたとき、ドアがバーンと開く音がした。踏み込んでくる様子からして、見方だとは思えない。

何よりもまず、先頭にいたのは…。

「ナナさん！？」

「…身体はな。今は少々借りておる」

じゃあんたは誰だ、と訊く前に答えてくれた。

「ミラ国王、天田ヒルメと申す」

「……………」

僕が理解するまでに数秒かった。

ナナさんの体を借りて、謀反を起こしたのはヒルメさん。ヒルメさんはこの国の女王様。じゃあなんだって反乱なんか起こしてるの？ 誰に向かってクーデター？ 僕の頭はパニック状態。

パニックに陥ってる場合じゃないぞ。明らかに焦点の定まってるない（多分、操られてるから）ゴオさんと僧兵さんたちが、一斉に僕たちを取り囲んだ。

どうする！？ どうするよ僕！！

せめて女子供は逃がそうと、兵隊さんの様子を窺いながら、弥生の手をこっそり探してみる。けれど逆に弥生に腕を掴まれ、思わぬ力と遠心力で円の外に放り出された。

僕を、助けて？

「弥生ッ」

「…俺の向こう側は外に繋がっております。…どうかお逃げください」

弥生は赤い目で僕を見て、微笑んだ。生まれつきなのか涙目だからなのかは考えたくない。

「…2度も命を救って頂き、とても嬉しゅうございました…」

僕は滝の中に突っ込んだ。

「弥生いッ!!」

弥生の姿が見えなくなった。

視界はブルーとシルバーに染まり、あらゆるものが見えなくなる。

呼吸をしなくてはと肺と脳が酸素を求めるのだが、息は喉と鼻から送られてこない。

心臓は倍速で血を送り、鼓動の位置がハッキリなくなる。

三半規管のもつと奥で、懐かしい声が訴えてくる。

我が名を呼べ。さすれば汝、天の力を受け継がん。我が名は…。

「ジャック!!」

その後は、分からない。

十三話 神子vs女王

弥生が一瞬にして消え失せた。

と思うと、滝の向こうからゆったりと歩く人影が見える。

「…有栖の神子…！」

利輝は…利輝だった。しかし雰囲気が違う。むしろ人相も違う。人のよさげなプチャレ目が、威嚇中の猫のようにつり上がってる。

「っ、何をしている。こやつを切り捨てよ！」

ナナの体を借りたヒルメの命令で、術に操られた僧兵たちが雄叫びをあげて襲いかかる。

と、利輝の手元に変化が起きた。

唯一与えられている武器、ヒルメと格闘したときの短剣が、正宗の名刀よろしく日本刀の形に変化したのだ。

「なっ…！」

そして襲ってきた各人の剣や矛を切り捨てる。

「な、なんと…！？」

青銅は、鉄よりも柔らかい。ともすれば相手は弾丸でさえも真つ二つにする日本刀だ。文字通り太刀打ちできるはずがない。

「くっ…」

武器では話にならないと思ったのか、ヒルメは僧兵たちの術を解く。兵士はふにやりと脱力して、一斉にその場に崩れ倒れた。

剣や矛がダメなら…！

「…異界に生まれし有栖の神子、我が声を聞き、我が姿を見よ！」

今度はヒルメの手元に変化が現れる。

火元もないのに突然、炎が現れ、それは猪大の炎の岩に成長したのだ。これでは自慢の剣も役には立つまい。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！！」

「おおおおお！！」

傍目から見れば、それは本当に赤い猪のように見えた。恐ろしいその姿と、その勢い。しかし利輝は思いきって、それに駆け寄って組み付いた。

（やったか）

今度こそ焼け死んだに違いない。

だが、その直後。

炎の岩に突如、ヒビが入ったかと思うと、そいつは粉々に粉砕された。

「なに！？」

原因は、粉碎された岩の向こう側にあった。

全面ガラス張りの大御神殿は、冬でも温室みたいにそれなりの温度がある。にもかかわらず、利輝の両手には確かに、氷の結晶が霜のようなものが付着していた。

「まさか…なぜだっ」

ヒルメの使った炎の岩のように、彼の指先にも術が現れる。全面ガラス張りのガラスにも似た、氷でできた龍だった。翔べるのだろうか、あの重さで。

「……………」

利輝がヒルメに指を向けると、宙をくねった龍は過たずヒルメに絡み付く。

「きゃあ！？」

らしくない悲鳴をあげ、ヒルメは氷の龍をほどこうと抵抗した。しかし頑丈な氷はくねっているにも関わらず、割れるどころかヒビの一筋も入らない。

せめて溶かそうと、ヒルメの指先から幾度も炎が生まれるのだが、氷は全くと言っていいほど溶解する様子がない。これは炎よりも氷に分がある証拠だ。主人の力によって、具現した者の勝敗は決まる。

「このつ、離さぬか！ 一体なぜ…。貴様、本当は何者じゃ…！」

「何者だと？ 余の顔を見忘れたか」

これは暴 ん坊將軍ではない。

「成敗！」

これも暴 ん坊將軍ではない。

いよいよ龍がヒルメ（でも体はナナ）を成敗しようと締め付けたとき、利輝の内側で声が響いた。

『もう、よして』

「なに！？」

『もう、充分でしょう？』

「…く…っ」

ヒルメ自身は弁解する気もなかった。殺すなら殺せ。それが大御神

の思し召しならば、潔く死を認めるのが王というものだ。

たが首に絡み付こうとしていた龍は、ただの水と成り果てて姿を消した。力が抜けて、ひれ伏すように座り込む。

「…我が“影”が『やめよ』と言うのならば致し方ない。この場はそなたの覚悟に免じて…場を収め…よう…」

憑依していた“影欠片”が抜けて脱力した体を、姿を現したヒト型の弥生が両腕と両膝で受け止めた。

十四話 空に翔ばされて

「…そんなことだろうと思ったよ姉上…」

利輝の意識が戻ったときには、すでにナナの体から戻ったヒルメが様子を見守っていて、目を覚ますやいなや手を握ってこつ詫びた。

『ごめんなさい利輝。あたし、あなたが本物の“有栖の神子”か試したの』

つまりあの容赦ない攻撃の中、無事に事態を収拾できたなら本物だと利輝をわざと追い詰めたのだ。弥生に『精神破壊術』を施したのもヒルメで、やはり神子かどうかを試してのことだった。

“有栖の神子”の力はその一族の、ごく一部にしか受け継がれない。それを何の教えも受けてないのに使いこなしたということは、やっぱり利輝は真正正銘“有栖の神子”ということか」

スサはひとり勝手に納得しているが、ツキヨミはもつと客観的だった。

「…俺はチェシャ猫が食わしたという、例の果実が気になるな…。直接見たわけじゃないから何とも言えないが…あれが何かのきっかけに思えてならない…」

「どうでもいいじゃない、そんなこと」

ヒルメが三つ子の弟2人の肩を叩きながら言った。

「だって、自分自身覚えていらっしやらない、奇跡なんですもの」

利輝が言うには覚えているのは、弥生に逃がしてもらったところまでで、その先は目が覚めるまで、ぶつつりと真っ白だというのだ。当然、弥生を『精神破壊術』から救ったことも覚えてない。

「また、会えるよな」

スサは誰にでもなくポツンと呟いた。手には利輝がミラ国に来てから着ていた神子の衣装が乗っている。

「ええ、必ず戻ってくるわ」

「…多分…近いうちにな…」

姉と兄の言葉に、スサは遙か山頂にある大御神殿に目を向けた。

+++++

滝がサーサーと音を立てて流れている。

「今までありがとう。弥生」

「…寂しくなりますね。神子様が行ってしまわれるのは」

僕は洗濯してくれたという、ここに来るときに着ていた半袖と『ALICE』エプロンに着替えて、弥生だけに見送られながら日本に帰る準備をしていた。大御神サマに事の報告・連絡をすれば、無事に帰してもらえらしい。報連相はこの世界でも大切だ。

「あ、神子様。これ…」

弥生が手に嵌めたピンクの腕時計を、僕に返そうとするので無言で止めた。

「いいよ、料理のお礼。もともとあげるつもりで渡したんだし。あ、もちろん気に入らなかったら返してくれて構わないんだけど…」

「そんな…滅相もございません。私ごときにこのような、美しい腕輪を…」

残念ながら腕輪じゃないんだけどね。しかも女子中学生が買える値段なんだけどね。

「そーれーと、神子様って呼ぶのよければやめてもらえる？ せっかくこうして仲良くなれたのに」

「はい。ええと…では利輝様？」

そう呼ばれると、ちよっとくすぐったかった。

弥生は大御神様に報告するため、祭壇に向かって膝をついた。それまで待たせてもらおうと、柱の一本に体を預ける。

そしたら弥生が血相を変えた。

「神子…利輝様！ その柱は…」

「え？」

全てが遅かった。

弥生が何か言う前に、僕の体はガラスの屋根を突き破って、ロケットみたいに上空に昇っていった。

「噓おおおおー！？」

大御神殿には幾つかトラップがあって、場合によってはそのまま天に召されるものもあるらしい。でも待つてよ、こんな方法で天に召されてたまるもんか！　けど僕は、頭の奥で勘づいていた。

この世界に来るときは、穴から落ちて水に流されたのだ。てことは帰るときの交通手段は、逆に天に駆け昇れってこと！？

ほとんど直立姿勢のまま空に翔ばされた僕は、酸素を求めて喘ぎ喘ぎ…。

結局、酸欠で意識を失った。

「く…く…く…」

く、って何？ クばかり連呼されたって九九か鳩時計が青い鳥し
か思い浮かばない。青い鳥…僕はちゃんとした18歳だけどね。

視界の定まらないまま耳だけこらすと。

「利輝くん！」

「うわ和田店長！？」

耳元で叫ばれ一気に目が覚めた。和田店長が近くで覗き込み、2、
3歩離れて野次馬が集まっている。

「大丈夫！？ 痛いところは！？」

「…ないデス…」

「よかった。みなさんどうもお騒がせしましたー大丈夫みたいで
すー」

店長は仰向けで寝転がっている僕の額にデコピンした。

「もーいきなり車道に飛び出して…いくらウサギが逃げ出したから
って危ないでしょ！」

「はは…すみません」

謝りながら、僕は近くに白いウサギを探した。

いない。

「店長…ウサギは？」

「どっかに逃げちゃったみたいだねー。…まあ、どうせ売り物じゃないからいいけどさ…」

立ち上がりながら、僕は近くに穴かマンホールを探した。

やっぱりない。

（…夢…だったのかな…）

今まで自分が見ていたものは。夢にしては妙にリアリティーがあつて、痛いことがあつても目が覚めなかったけど。

（夢か…そうだよな、夢に決まってる。あんなことが現実にあるわけが…）

でもなぜか、心がスッキリしなかった。寂しいような、物足りないような…。

「いつ、っ!」

「どうしたの利輝くん？ やっぱりどこか痛む？」

「平気です。掠り傷ですから」

掠り傷？

僕は急に悪い予感がして、ゆっくりと首のあたりを触った。

（痛っ）

ちくりと痛みが走る。この傷は、弥生が鎌で引っ搔いた場所にあった。

（…まさか）

今度は頬を触る。この傷はスサの吹き矢につけられた傷だった。

（まさか…まさか…）

僕は手首に目をやる。案の定そこには黒い腕時計型の腕輪が嵌め込まれていて、文字盤が朝日を反射してピカピカ光った。

（…夢じゃ、ない？）

チエシャ猫、スサ、ツキヨミさん、ヒルメさん、…弥生。

「利輝くん、なにボーッとしてるの？ 開店準備、開店準備」

「……………。…はい…」

かくして、僕の初めての異世界旅行は、

こうして幕を開けたのです。

第一章 完

閑話　じーとチェシャ猫

ミラ国王は“有栖の神子”の選定によって決まる。

「じー！！」

じーというのは“影欠片”を務めるオレの…何にあたるんだろうな…とにかく“有栖の神子”だ。神子と言えばそれなりに若い年齢を想像するだろうが、じーと呼ぶだけあってもうすでに80歳を超えている。こっちに来たときは70代だった。

「じー！　地田公爵^{ちだの}が死んだ！！」

「こついつときは『上様がお隠れあそばされた』というんじやよ、トラ」

「トラって呼ぶんじやねえトラって！！　一応ヒト型で来てやっただろが！…とにかく、じーにはひと仕事してもらっぜ」

オレは食指をビシッとじーに向けた。

「大至急、次の国王を決めてもらっ」

…こうして、オレの受難な日々が幕を開けた。

1日目

「じー！ 王宮の厨で何してやがる！？」

勝手に入ってきたじーの前には、煮えたぎる油の満ちた大鍋があった。

「…占いか？」

「あまたの天田公爵のお嬢さんに教わったんじゃよ。あの方は占いが得意だからのう」

「…どうするつもりだ」

猫的にはお世辞にも良いとはいえない掴み方をされて、黒い仔猫が震えていた。

「……。……。まさか。」

「この煮えたぎった油の大鍋に、生きた仔猫の精霊を落とすんじゃ
「よ」

「やっぱりだー！！」

「やっ、やめろー！！ じーッ！ 貴様これは虐待だぞ！？ お前に

は倫理観というものがないのかっ！ 可哀想に…もう大丈夫でちゅよー。おにーちゃんがこの酷いおじーちゃんから守ってあげまぢゅからにえー」

「…トラ…お前…」

「…じー…貴様…」

オレは同種を抱き抱えると、食指をビシツとじーに向けた。

「オレの目が黒いうちは、二度と仔猫と精霊の虐待は許さねーからなッ…！」

2日目

またしても厨房に異臭が充満して、オレは意を決して厨に踏み込んだ。

「じー…ゴフツ…ゲエ…」

「トラ、お前かいのお」

オマエカイノもないもんだ。朱色の煙がもくもくとあがっている真ん中で、ちゃっかり目と鼻と口を保護している。

「貴様、げぼつ、ここで何をしグホオッ」

「精霊を煮えたぎった油に落とすのを、お前さんが許さんかったか

らの。植物で代用しとるんじゃ」

そう言つてじーは赤唐辛子の実をつまんだ。よく見ればネズミに見えなくもない。

「赤っ唐辛子を、油に、入れたのか!？」

「そうじゃよ」

「それも、大量に!？」

「そうじゃ!」

こうしてミラ国にラー油が伝来したのであつた。

オレはじーの袖を掴み、どうにか厨房から連れ出した。涙が止まらない。

喉も目も痛いまま、オレは食指をビシッとじーに向けた。

「とにかくもう、煮えたぎった油で占いするのは、やめろー!」

3日目

昨日とは違う異臭が神子の間に充満して、不寝番が呻いて倒れていた。…すげー臭いんだけど。

「じー！！　今度は一体全体何をしてやがる！？」

「おお、トラか。いま占いの結果が出たところじゃよ」

じーは焼け焦げた骨を俺に見せてきた。

「乾の方角に3本のひび…そのうち一番上にある線がくつきりと表れておる…うむむ、これはすなわち、天田公爵のお子の長子が次なる上様だということじゃ！」

「う、上様…？」

天田公爵の子は例の三つ子しかない。そのうち一番最初に生まれたのは誰だったか。

オレはハッとして顔を上げた。

「天田ヒルメか！」

「そうじゃ！　その方こそが次代様じゃあー！！」

「よし、じゃあさっそく伝令を飛ばして…」

そのとき、背中に悪寒を感じた。ネコ型だったら毛が逆立ち、尻尾もピンと立っていただろう。

嫌な予感が頭を駆け巡り、オレはじーに振り返った。

「…じー…？」

じーは瞬きのひとつもしなかった。呼吸も止まっているようだ。

慌てて駆け寄り、肩を強く揺さぶった。それでも起きなかった。

「じー!!」

…3日後、じーは死んだ。

何百年ぶりの神子の葬儀を終え、じーは有栖陵ありすりように葬られた。そこにはここで一生を終えた“有栖の神子”たちが眠っている。

オレはじーの眠っている墓の墓標に酒をかけて言った。

「じー…あんたは最期の最後まで、オレを『トラ』で呼んでたな」
周りからは『チェシャ猫』としか呼ばれないオレを。

「次の“有栖の神子”の“影欠片”も一人前になった…オレも陰ながら、あんたの血を受け継ぐ神子に、手助けくらいはしてやるよ」

一頻り言い終わると、オレは墓を後にした。

「…多分な」

閑話　じーとチエシャ猫（後書き）

いよいよ次回から第2章スタートですゝ（・・）ノ

十五話 鏡の向こう側

今日も『犬猫専門ペットショップA L I C E』は賑やかです…。

「こらー！！ キティ、何そんなに騒いでるの！ ダイナ、静かにしなさい！ スノードロップ、何やってんのぉー！」

店の仔猫に勝手に名前をつけて、僕は端から叱り飛ばしていた。

キティとダイナは店の中を追いかけっこし、それにスノードロップも参戦する。この3匹によって店内は、掃除したばかりだというのに荒れ放題になってしまった。

後片付けを手伝いながら、和田店長が口を開く。そういえば、といった感じで。

「そういえば利輝くん、そのストーカーにはまだご飯作ってもらってるの？」

「…まあ作ってもらってるといいますが…ほとんど半同棲してると思いますか…」

僕があの時計をプレゼントしてから、弥生はヒト型でこちらにやってきて、料理から掃除洗濯までやってくれるようになった。

洗濯機と掃除機の使い方を教えてからは、昼間のほとんどを僕の部

屋で過ごしてる。よって今の弥生との関係は、ストーカーと被害者というより、ハウスキーパーと依頼人といったところ。

「…それ…完全に付き合っちゃってるんじゃない…？」

「？ 何か言いました店長」

「いえ、なにも…」

そう店長は切り返したけど、ちゃんと聞いてましたよ。付き合ってるってなんですか付き合ってるって！？ あの弥生が聞いたら卒倒ものだ。

（そういえばヒルメさん達…元気にしてるかな）

いきなり異世界に呼びつけられ、太古の人風情の皆さんに取り囲まれて、あなたは神子なんですって様付けで言われたら、誰でもこれは夢だと思う。

ところが目を覚ました自分の手首には、あちらで貰ったアイテムがあれからずっと身に付けている、腕時計タイプの黒い腕輪。銀の文字盤の点滅は、夢ではないのだと訴える。

僕は“有栖の神子”として、役目を果たすと決心したんだ。

あの国のために。

「利輝くん。ゲージの掃除終わったら、こいつら元に戻しといて」

「はい」

可愛い小動物を目の前に『こいつら』なんて、あれでも仮にペットシヨップの店長か？

僕は片っ端から仔犬仔猫を元に戻して、例の3匹を捕まえようと姿見の前に追い詰める。

「あれっ？」

掴めない。僕はもう一度トライしてみた。

だが。

「あれっ？」

やっぱり掴めない。それどころか猫たちは遠ざかり、姿見の向こうに消えていった。

「な…っ！？」

『通り抜けープ』でも通るみたいにして、3匹の猫は姿見の中に吸い込まれてく。吸い込まれるというより、入ってく。通る瞬間だけ水のように景色がたわむが、あとは普段通りの景色を映すだけだ。

「店長っ、店長ーっ！ ちょっと、ちょっと来てくださーい！」

誰も来ない。

「店長さーん！ なんか鏡に、鏡に猫が吸い込まれちゃったんです

けどっ、どうしますかー！？ 聞いてますー？ てーんちよう！」
誰も来ない。

よく生まれたばかりのわんこがぶつかったりはしたが、猫の場合通り抜けられるなんて知らなかった。ここはバイトの責務として、ちゃんと連れ戻しに行くべきか！？ でも人間が通り抜けられるとは思えない。

どうする？ 行くべきか？ 僕。

「えーいもう、死ぬわけじゃなしっ…ええっ!？」

痛みを覚悟して鏡に向かうと、意外とあっさり通り抜けられた。怪我也傷も痛みもない。だが、ひとつだけ問題が。

鏡の向こう側は、地面じゃなかったのだ。落とし穴にでもはまったみたいに、体は下へ下へと落ちていく。

「だからってこれは深すぎでしょおおおー!？」

まさかそんな、鏡の向こうに落とし穴があるなんて！ それがマンホールとかならともかく、それなりに成長した平均的体格の僕が辿り着けない底無し落とし穴だなんて…。

でも僕、前にも一度、落ちてなかった？

「また!？」

でもそんな、この深さで無事に済むなんて無理だ！ 物理的にも生

物学的にも無理だ！ 天文学的数字で計算したって、無事に済む確証はどこにもないのに！

父さん、母さん、それに本ばかり読んでた姉さん。

今度こそ僕はダメかもしれません…。

十六話 2 度目の召喚

目を覚ますと視界は雲ひとつないスカイブルーで、仰向けの身体はクラゲさんみたいにゆらゆら揺れていた。胸とお腹は冬の外気に触れて冷たく、背中は氷が溶けたばかりの水に浸かってキンと冷えた。季節からして違う場所で目を覚まして、今更取り乱したりはしなかった。

だって、また喚ばれたんでしょ？ 僕。

穴に落ちて異世界にGO！ しちゃうのは初めてじゃない。下水道じゃないだけ今回の方がマシだ。…マシ…なんだけど…。

「誰だ、貴様そこで何をしているッ！」

「ひいつ！？」

目覚めた僕は兵士らしき人々に、剣や矛を構えられていた。それにこの、どろりとした藻と池の臭気。到着した途端に悲惨なウェルカムイベントだ。

「誰の許しを得て大御神殿に立ち入るか！」

「へっ？ あ、いっつ、ごめんなさい」

僕は謝りながら立ち上がる。するとここは1度だけ入ったことのあ

る大御神殿の庭で、僕は墓荒らしか何かと勘違いされたんだろう。

池は膝下10cmといった深さで、靴からエプロンまで水浸し。正面にいる5、6人のうち矛を向けてきたお兄さんが、懐かしい声で驚愕を露にした。

「…神子様…！」

「え？」

その声で皆が膝を折る。墓泥棒疑惑は晴れたらしい。

「え？ その声…ゴオさん？」

「神子様と知らずに無礼な仕打ち、誠に申し訳ございません」

「へ？ ああ、疑いが晴れたのなら別にいいですよ。お寺やお社を守るのが僧兵のお役目なんですから」

「なんというお優しいお言葉」

余計恐縮させちゃったみたい。

「トシキ！」

遠くからまた懐かしい声がする。というより、この国で僕のことを『トシキ』で呼べるのは彼等しかない。

4色の髪とそれぞれのアイテム。記憶どおりの姿で三つ子は現れた。

「スサ？ それに、ツキヨミさんにヒルメさんも…勝手に入ってきちゃって大丈夫なの？」

「許可さえとれば、誰でも自由に出入りできるんだよ。庭を歩く分にはな」

スサの言うとおり、後ろにいて見えなかったが、精霊の弥生ウサギがヒト型で僕の迎えに来ていた。

悲しいことにこの国では種族間差別と特権階級主義が激しくて、精霊は奴隷として扱われている。その状況を少しでも改善したくて、僕は神子の地位を受け入れたのだが。

「お帰りなさいませ、神子様」

「…ただいま弥生。君はもう僕と半ば住んじゃってるんだからさ、他人行儀に神子様なんて呼ばないでよ」

「そうでした」

彼女の腕には大事そうに、僕がプレゼントした腕時計が嵌められている。こんな可愛い女の子が僕の半同棲相手だなんて、大学の友達が知ったらブーイングの嵐だろう。

けれど高校生くらいに見えはしても、実際にはウサギ型でいることがほとんどだ。弥生という呼び名もそのウサギの姿からきている。本当の名前はあるのだろうが、照れ臭くてなかなか聞けずにいる状態。

「まあ、半ば一緒に住んでますって！？ズルいわ弥生、あたし

だつて日本国には行ったことないのに！」

「ああでも弥生にはこちらがお世話に…えくしっ」

小さくくしゃみしたら、ツキヨミさんが外套を脱いで僕にかけてくれた。

「…大丈夫か、トシキ…とりあえず俺の上着で我慢してくれ…。…城に着いたら新しい衣服を用意させておこつ…」

新しい衣服って、あのエプロン！？ また！？ 僕はトホホと肩を落とした。

（まあ、エプロンドレスじゃないだけマシかも…）

十七話 ミッション

メイド イン ミラ国の冬服エプロン姿に着替えた僕は、早速ヒルメさんに訊くことにした。

「で、今回僕が喚ばれた理由ってなに？ まさかまた僕を試そうってんじゃ…」

ヒルメさんの顔つきが急に真剣なものになった。嫌な予感がする。王様とか首相とか大統領がこんな顔を見ると、決まって批判めいた発言しかないんだ。

「…あ…いや…確かに僕は、神子として胡散臭いところがありますケド…」

無条件降伏。

「いえ、そうじゃなくて…実はね、“有栖の神子”を貸してほしいって申請があつたの」

「？ 僕を？」

「ええ。それも、隣国のスペクルムから」

「それはまた、なんで…」

ヒルメさんは、ちょっと申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんなさい…あたしにもよく分からないの。試しに占ってみた
ら、あちらの国には怪物が出るらしくて、それが関わってるんじゃないかと思うんだけど…」

「か、怪物!？」

まさか。

「無理ムリむり無理ですからっ! ぼつ、僕に怪物を倒せだなんて
…」

「…誰もそこまで言っ てない…」

いつもどおりのおネムな目で、ツキヨミさんが助け船を出してくれ
た。

「怪物退治なら…わざわざ神子を借りなくても、自前で勇者なり兵
士なり集めるだろう…。とにかくトシキは、スペクルムに行っ
てこい…」

「うはあ…僕ひとりでえ?」

「…もちろんスサと弥生をつける…あと供を2人な…」

「…今度は無事に帰ってくるといいわね…」

やな弦きを聞いてしまった気がする。

「ねねねねえツキヨミさんっ、無事に帰ってくるって、無事に帰

つてくるといってなに!？」

胸にすがり付いて訊く僕を、邪険にするでもなくやっぱりおネムな目で見返してきた。

「…以前にも神子を貸してほしいと申し出があつてな…しかし当時、神子はお隠れあそばされたばかりだった…そこで伝令の者を寄越したんだが…それがまだ我が国に帰ってこない…」

「誰だった?」

スサが訊ねる。しかしすでに答えを知ってる顔で。

「火田公爵のご子息だ…ひたの2番目の」

「ああ、ホスセリか」

意味深げに前髪を弄ったりしている。何かあつたんだ。僕はウサギ型に戻った弥生に、人物関係の探りを入れてみた。

「どういう人?」

「お城の兵士だった方です。今回お供について下さる、火田ホデリ様とホオリ様のご兄弟なので」

「へえー」

ドラマチックの欠片もない返答に、僕はちよつと拍子抜けした。ルパンvs警部とか、サデーvsマジンとか、そんな関係を期待してたのに。あれ? 後者はvsじゃなくてコラボだったっけ?

「とにかく、トシキには隣国に渡ってほしいの。もちろん何事もなければ、帰ってきて構わないんだけど…」

僕は少しの間、日本時間にして1ヶ月前の移動方法を思い出していた。まさかまた空飛ぶ絨毯方式で、ばびゅーんと飛んでいけつてことじゃないよね!?

「もちろんスペクルムには船で行く。今回は飛ばせる奴がいないからな」

スサが先に答えてくれた。ちょっと安心。

「あれ? でもこの世界、電気も石油も石炭も無いよね? じゃあもしかして船の動力源って…」

人力に決まってるじゃないですか。

十八話 伝説の剣を探せ！

この貝殻を耳に当てると、なんだか波の音が聞こえてくるんだ。きつと遠い異国から、海を渡ってきたんだね。

「そんなもん耳に当てなくても、波の音くらい聞こえるぞ」

「うー、揺れてるう」

「当然。船だから」

そうでした。

僕たちは隣国の要請を受けて、船上の人となっていた。

遣隋使か遣唐使でもこのタイプを使っただのかな？ という手漕ぎの船に乗って、僕たちは一路スペクルムへと渡った。

手漕ぎの船なんて臨海学校のカタマー訓練しか経験ないのにどうしよう、と思っていたら、案の定船を漕ぐのは奴隷階級だという精霊さんたちだった。しかも彼らは皆一様に、哺乳類ではなく花なのだ。動物型の精霊さんがいるのだから、植物型の精霊がいてもおかしくない。おかしくはないんだけど、根っこで地面を歩く姿にはさすがに僕も驚いたなあ。しかも植物性精霊さんはヒト型に変身できないらしく、葉っぱでオールを器用に操っていた。大丈夫なのだろうか、塩害とか。

「兄貴のときもそうでしたから、きっと大丈夫ですよ」

そう断言するのはお供のひとり、火田ホオリさんだった。

火田ホデリさんとホオリさんは現在行方不明だという火田ホスセリさんの兄弟で、長男と三男を見た限りでは、この3兄弟も見た目が瓜二つだった。また三つ子かと思いきや彼らは年子で、ホデリさんとホオリさんは2歳違い。

お供は全部で4人。例の火田ホデリさんとホオリさん、それにスサと弥生。

弥生は船の中でこそウサギの姿をしていたが、船がついて宿で一泊して、お城に向かおうとする頃にはヒト型になってちゃんとした正装に着替えていた。2つの身体を持つ生き物は大変だ。

お城に着いたのは、ミラ国を出てから1日半経ってからだった。

僕たちは玉座の間へと顔パスで通され、そこでスペクルムの最高権威とその妻女と面会した。

妻女の方が口を開く。

「遠方からわざわざのお越し、痛み入ります」

炎の女性だ。

真っ赤なドレスに身を包み、真っ赤なベールを被っている。お妃様だから冠は小さく、その代わりルビーらしき宝石で全身着飾ってい

た。

一方の王様は喋る気配がなく、遠い目で宙を見据えるばかり。

「王はこのとおり不調のため、私が取り次ぐことを、お許しください」

「して、“有栖の神子”を貸してほしいとは、どのようなご用件でしょう」

あまりに『お』や『ご』が多すぎてややこしい。お妃様はふむと頷いた。

「“有栖の神子”様をお呼びしたのはほかでもありません。実は…小国に怪物が出るという噂がございまして…」

やっぱり！

僕は気が気じゃないまま先を静かに聞いた。

「その怪物と申しますのは、胴体は1つでございますが頭と尾が8つの大蛇でございまして、如何なる者を寄越しても退治できません。そこで…」

まさか！

「僭越ながら申し上げますと、神子にはそのう、怪物退治なるものをお命じになるのは、力不足ではないかと…」

僕の不安を察してか、スサが割って入ってくれた。ちょっとホッと
する僕。

しかし、お妃様は意外なことに首を横に振った。

「小国もそこまでは望んでません。私どもの頼みというのは、神子様にある剣を探し出して頂きたいのです」

剣を？

「それは一体どのようなものなのでしょうか」

「はい。その剣は『トツカ』と申しまして、何百年もの昔から行方が分からなくなっておりました。しかし、最近になってその所在が……」

「見つかったのですか!？」

お妃様はうんと頷いた。

「その剣があれば、あの恐ろしい怪物も退治できましょう。是非とも神子様の神聖なるお力で、トツカを探し出して頂きたいのです」

モンスター退治、伝説の剣。

なんかだんだんRPGめいてきた。

その夜、お城で酒宴が催された。

ホデリさんがコイントスしてホオリさんに訊ねる。

「ホオリ、裏？ 表？」

「…裏」

コインは、表だった。

「はい残念。俺は飲むから、出立時は君が馬車運転ね」

「きつ、きたねーぞ兄貴！！」

どこの世界にもあるらしい。飲酒運転にまつわる法律とかコイントスが。

十九話 自殺未遂

「…チエシャ猫！…久しいな」

ツキヨミの前に、見覚えのある少年、否、精霊が佇んでいた。

ヒト型のチエシャ猫がぐるりと辺りを見渡すと、それだけで彼は異変に気がついた。

「今日は有栖利輝も弥生兎もないみてえだな…あと、あんたの弟も」

「…ああ…隣国に駆り出されていてな…」

「ふーん…ツキヨミ、それは？」

チエシャ猫はツキヨミが手にしているあるモノに目を止めた。

「…姉上が落としていったものだ…なんだか…おおぶりの赤唐辛子の実を、厨に持っていた…」

なに？

「…赤、唐辛子の実を、厨に持ってたのか…？」

「…そうだ」

「…それも大量に？」

「…そうだ」

「……。……。……。まさか」

チエシャ猫はツキヨミの腕を引っ張って厨房へ駆け出した。

案の定、外には何とも言えない刺激臭が漂っている。

「…姉上…」

「わーっツキヨミ開けたら…グエホッ…」

やっぱりだった。

「やだ、チエシャ猫いつ来てたのー？」

…こうしてミラ国にラー油が再現された。

毒ガス発生の張本人は、ちゃっかり障壁を纏って、立ち上る朱色の煙の中にいた…。

＋＋＋＋＋

ドナドナドーナードーナー、荷馬車がゆーれーるー

「残念ながら、荷馬車でもなければ子牛も乗ってませんけどね、神子様」

「うー、だからってなんでカボチャの馬車…」

カボチャのシルエットをした本体は銀色に輝き、それを引っ張る白馬は4頭で、見た目はかの有名な童話『シンデレラ』に登場するカボチャの馬車そっくりだった。女の子の永遠の憧れが、こちらの国ではレンタカーとは。

僕たちは真夜中、ホオリさんの運転する馬車に乗り、極悪モンスターを倒すための聖剣（と勝手に思い込んで）トツカを探す旅に出た。

…けれど僕にはトツカの在処より、気になっていることがある。

（キティにダイナにスノードロップ…こっちの世界に来ちゃったのかな。大丈夫かなあ）

鏡を通り抜けたのだから、同じくこっちに来ちゃってる可能性も否定できない。へたすりゃ商品を逃がした過失になりうる。ペットシヨップをクビになるかもしれない。

近い将来の不安が脳裏を過ったそのとき、馬車の窓から何か白いモノが見えた。星明かりに照らされた白いモノは、まだ小さく四肢で

立っている。

「白い仔猫…スノードロップ!？」

「どうなさいました神子様？」

僕は馬車を停めるようにお願いすると、そのまま馬車を飛び降りた。

「神子様!？」

「ごめん! 確かめたいことがあるんだ。ちょっと待ってて!」

僕の後ろを、スサが慌ててついてくる。

僕は僕で、白い仔猫を追いかけることに必死だった。あれがスノードロップだったら一大事だ。早く捕まえなくちゃ。

雑木林を抜けるとそこは舗装された道路で、山道から落ちないように路肩には背の低い塀が張り巡らされていた。

「おつかしいなあ…確かにここに出たはずなのに…」

「どっ、どうしたんだよっ、トシキ」

息も切れ切れにスサが追い付いてくる。そのとき僕は、スノードロップの代わりにあるものを見つけていた。

塀の上に…玉子体型の小柄なおじさん。

そして塀の下には、靴と置き手紙…。…!？

「うわあっ！？ とっ、飛び降りる気だ！！」

「あっ、待て！ トシキ！！」

僕はそのおじさんに飛び付いた。

「ダメです！ ダメです飛び降りたら！！」

「離してくれええ！ もう俺は死ぬしかないんだあ！！」

あの小柄な体型で、予想以上の力持ち。僕はなんとか思い止まらせようと、力の限りおじさんにしがみついた。

塀の右へ左へと振り回される。

「落ち着いてください！！」

「離してくれええ！！」

「だっ、だから落ち…え？」

落ちた。

おじさんじゃなくて、僕が。

「トシキ！！」

最悪の事態を覚悟しながら落下した僕は、意外にも逞しい腕の中にダイビングして助かった。ホデリさんか…ホオリさん、かな？

「トシキ！」

スサが塀から身を乗り出して叫んでるのが見えた。

次の瞬間、首筋に鈍い痛みが走る。走って…なんだか、気がだんだん遠くなっていく。

「トシキいつ！」

僕の名前を、呼んでいる。

誰かが遠くで、呼んでいる。

二十話 2人の精霊

「神子様が、さらわれた!？」

スサの報告によると、自殺未遂を演じていた男に呆気なく騙され、下で待っていた共犯者のもとに突き落とされ、そのまま馬で誘拐されたらしかった。

抵抗も反論もできなかったのは、何か薬を打たれたのだろう。

「すまない。俺がついていながら、こんなことに…」

スサの足元には玉子体型の小柄なおっさんが、成敗されてグシャツと横たわっている。さながら塀から落ちたハンプティ・ダンプティ。

「では、神子様の行方は…」

「分からない。占いでも使えば判明するだろうが…だが、不思議の薄いこの土地で占いを的中させられるのは、神子と…」

一瞬視線をさ迷わせてから。

「…姉上くらいしか、思い付かない」

そのとき、弥生兎の耳がツンと立ってピクピクした。

「…どうした？ 弥生」

「…聞こえます…すごく微かですけど…人の…足音…」

「…さすがだな。 “不思議の国”の精霊さん」

一同が一斉に藪を振り返る。

そこから現れたのは…。

「？ …誰…だ？」

…現れたのは、筋肉質な金髪の青年と、すらりとした銀髪 of 青年だった。

+++++

重くて大きな荷物を投げる音で、聴覚から意識が戻り始めた。手足は動かそうにも力が入らず、投げ出された荷物は僕自身だと、気付くまでにかなりの時間を要した。

ドアが乱暴に閉められて、外から門をかける音がした。背中が床に

ぶつかって、ようやく痛覚が戻ってくる。

「…あ…いた…」

痙攣する臉を押し上げてみると、覗き込んでくる、顔と、顔。

「…ホデリさん…か、ホオリ…さん？」

ぼんやりした視界じゃどっちか判別できない。ホデリさんかホオリさんは、大袈裟な溜め息をわざとつけてみせた。

「俺はホスセリだ。ホデリは俺の兄貴で、ホオリは俺の弟」

「……。…へ？」

予想外の返答に、また頭が真っ白になりかける。だって火田ホスセリさんはホスセリさんはホスセリさんは…行方不明になっていた、ホデリさんとホオリさんの兄弟だったはず。

それに、隣にいるご婦人は…。

「…お妃様…です、よね？」

雪の女性だ。

真っ白なドレスに身を包み、真っ白なベールを被っている。ただし冠は被っておらず、身を着飾るものは何一つない。私自身が宝石よ、と言わんばかりに。

まあ、そのへんは否定できないけど。

お妃様は首を縦に振るが、なんか幽霊でも見るような目付きで僕を見てきた。

「なぜ貴方が私のこと…」

「なぜって、嫌ですねえご冗談。お城でちゃんと会ってるじゃないですか」

その言葉に2人は顔を見合せ、ホスセリさんが『くそっ』と膝を叩いた。

「化け物め、とうとう城にまで忍び込んだな！」

化け物？

何がなんだかサッパリなので、とりあえず場所から訊いておく。

「あの一、ここは一体どういった場所なんでしょうか？」

訊くと、お妃様は俯き、ホスセリさんは舌打ちした。

「ここは怪物と、それに従う人間どもの住処だ。俺たちは怪物を倒そうってんで、食糧庫に監禁されたってわけよ」

「……。…へ？」

食糧庫？ 監禁？ ますますわけが分からない。

+++++

「怪物に喰われるう!？」

謎の2人が説明してくれたことに、ミラ国民は顎が外れそうになった。できることなら泣きたい。

「ああ。怪物を倒そうと旅立った者は皆、あいつの餌食になるかはたまた手下にくだつて悪行を働いてる。お前が潰した玉子男もその1人だ」

「てことは、神子様は怪物の餌になるために、手下に拐われたと」
そういうことです、と銀髪の青年が言った。

「近年、そちらのお二方に似た異国からのお客様も誘拐され、お妃様も拐かされてます。餌食になるのも、時間の問題でしょう」

ホスセリの居所がここにきて判明した。

「どーすんだよおい！　ホスセリやトシキが餌になるかもしれない
つてー!!」

立ち上がって憤慨するスサに、金髪の青年が落ち着くよう言った。

「連中の住処なら俺たちが知っている。良ければ案内しよう」
その言葉にホデリとホオリは驚いた。

「ご不満ですか？」

「いや、それは願ってもないことだけど…」

「でも一刻も争う事態に、そのお、馬車では…」

「馬車以上だ」

すると、謎の2人が立ち上がった。

その様子に、弥生だけが身動きした。…あれは。

2人の姿が溶けたように見えた。一瞬のうちにそれは膨らみ、人間ではない新たな形を作る。そのように見えた。

「！…精霊…だったのか」

…金髪の青年は獅子に、銀髪の青年は一角獣に変化した。

「馬車より速いだろう。乗せてやる」

一行は瞬間、迷った。親切心はありがたいが、この2人を信用していいものか。

葛藤を察してか、一角獣の方が口を開いた。

「信じるも信じないも貴方達の勝手です。しかしこのままでは確実に、神子とご兄弟の命はありませんよ」

「……………」

「……………」

長い沈黙の後、スサが観念したように頷いた。

「分かった。乗せてくれ」

一角獣はふ、と笑った。

「どうやら、信用して頂けたみたいですね」

二十一話 利輝危機一髪！

僕たちは体をロープで縛られていて身動きがとれない。

そこに、赤ら顔の巨漢が姿を現した。

「おおいつ、白の女王！」

たぶん、お妃様のことだ。

男は無言でお妃様の髪を掴むと、乱暴に立たせてその場をあとにした。

ボタンという扉の閉まる無機質な音が響く。

お妃様は何の抵抗もすることなく、扉の向こうへ消えていった。

何ひとつ、言い返すことなく。

それは、僕たちも同じ…。

「…くそっ」

ホスセリさんはそう吐き捨てると、扉の前へと移動した。

ホスセリさんは、お城の兵士だったと聞いた。その兵士が体の自由を奪われ、女の人ひとり助けることもできず。

…なんて無様な…。

「くそっ！！」

ガンッ！ と怒りを扉に向けて、足で蹴飛ばしたときだった。

ほんの少し…衝撃で確かに、ドアが開いた。

「！？」

…鍵を、しめ忘れたのだろうか…？

何にせよ好機には違いなかった。

僕たちは頷き合つと、足音に注意しながらその部屋から脱走した。

+++++

女王様は、すごい顔になっていた。

目は血走り、頬には後れ毛が貼り付いて、眉間の皺は深い。しかも額の鉢巻きと青黒い隈のせいで、半径１メートル以内には恐くて誰

も入れなかった。

それを易々と突き破れるのは、三つ子の弟2人かチエシャ猫くらいなものだろう。

「…姉上…？ 今日の占いは終わったはずでは…」

「それどころではないわ」

カルシウムの燃える独特の匂いが、王宮の鏡の間に充満している。チエシャ猫は嗅ぎ覚えのあるその匂いに、眉間に複数の皺を寄せた。臭いのだ。

「見るのじゃ、この骨のひび割れ具合を」

女王の威厳をも投げ捨て占い婆口調になりながら、とりつかれたような眼をして宣言した。

「これは生命の危機に出くわす暗示を意味しておる。つまり今、妾たちの手の届かない所における神子に、大変な危険が迫っておるのじゃ！」

「……………」

チエシャ猫はゴクツと息を呑んだ。ここで危険を予知したところで助ける手段が見付かるまい。しかし今この状態にあるヒルメに意見を申そうものなら、問答無用で首を跳ねられる。

「…どうでもいいですが姉上…何の骨を焼きました？」

「精霊じゃ」

「…はあ…精霊ごときの骨で、トシキの命運が占えるんですか…」

「精霊ごときつて、おぬしは心配ではないのか！ 神子は妾たちの希望なのじゃぞ！？ 無関心を装うものなら、直ちにおぬしの首を斬るッ！！」

「だっ、誰か手を貸してくれ！ 乱心だ、女王陛下が乱心したぞっ！！」

もう誰か呼ぶしかない。

+++++

ある一室から、微かに光がもれていた。

そつと様子をうかがえば、そこには床に横倒しにされたお妃様がいる。

彼女を見下げるようにして、下品な笑みを浮かべていた。

…乱暴される直前なのだろうか…

逃げちゃダメだ。助けなきゃ。助けなきゃ。…でも。

どうやって？

「うわぁあああッ！！」

気がつくと僕は、室内に潜入して手前の1人に体当たりしていた。ロープで体を縛られたままの、あまりに無謀な体当たり。

向こうにとっては予想外の出来事だったのだろう。僕に突き飛ばされた男の人は、受け身もできずにそのまま壁に激突した。

すぐに我に返った1人がナイフで僕を斬ろうとするが、気が動転していたのか獲物である僕ではなく、ホスセリさんのロープを切りほどこいた。

「げっ！？」

「ありがとな、トシキ！」

そう言うときホスセリさんは、手近な人の鳩尾に強烈なパンチをお見舞いして気絶させ、腰に帯びていた剣を頂戴した。

1人の腕を斬り2人目のお腹を掠め、敵が怯んでいるうちにお姫様のロープを切る。

残る6人は彼の背を狙って、巨大な刃を振りかざしていた。

その衝撃でテーブルに置いてあった剣がカランカランと床に落ち、お妃様は僕に叫んだ。

「あつた！　これです、トツカです！　拾ってくださいトシキさん
！！」

「え…こ、これって！」

まさか！？

ダンジョンもイベントボスもアイテムマークもなく！？

僕はお妃様にロープをほどいてもらい、その落ちた剣を両手に拾う。

「こつ、これがトツカ…」

にしては、少々お粗末な剣だった。ゴールドやプラチナの柄、透かし彫りの鍔、グリップエンドには宝石が填めてある典型的な宝剣を想像してたのに。

鉄の鞘は錆びていたし、柄は古い何かの木で出来た、なんだかオモチャのサーベルみたいに見えた。

「ぐあっ！」

なんて感想を述べてる場合じゃない。依然としてホスセリさんは、単身で大勢を相手にしている。

「ダメです、ホスセリさん！　多すぎますっ」

「うるさいッ」

ザクッ!!

何かが斬れる音がして、僕は無意識に前のめりになる。背中から伝わってくる痛みから、斬られたのは僕だとやっと気付いた。

「トシキ!!」

お妃様の悲鳴。

続く剣と剣がぶつかる音。

何かが壊れる破裂音と、更に続く男たちの悲鳴。

背中から温かい液体が迸る感覚。

それっきり、意識が。

+++++

「…間に合わなかったか」

ホスセリの救助には間に合ったが、利輝は見る限り最悪の状態だった。

獅子と一角獣に乗った4人は、怪物の根城だという廃屋に駆け込み、悲鳴を頼りに壁をぶち破って駆けつけた。

スサ、ホデリ、ホオリという力強い助っ人の登場に、悪の手下どもは呆気なく成敗され、瀕死の利輝と聖剣トツカ、なんとか無事なホスセリと妃を獣の背中に乗せ、一向は荒野へと避難した。

「止血はしておいたが…はたして助かるだろうか…」

「神子様…っ」

ここにきてようやく、ホスセリは利輝が“有栖の神子”であることに気がついた。今までのご無礼をお許しください、なんて言える状態ではなかった。利輝は死んだようにピクリとも動かない。

もつとも、このままでは死ぬのも時間の問題だが…。

「…私が憑依します」

弥生のその言葉に、皆が目を見開いた。

「そうすれば、王城まで神子様の御体はもつはずです」

「でも、そしたら弥生が…！」

ヒト型の弥生は淋しげに微笑んだ。

「そうですね…そうすれば、私の命が危ないかもしれません。…でもいいんです。もとはと言えば神子様にお助けいただいたこの命」

「…弥生…」

弥生は膝をつくと、利輝の耳元で何事か囁いた。

+++++

…気がつくと、弥生が僕の耳元で何か囁いていた。

でも、ごめん。もう耳が聞こえないんだ。

声も出せないから、せめて心の中だけで言っよ。

バイバイ。そして、ありがとう…。

我が名を呼べ。さすれば汝、天の力を受け継がん。我が名は…。

「ジャッ……ク……」

……

……弥生の姿が消えたかと思うと、利輝の目がカッと見開いた。

二十二話 8つの首を持つ大蛇

「…ということで、トツカは無事入手しました」

スペクルム城にて、相変わらず目の焦点が合っていない王に代わり、妃が取り次ぐことになった。

「それはご苦勞でした。あとはこちらで兵を集めて退治に向かいます。…剣を」

妃の言葉に従い、ホスセリが剣を渡そうとした。

その時だった。

「お待ちなさい!!」

2人の動きが同時に止まると、玉座の間の扉がバーンと開かれた。

白の女王だ。

「何者ですか!?!」

「それは、わたくしの台詞です。スペクルム王の妃はこのわたくし。怪物の手下によって拐われていたところを…その座に座る貴女こそ何者ですか!」

「くっ…」

見れば、王以外の誰もが赤の女王を訝しむように見ている。兵は突然現れたもう1人の妃に、どうということかとキョロキョロしている。

「…つまりは…私を退治しようというわけか…」

そして赤の女王の目が赤く爛々と光った。

「上等じゃボケえ!!」

そしてその姿がみるみる間に膨れ上がっていく。

赤の女王は、大蛇になった。

8つの頭に8つの尾、ほおずき色の赤い目をギラギラ光らせ、大蛇は生臭い臭気と共に現れた。

そうか、王が始終放心状態だったのは、この姿を見てしまったからだだったのか。その恐ろしい姿に小心者は気を失い、頑丈な兵士たちも逃げ出した。

結果、そこには妃と王、そしてミラ国からの客人だけが残った。

「まずはその女から喰ってやるわ!」

大蛇は妃に襲いかかった。しかしそれはかなわなかった。

妃に食らいつこうかというその直前、大蛇の8つの首は氷の門によって身動きがとれなくなってしまうた。壊そうと試みてもびくとも

しない。目だけで門の出所を探れば、それは神子と呼ばれる若僧が作り出した具現のようだった。

「くそつ、なぜ、このような…っ！ 貴様、いったい何者じゃ!？」

「何者だと？ 余の顔を見忘れたか」

暴 ん坊將軍ではない。

ミラ国の武装派は剣を抜くのが早いか、大蛇に迫っていつて斬りつけた。

「ぎゃああ!？」

胴体をズスタにし、尻尾を8つとも切断し、首を7つ切り落としたが、それでもなお大蛇には息があった。

どうやらあの真ん中にある、一番大きな頭を落とさない限り生きているらしい。

あれを切り落とせるのは、聖剣であるトツカだけだ。

「成敗!」

だから暴 ん坊將軍じゃないってのに。

トツカを握ったホスセリが、真ん中の頭を断ち切った。

「ぎゃあああああ!!!」

大蛇は一瞬にして灰となり、その場に堆く降り積もった。

それも風に流されて、どこへともなく飛ばされていった。

利輝はその様子を見ると剣を収め、ひとつ頷いて目を閉じた。

「…これにて…一件…落…着…」

そしてふにやりと脱力する。憑依していた弥生はそのまま倒れ、代わりに利輝の体はスサが預かった。

「…助けていただいて、ありがとうございました」

妃はそこに両手を付き、深く頭を地につけた。あの恐ろしい大蛇とその格闘を見て気絶しないとは、見た目にそぐわぬ肝っ玉だ。

「ご一行様には、褒美をつかわそうと思います。何かお望みのものはございますか？」

スサは3兄弟と目を合わせると、有無を言わさぬ力強さで言い切った。

「最速の船と、この国で1番の名医をお貸しください」

そう、早く帰って、その間にも治療しなければ。

「そうしないと…トシキと、弥生の命が危ない！」

＋＋＋＋＋

…僕は眉間に力を込めた。瞼を持ち上げると、4色の髪の毛が間近にある。

「…何か譫言を…」

4色の髪の毛の持ち主は耳を寄せていた動きを止め、僕を見てそして大きく笑む。

「ああ、目を開けた」

僕は不思議に思った。

(…誰だろ…こんなド派手な人がいたっけ…)

思い出そうとしたが、目眩がした。全身が、特に背中が切り裂かれるように痛かった。

「大丈夫か？　俺が分かるか？」

2色の髪の毛の人が割り込んできて、僕は思い出した。

そうだ、僕は背中を斬られて…。

「僕：死んだんだっけ？」

「縁起でもないこと言わないで頂戴トシキ。一時は貴方の無事を祈って、国中の皆が大御神様に祈ったのよ」

ヒルメさんの声だ…そこでようやく、僕は海を渡って帰ってきたのだと悟った。何より。

…驚いた。生きてる。

「…トツ力は…ホスセリさんとお妃様は…」

「全部無事に済んだ。弥生のお陰だな」

「弥生…」

そこにきて、ぼくはやつとそこに弥生がいないことに気付いた。

ガバツと布団をはね除ける。

「トシキ!？」

「スサ、僕どのくらい寝てた!？」

「な、7日だ」

「弥生は!？　ねえ弥生はどうしたの!？」

これには皆が視線を逸らす。

「…ツキヨミさん…ヒルメさん…？」

「…弥生は…隣の部屋にいる…生死は…まだ定かじゃない…」

「！ッ」

「トシキ…！」

声を振り切つて、僕は隣室に駆け込んだ。

二十三話 助けてください

弥生を見守ってから3日、弥生が倒れてから10日が経とうとしていた。

「…弥生…」

スサの言葉が頭の中でぐるぐるしてる。

『弥生はお前に憑依してたんだ。…そうして、お前の魂を繋ぎ止めようとしてたんだな』

…弥生は僕を助けてくれようと、命がけで守ってくれたのに。なのに僕は何もできない。

「…ちくしょ…」

弥生の腕時計は無情にも時を刻み続けている。

＋＋＋＋＋

「…トシキ、どう？」

こつそり様子を見に行つたスサは、首を横に振つた。

「相変わらず弥生の側で看病してる…だが、弥生に起きる気配がない」

「…瀕死の神子に憑依して…助かつた“影欠片”の例はない…」

「…覚悟した方がいいかもしれない…」

「…スサ、これを」

ヒルメはスサに吸い飲みを渡した。中には薬らしき液体が入ってる。

「弥生が起きたら…飲ませるように、トシキに言ってちょうだい」

「…分かつた」

トシキトシキ

リンゴのような弥生の頬に指を滑らせると、随分熱い。額の布はすっかりぬるくなっていた。

僕はその布を水に浸して絞り、額にのせ直した。それが良かったのか、弥生の苦しい顔がわずかにゆるんだ。

額に温度差ができたためか、汗が幾つも玉を結び、流れ落ちる。僕は汗を拭うものを探して…結果どこにもないことに気付いて…仕方なくエプロンを脱ぎ捨てて、それで浮かぶ汗を拭った。

額を拭い、こめかみから頬、鼻の頭、そしてうなじ。

起きる気配は、無い。

「よう、有栖利輝」

「なにチエシヤ猫」

「おや、覚えてくれてたのか。そりゃ光栄だな」

僕は視線を弥生から離さずに答えた。

「僕を“有栖利輝”で呼ぶのは、君しかないもん」

「…有栖利輝。弥生兔のことでひとつ助言してやる」

チエシヤ猫は尻尾で吸い飲みを指した。

「そいつを無理矢理でもいい、飲ませるんだ」

「飲ませるって…まあ、確かに起きたら飲ませるとは言われてるけどさ」

「なんだったら口移しでもして飲ませるんだな」

「く、口移してそんな…ん？」

弥生の睫毛が、微かに、本当に微かに震えた。

「弥生？」

呼び掛けると、瞼が大きく震える。

「弥生っ」

弥生はうつすらと、呼び掛けに答えるように瞼を押し上げた。

「弥生…」

「…神子様…」

目を、覚ました！

嬉しくて、嬉しくて。僕はたまらず弥生をぎゅっと抱き締めていた。

「…よかった…！」

「…神子様…。………」

感激に浸ってる場合じゃない。僕はチエシヤ猫に言われたとおり、吸い飲みを弥生の口許に当てる。

「弥生、これ飲んで」

言われたとおりそれを啜った弥生は、次の瞬間、カッと目を見開いて胸元をかきあわせた。

そして瀕死だったとは思えない大声で悲鳴をあげる。

「弥生！ どうしたんだ！？」

凄まじい悲鳴に、スサ、ツキヨミさん、ヒルメさんが雪崩をうつて部屋に飛び込む。

彼等の目に映ってるのは、涙目で胸元をぎゅっとかきあわせた弥生と、オロオロと狼狽える拳動不審な僕。

「…トシキ…お前…」

…なんか誤解されてるような気がする。

何事もないと、正気に戻った弥生が説明してくれたので、僕の無実
は証明された。

スサは吸い飲みの残りを口に含み、それから激しくむせた。

「あつ、姉上！ この得体の知れない薬品はなんですか！？」

「赤唐辛子を大量に入れた油を入れて、それじゃ辛すぎると思ったから甘くしてみたんだけど…」

ラー油入りシロップ。ごめんこうむりたい。

「…ああ…でも…元気にはなつたみたいだな…」

「そーゆー問題じゃないでしょうツキヨミさんっ。とにかく弥生、水持つてくるから待ってて！」

そう言つて駆け出したときだった。

「きゃ、トシキ！ その床は…」

「へっ？」

やっぱり遅かった。

僕の体は頑丈な屋根を突き破つて、ロケットみたいに急上昇した。

「嘘おおおおーっ！？」

このお城にも大御神殿と同じように、様々なトラップが用意されていると聞いた。中にはそのまま天に召されるものもあるらしい。

でもそんな、こんな方法で天に召されるわけには…。でも僕、前に

も天に召されてなかった？

「また!？」

空気抵抗と体勢によって、空気が肺に入ってこない。僕は酸素を求めて喘ぎ、喘ぎ…。

結局、またしても気を失った。

「きく…きく…きく…」

きく、ってあの菊ですか？ 菊は菊は菊はー…季節外れだけど、お花屋さんに売ってると思います。

「利輝くんっ！」

「うわ和田店長」

利輝くんの『きく』だったのか。僕は辺りをぐるりと見回した。
ペットショップの店内だ。

「なにガラスに頭ぶつけて気絶してるのー」

「ははは…スミマセン…そっいや、キティたちは？」

キティとダイナとスノードロップは、相も変わらず店内を追いかけてっこしていた。

（？ あれ…今度こそ夢だったのかな…）

「トシキくん、エプロンどうしたの？ それとその服、冷房きいてるとはいえ暑いでしょう」

「え？」

本当だ。『有栖』名札付き『ALICE』エプロンをしていない。おまけに真夏だというのに、長袖長ズボンスタイルだ。

腕に嵌めている黒い腕輪が、夢ではないのだと訴えてくる。

…もしかして、今回も？

猫は相変わらず走り回ってる。

もしかしたらまた近いうちに、
喚ばれることになるかもしれない。

閑話 利輝と弥生兎

神子様はダイガクとやらに行かれました。

「じゃあ留守番よろしくね」

「いつてらっしゃいませ」

以前『いつてらっしゃいませ神子様』と申し上げましたら、階段から転げ落ち『メイドカフェじゃないんだから！』とご指摘を受けましたので、いつてらっしゃいませ、で切るのが不文律となっております。

今日は良いお天気でお布団を干すには最適ですね。

私の午前中のお務めといえば、洗濯機というもので神子様のお召し物を洗い、掃除機というものでお部屋の埃を吸い取り、お布団とお召し物を干すのが日課です。

お洗濯もお掃除も洗濯機や掃除機がやってくれるので大変楽です。しかし、お洗濯やお掃除を仕事としている使用人の方は、どのように生活しておられるのでしょうか？

ああ、もうお昼のようですね。

神子様は今頃どうなさっておられるのでしょうか…。

+++++

「じゃあお前、例のキモストの飯まだ食ってるのか!？」

学食で僕はお弁当箱を開けた。今日も美味しそうだ。いただきます。

「キモスト？ なにそれキオスクの弟分？」

「キオスク関係ねえそれ以前に話の途中で食うな！ てかなにその弁当!？ 彼女か!？ キモイストーカーよか何倍もマシだけど彼女か!？ くそっ、羨ましすぎる」

学食のカレー大盛りにラーメン普通盛り、そして唐揚げを食べてる友人に言われたかない。

一方で僕のお弁当は、厚焼き玉子にタコさんウィンナー、ポテトサラダとウサちゃんリング、そしてご飯の上には桜でんぶで、ハートマークが描かれている。

「そっいえば利輝、食欲ないって言ってたけど…」

友人が僕のタコさんウィンナーを見ながら訊いてきた。

「ひょっとして彼女のこと？」

普段は鈍感な友人だが、こういう話題になると鋭い。どんだけ僕が好きなんだよ。

「うんまあ…そんなとこ」

「へー…どうしたんだよ。話聞かせ」

友人はカレーとラーメンを交互に食べながら身を乗り出してきた。

「べつに大したことじゃないんだけど…彼女さ、僕が名前で呼んでって言うてるのに、なかなか呼んでくれないんだよね」

「お前が悪い！！」

友人がカレーを頬張りながら言った。

「名前で呼んでって頼んでるのに、僕に原因があるの？」

「そうだ。見るよこの弁当。いかにも『私の利輝に手を出すんじゃないわよ』ってカンジじゃないか。それなのにお前はそれ相応のお返しをしたか？」

「美味しかったよー、とは言ってるけど」

友人がゴツンと食卓に頭をぶつけた。すでにカレーとラーメンと唐揚げは完食してる。

「原因はやっぱリミネラルウォーター並みに天然なお前にある!!」

「はへ？」

「いいか、彼女がそんなお子様な愛情表現で満足すると思うなよ。こーゆーときは『美味しかったよーありがとっ』とか言いながら、頼っぺちゅーとかするんだ」

「…頼っぺちゅー？」

「ああ」

「…それで本当に名前で呼んでくれるようになるの？」

「ああ！」

本当に？ と友人の意見を疑ったが、なるほど、そうかもしれない
と思い直した。ひよっとするとあっちは欧米文化で、ハグあんどキ
スが親しい者同士のコミュニケーションなのかもしれない。

「分かった。やってみるよ」

「おう、結果報告は絶対な」

友人は学食の食器を、僕は弥生の作ってくれたお弁当を片付けて、
教室に向かった。

＋＋＋＋＋

夕食の支度をしていますと、神子様がバイトとやらから帰って参りました。

「ただいま」

「お帰りなさいませ」

以前『お帰りなさいませ神子様』と申し上げましたら、やはり尻餅をついて『メイドカフェじゃないんだから！』とご指摘を受けましたので、お帰りなさいませ、で切るのが不文律となっております。

「今日はなに作ってくれてるのー？」

私はお肉を焼きながら申し上げました。

「今日は、神子様のお好きなハンバーグでございます」

すると、神子様はお弁当箱をシンクという場所に置きました。

「今日も美味しかったよー」

私はお肉を焼きながらお礼を言いました。ここまではいつものやり取り…。

「…いつもありがとう」

そして…。

チュツ。

「 * > + ○ † ! ? 」

な、なんと神子様は私の頬に口付けなさったのです！

「な、なになさるんですか神子様！？」

「こら、利輝でしょ」

神子様は何故か、御名で呼ばれるのが当たり前という態度です…。

私は動揺しながらも、ああそうか、と思い直しました。

確か頬に口付けするのは、親しい者同士の挨拶だと思い出したからです。

「あ、はい…トシキ様…」

すると、フライパンという鍋から黒い煙が。

そして焦げた匂いが。

「あああああっ（叫）！！」

よって今夜の夕食は、片面だけ真っ黒焦げのハンバーグとなりました…。

閑話 利輝と弥生兔（後書き）

いよいよ次回から第3章スタートです／＼（・・）ノ

二十四話 ブラックカーペット

ようやく風も涼しくなってきました。

「利輝くん、表の掃除お願い」

「はい」

開店前、いつもどおり外を掃いていると、突然“彼女”が現れました。

「おはようございます、神子様」

「うわ、やめてっ。日本にいるときには神子なんて呼ばないでっ」

2人揃って『頭のおかしい人』扱いされちゃうから！

「はい。仰せのままにトシキ様」

「様も敬語もいいっ！」

これじゃ僕が年下美少女を、思い通りに育てたみたいになっちゃうよ（困）。源氏物語じゃないんだから。

弥生の腕には僕のプレゼントした腕時計がある。異世界の物を身につけることによって空間移動能力が備わり、弥生は自由にミラ国と日本を移動できるってわけ。

詳しいことは僕にも分からない。

分かっているのはほぼ毎日、弥生が日本に訪れてるということだ。

「こんなにしょっちゅう日本に来ちゃって、ヒルメさん達には怒られないの？」

「はい。神子様をよろしくと仰せつかりましたので」

いきなり異世界に呼びつけられ、太古の人風情の皆さんに取り囲まれて、あなたは神子なんですって様付けで言われたら、誰でもこれは夢だと思う。

ところが目を覚ました自分の手首には、あちらで貰ったアイテムがあれからずっと身に付けている、腕時計タイプの黒い腕輪。銀の文字盤の点滅は、夢ではないのだと訴える。

僕は“有栖の神子”として、役目を果たすと決心したんだ。

あの国のために。

「利輝くん外は…あ…」

和田店長は僕と弥生を見て、開けた扉を閉めようとする。

「…もしかして、邪魔…だったかな？」

「いいいいえ違います違います！　べつに彼女とか恋人とかそん

なんじゃありませんから！」

「え？　じゃあ、なに？」

ただの友達です、と言おうとした僕を制して弥生が答えてしまう。

「私の主です」

そう言って。

なにい！？

案の定、店長はなんか珍獣でも発見したような目で僕を見る。

「主…利輝くん、やるねえ…」

「違う違う、ちっがーう！　そうじゃ、そうじゃありませんっ！
誤解誤解、五回五階ごかイタッ」

舌かんだ。

「まあなんでもいいけど、イチヤつくなら人目の無いところでやっ
てくれない？　おじさん目の毒でこまっちゃう」

最後は茶目っ気ながら言ってるが、男が茶目っ気ても可愛くない。
それ以前に、おじさんって店長は20代でしょ。

「…で、弥生。どうしたの？　わざわざバイト先まで来て」

すると、弥生は険しい顔で僕に近寄ってきた。

うわ、近っ。近すぎるよ。こんな美少女に近寄られたら、男なら誰だってドキドキする。

「はい。実は…神子…トシキ様のお命を狙う輩が現れまして」

「えっ!?!」

問題が問題なので、僕たちはコンビ二前のヤンキーみたいに座り込む。

「詳しいことはまだ分かっておりませんが…向こうはヒルメ様やツキヨミ様に優るとも劣らない術士を雇っているそうです」

「じゅ、術士…?」

「もしかしたら、近々その術士の力であちらに喚ばれるかもしれませんが…そのときは充分にご注意を」

「わ、分かった…」

そう言って立ち上がり、入り口前を掃き掃除すべくカーペットに手を伸ばした。

ときだった。

「ぬをわああああ!?!」

そこはカーペットではなく穴だった。

僕は箒を握りしめたまま、頭から穴にダイブしてしまったのだ。ま

さか、そんな！ ついさつきまで単なるタタキだったのに、いきなり落とし穴になるなんて！ しかも。

「深い深い深い深いーっ！！」

落とした獲物をどうやって取るんだ？ ってくらい、その穴は深く暗かった。もしかしてこのままブラジルまで辿り着くんじゃないの？ ってくらいに。

だからってまさか、たかがセメントと土を掘っただけの穴で、底無し沼体験ができるはずは…。

でも僕、過去に2回ほど落ちてなかった？

「また！？」

でもそんな、この深さで無事に済むなんて無理だ！ 物理的にも生物学的にも無理だ！ タネも仕掛けもチラリとあつたとしても、無事に済む確証はどこにもないのに！

父さん、母さん、それに本ばかり読んでた姉さん。

次に会うときにはすでに冷たくなってるかもしれません…。

二十五話 お化け屋敷

僕は手足を思いきり伸ばして、しっとりした地面に大の字になっていた。上にあるのは樹木の青葉で、耳を澄ませば、ケーン、カッカツカ、などと野生の王国っぽい鳴き声が聞こえる。

明らかにペットショップとは違う場所で目を覚まして、今更取り乱したりはしなかった。

だつて、また喚ばれたんでしょ？ 僕。

穴に落ちて異世界にGO！ しちゃうのは初めてじゃない。着地地点が池じゃないだけ今回の方がマシだ。…マシ…なんだけど…。

「…ここ…どこ…？」

首を捻りながら身を起こすと、ひどく体が重かった。いや、重すぎる。

またチエシヤ猫でも乗ってるのかと思って視線をおろせば、チエシヤ猫ではなくウサギ型の弥生が丸くなって僕のお腹で眠っていた。

（えー！？）

ついてきちゃったのー！？

揺り動かしてみると、弥生はハツと目を覚まし、僕のお腹に乗っていることに気付くと大急ぎで飛び降りた。文字通りぴょんと飛び降りた。

「もっ、申し訳ございません神子様」

「それは構わないけど…ここどこ？」

「トシキ！」

4色ひとり2色の髪、頼れる仲間が森の奥からやってくる。

ん？ 森？

「よかった…無事みたいだな」

「よかった、って？ またヒルメさん達が喚んだんじゃないの？」

この鬱蒼とした森の中に。

「…喚んでない…」

はい？

「あたしの占いで『トシキがここに来る』って出たから、迎えに来たのよ。きつと奴等だわ。あたし達が間に合って本当に良かった」

「奴等、って…」

「トシキの命を狙う輩がいる」

スサが剣を抜きながら短く言った。

「それは聞いているか？」

「…き、聞いているけど…」

「とりあえず…ツキヨミ」

分かった、と目だけで承諾して、ツキヨミさんはジャラジャラした装飾品のひとつ、勾玉のペンダントを下唇に当てた。

「…異界に生まれし有栖の神子…我が声を聞き、我が姿を見よ…」

フアアアアア…。

生暖かい風が僕たちを包み、視線が微かに緑色になる。以前お目にかかった目眩ましの術だ。

「こっから城には遠すぎるな…よし。トシキ、こっちだ」

「え？ こっち、って？」

スサに手を引っ張られ、僕は森の奥へ奥へと引っ張られる。

連れていかれた場所は。

「…ば、ボロすぎ…」

最初にこちらに喚ばれたとき、僕はお城に連れていかれた。2回目に喚ばれて来たときも、僕は隣国のお城へと招かれた。

だが、ここきたら。

こちらはすでに春を迎えているらしい。色とりどりの花々が、ログハウスの周りを囲んでいた。

しかしそのログハウスときたら…どこからどう見ても、お化け屋敷。

「…どなたか住んでらっしゃるんですか…？」

「姉上の…いや、俺とツキヨミも含まれるかな。俺たちの幼馴染みが暮らす家だ。ここは父上…あまたの天田公爵の領土だから」

「…今の時間帯は仕事でいないけどな…」

さて、とスサは腰に手を当てた。

「城の準備が整うまで、トシキにはここに匿ってもらわないとな」

「ええーっ!？」

匿うつて、ねえ匿うつて何!？

「スサたち行っちゃうの!？」

「当たり前だ。城の準備に城の者が行かなくてどうする。大丈夫。俺たちも小さい頃アポ無しで泊めてもらったことあるし、ここの中は信用のおける奴等だから」

いや、そうじゃなくて。

「あ、なんだったら弥生くらい置いていくか？」

「…是非そーしてください…」

かくして、僕は弥生と2人（1人と1匹）でこのボロ屋敷に置いていかれたのでした。

（はぁ…どうなるんだろ、僕たち（涙）

二十六話 リフォーム大作戦

「さて…これからどうしよう…」

僕はログハウスの扉をキュイィ…と開けた。ドアの音まで恐すぎる！

中に入った途端、僕たちは凍りついた。

外観もお化け屋敷なら中までお化け屋敷だ。あちこちに張られたクモの巣、壊れた窓の戸板。と、同じく壊れたテーブルとイスが7脚。その上にはナイフの刺さったリングが乗っかっており、竈は使っていないのが明らかなほどホコリまみれだった。階段があるということ、2階はきつと寝室だろう。

「…ホウキ…クモの巣張ってるし…」

いったい最後に掃除したのはいつなんだ。

「このままじゃ弥生、僕たち眠れないから掃除…ああ…」

弥生はヒト型になるのに必要な、服を持っていなかった。

仕方がないので、脱ぎっぱなしの丈の長い服を拝借する。

「…眠れないから2人で掃除しようか。僕が壊れた家具とか修理するから、弥生は竈とか掃除して」

「はい。神子様」

こうして僕たちのリフォーム大作戦が幕を開けた。

+++++

「トシキたち、本当に大丈夫かしら…」

ボソツと呟いたヒルメの肩を、スサがぽんと叩く。

「大丈夫だろう。『あいつら』に任しておけば、身の危険はまずないだろうから」

「…まあ、身の危険は、な…」

3人同時に住人のアレコレを思い出してしまい、そうかも、とヒルメは思い直した。

「まあ…気苦労はたえないでしょうけど…」

「…もしものときは…弥生がいる…」

「…ああ、姉上。出口が見えてきた」

三つ子は若干の不安を残しつつ、生まれ故郷の森をあとにした。

＋＋＋＋＋

そして夕日が沈む頃。

「おわったゝあ！」

「お疲れ様です神子様！」

僕たちはお互いの健闘をたたえてハイタッチする。

すっかり綺麗になった室内を見て、僕の頭の中では確かにあの音楽が流れていた。

まあ、なんということでしょう（劇 ビフォーアフター風に）。

あのお化け屋敷みたいだった室内が、ちょっとしたカントリー調になってるではありませんか。

変な音のしない扉、ジャストフィットしてる窓の板戸、脚をしつかり固定したテーブルとイス、同じく脚の安定した2階のベッド！

春とはいえ、夕暮れ時には火が恋しい。弥生がせつせと掃除してくれたお陰で、竈は火をいれても火事の心配がないくらいピカピカになった。ただいまこの住人たちのために、弥生特製野菜スープを調理中。

「それにしても、ここん家の人はいつになったら帰っ…」

「アンタ、だれ？」

「え？」

声がした方を振り向くと、赤毛の小柄なご婦人が窓のところにぶら下がってた。文字通り逆さ吊りになっていた。

「うわぁ！？」

「勝手に他人の家に入って、『うわぁ』はないでしょ、『うわぁ』は」別の声が出たかと思うと、今度はテーブルの下で床が外れて、そこからオレンジ色の髪をした小柄なご婦人が現れた。

「きゃっ！？」

それだけではない。正々堂々と扉から3人、回転ドアみたいに壁から1人、反対側の壁からまた1人。

「おっ、お化け屋敷じゃなくて、忍者屋敷だったの！？」

「アンタ、名前は」

赤毛のご婦人が訊いてくる。どうもこの人がリーダー格らしい。

「…トシキ…有栖利輝…こっちの女の子は弥生…」

藍色の髪をしたご婦人が顔色を変えた。

「有栖…？ アンタもしかして、有栖の神子かい！？」

「そうですけど…へ？」

「神子様あーっ！」

7人の小柄なご婦人方が、嬌声をあげて襲い掛かってきた。

「ええっ！？」

「神子様よーっ、本物よーっ。カーワイーイーい！」

床に押し倒されてしまう。生まれてこのかた、こんなにモテモテだったためにはない。しかも積極的なおねえさん方は、抱き締めて頬擦りまでしようとする。

「いやー…すごいですね神子様」

「やつ、弥生っ！ 笑ってないで、助けっ…」

「いやーっ お逃げにならないで神子様あーっ！」

というより『逃がすか！』って感じた。

弥生はあくまで楽しそうに笑っていた…。

二十七話 7人の美女

野菜スープが湯気をたてている。

「あのー、もしよかったら自己紹介してもらっても宜しいでしょうか？」

ようやくご婦人方から解放された僕は、7人の小人ならぬ7人の美女に名前を訊くことにした。

今度は姉妹ではないので顔立ちに違いはあるのだが、一番分かりやすい髪の毛の色で覚えさせてもらうことにしよう。

「クシナダです」

赤。

「ヤガミです」

オレンジ。

「スセリです」

黄色。

「シタテルです」

緑。

「サクヤです」

青。

「トヨタマです」

藍色。

「タマヨリです」

紫。

レインボーカラーのご婦人方は、弥生特製野菜スープを美味しそうに飲んでいる。というかあのホコリだらけの竈で、今まで一体何を食べていたんだろう。

「それであのー、貴女たちはどういったご関係なんでしょうか」

彼女たちはスープに夢中で何も話してくれないので、自動的にこっちから質問するしかない。匙を浮かせたままでクシナダさんが口を開いた。やっぱりこの赤毛の小柄なご婦人がリーダーらしい。

「家族みたいなもんさ。もともと、トヨタマとタマヨリは本当の家族だけだね」

「あ、姉妹だったんですか」

顔の似てない姉妹に初めて出逢ったよ。

「アタシたちは生まれつき靈感が強くてね、ここで巫女修行してるのさ。普段は採掘。術を発動させるときに使う宝石を採掘してるんだ」

「ヒルメ…女王も一時、ここで修行してたんだよ」

「ヒルメさんも？」

ということは、彼女たちもヒルメさんと同世代なのだろうか。しかし日頃の重労働のせいか、本当はもつと若いはずが三十路前後に見える。

「そ・れ・に・し・て・も」

彼女たちは『うふふ』と奇妙な笑みで僕を見つめてくる。

「次の神子様がこんなに可愛い方だったなんてね」

「そうそうアタシも驚いたあ」

「てかアタシまじチョー気に入ったんだけど」

「うあ、や、やめ、近寄らないでくださいようっ」

席が隣のクシナダさんとタマヨリさんに近寄られる。し、心臓が…。

「こんなに固くなっちゃって、本当に可愛いお方」

「今度の神子様の影^{かげ}欠片も超かわいいーい」

「ねー？ 先代様は頭のおかしなジジイだったしー」

「影欠片もクソ生意気な猫だったしねー」

「あんたみたいなのが次の“有栖の神子”だったらいいなーって、アタシたちずーっと思ってたんだよ」

ねー、と7人揃って声を合わせる。

「……。……。……」

可愛いと言われた僕と弥生は顔を合わせて固まっていた。

「あの…もしかしたらお迎えが来るまで、ここに滞在するのでしょうか…」

今更ながら、弥生を残してしまったことを後悔した。

お城のお迎えが来るまで滞在…するってえと、僕たちは、いや僕はこのハーレム状態の中にずっといなきゃならんってことですか！？

「神子様、どうなさったの？」

僕は首を横に振った。それはもう勢いよくブンブン振った。

この女傑たちの家で居候？

.....。

（それだけのご勘弁！！）

大学の友人が知ったら、僕は間違いなくボコボコにされる。

+++++

女は、水瓶のに張った水面に映る風景を眺めていた。

「…有栖の神子の所在が分かったか…」

水鏡には女の顔の代わりに、女性たちにちやほやされて困り果てている利輝の姿が映っている。

「いま連れて行ってやるぞ。有栖の神子よ」

黄泉という永遠の牢獄へ。

女が去った後、水面に波紋が風もないのに生じた。

そしてそこに映るのは、ただ、ただ暗い室内の天井だけだった。

二十八話 お婆さんにご用心！

城で利輝を迎える準備に指示を出しながら、ヒルメは思い出したようにポツンと呟いた。

「そういえば、イワナガはどうしてるかの…」

すっかり古い婆口調になってる。

準備を手伝っていたスさとツキヨミも、それを聞き逃さなかった。

「イワナガ？ ああ、毒使いの」

「…彼女ほどこの国で毒に…、また解毒法に通じる者はいなかった…」

「あたしが王になってから姿を消したって聞いたけど…今頃どうしてるかしらね」

ヒルメは窓越しに空を見上げた。

＋＋＋＋＋

7人の美女はお仕事に出かけるようです。

「じゃあ、後は頼んだよ」

「火だけは充分注意してね」

「あと不審者は絶対に家にあげないこと」

「少々強引でも押し返すんだよ」

「勧誘とか物売りの話も聞いちゃダメ」

「そういう奴はガツンと言ってやんなさい」

「分かった!？」

「…はい…」

7人から間髪入れず言われて、僕は了承の言葉を言うしかなかった。

「じゃあ、留守番よろしくね」

熱烈な投げキッス。

そうしてツルハシを持って美女たちは去っていった…。

「あーやっと思ってくれたよ…にしても、これからどうしようかな…」

朝。

それは僕が今まで体験したことのないほど悲惨なものだった。

『ちよつとー朝ごはんまだー？』

『なによーこの服洗濯しといてっていったでしょー』

『かーっ、淹れたお茶もまるで水だよ』

『えーっアタシ朝ごはんは雑穀米にしろって言ったじゃーん』

『ねー、アタシのツルハシどこー？』

『見なかったよ。神子様ちよつと探してくれるー？』

『あーついでに宝石入れる袋も探しといてー』

…これら全部を立て続けに言われたのだ。

それでも神子として、それ以前に男としての威厳を保つために、僕はささやかな抵抗を試みた。

「…あの…お姐さま方？　僕の体はひとつしかないのですが…」

超弱気。

案の定、それは撃墜された。

『ああ、神子様も一応人間だったね…なんとかするんだ』

この一言で。

弥生も今朝からウサギ型になり、またお姐さま方から『きゃー！
獣型もチョー可愛いーい』ともみくちゃにされていた。ここに残る
よう言つて本当にゴメン、弥生。

最初こそハーレム状態に辟易していた僕だったが、今朝のこの件で
全てが吹っ飛んだ。このお姐さま方の取扱書希望。

（なんつー女性たちだー！）

出かけていったのは、僕の我慢が限界に達しようとしていた寸前。

弥生はウサギのままお姐さま方のベッドでお休み中。

さてこれからどうしようかと考えてるとき。

「もし、おにーさん」

横から声をかけられた。

振り返っても誰もいない。と思つたら、その人は下の下、腰のあたり
でようやく頭が見えた。

腰の曲がった、ピンク混じりの白髪のお婆さんだ。手にはカゴを持

ち、リンゴがこぼれ落ちそうなほど入っている。

「なんスか？」

「新しいリンゴが出来ましての。試供品じゃ。ひとついかがかね」

。。。。。。

(…怪しい…)

怪しすぎる。白雪姫じゃあるまいし、うっかり毒リンゴに引っ掛かるものか。

「すみません、お婆さん。そのリンゴ洗ってもらえますか？」

「えっ！？　なんでじゃ！？」

「だって僕、食中毒になりたくないんです」

「でもコレは新鮮だし…」

「じゃあ、お婆さんが食べてみてください」

「ええっ！？」

お婆さんはピョンと飛び上がった。それみろだ。

「毒味してください。平気なら食べますから」

「う…ちよつとそれは…」

「じゃあ、お引き取りください」

そう言って僕は扉を閉めた。

…数時間後…。

「もし、先程ののにーさん」

ドアを開けると、さっきのお婆さんが立っていた。

「なんスか、先程のお婆さん」

「新しいバナナが出来ましての。試供品じゃ。ひとついかがかね」

「結構です」

「でもコレは新鮮だし…」

新鮮だからいいってもんじゃないだろう。それに。

「新鮮って…新鮮すぎるでしょう。まだ真っ青じゃないですか。僕、黄色いバナナしか食べたことないので」

そう言って僕は扉を閉めた。

…数時間後…。

「新しい卵が出来ましての。試供品じゃ。ひとついかがかね」

「結構です。新しい卵って初卵ですか。それに僕、卵アレルギーなんです」

…数時間後…。

「新しい松茸が出来ましての。試供品じゃ。ひとついかがかね」

「結構です。ていうか松茸って人工栽培できないでしょう。それに季節真逆ですし」

…数時間後…。

「新しいキャベツが出来ましての。試供品じゃ。ひとついかがかね」

「結構です。確かに春キャベツは旬ですけど、裏の菜園で育ててますんで」

…こうしてお姐さま方が仕事から帰ってくるまでお婆さんはやってきた。

「神子様、ちゃんと留守番してくれた？」

「変なお婆さんがしょっちゅう来ましたけど、何回も追い払いました」

二十九話 毒人参

夕食のときに、その人の名前は出てきた。

「イワナガさん？」

今日の夕飯は僕が調理担当。弥生の指示のもと、ロールキャベツならぬオールキャベツを作ってみた（中身が肉ではなくキャベツなので）。

突然出てきた知らない名前に首を傾げると、クシナダさんが説明してくれた。

「サクヤの姉だ。アタシたちの中でも桁外れに靈感が強かった。毒の使い手で、国で有数の術士でもあったんだが、今は所在が分からなくて……」

「…お姉様は」

妹さんだというサクヤさんが口を開く。

「国の在り方に頑なな方だった。誰よりも国を愛し、国はこうあるべきだ、と謳っていた。時期国王候補と言われていたほどだからね。けど……」

「…けど？」

サクヤさんは俯いて箸を置く。そんなにオールキャベツは不味かったですか？

「ヒルメが女王に選ばれて…神子様もその後身罷り…お姉様は誰にも何も言わず、突然姿を消したんだ」

それ、僻みっていうんじゃないの？ 王に選ばれなかったショックで失踪したわけか。

「今頃どうしてるかねえ」

「どこにいるのか…いや、もう生きてないかもしれないねえ」

心なしかオールキャベツが寂しげであった。

+++++

「ぬう…流石は有栖の神子じゃ」

ひっきりなしに有栖の神子の毒殺をはかった老女は、水瓶に覆い被さるようにしてその前に佇んだ。

「やはり神子様は目敏い」

いや、あの手で引つ掛かるのもどうかと思うのだが。

「早く次の手を考えなくては」

そうして老女は水鏡を見る。それは一拍おいて波紋を生じ、また一拍おいて老女の顔ではない別の風景が現れた。

木造二階建て住宅、その住人である7人の美女、に囲まれた有栖の神子、の膝に“乗っている”影欠片。

「むう…神子の“影欠片”は弥生兔か」

膝に乗っている影欠片は、どの角度から見てもウサギだった。

「それなら…」

老女は…否、老女に化けていた女は不敵な笑みを浮かべた。

皺はなくなり、白髪だった髪は濃くなり、腰も曲げずにすらりとそこに立っていた。

＋＋＋＋＋

「じゃあ、後は頼んだよ」

「火だけは充分注意してね」

「あと不審者は絶対に家にあげないこと」

「少々強引でも押し返すんだよ」

「勧誘とか物売りの話も聞いちゃダメ」

「そういう奴はガツンと言ってやんなさい」

「分かった!？」

「昨日と同じこと言われなくても、ちゃんと承知してますよう!」

ちゃんと反論を試みる。僕の漢度も^{オトコ}アップしたかも。

「じゃあ、留守番よろしくね」

あまり変わってなかった。

今日はぽかぽか陽気のいい天気だ。洗濯をし、掃除をし、洗濯物が乾いたので、さあ取り込もうとしたときだった。

「すみません、おにーさん」

洗濯物を抱えながら声のした方を振り向く。

そこには昨日のお婆さんではなく、ピンク色の髪のお姉さんが立っていた。

「なんスか？」

「ニンジンを買っていただけませんか。今日中に全部売り切らないと、夫に暴力をふるわれてしまうんです」

うわ、今度はDV作戦で来たよ。

仮にもし彼女の言葉が本当だったとしても、僕にはニンジンを買う理由がどこにもない。後ろめたい気分がなかったわけじゃないが、一言断ろうと口を開く。

「せっかくですけどあのー…」

「まあ、美味しそうなニンジンですね」

断ろうとした矢先、ヒト型弥生が僕の後ろから覗いてピョンピョン跳ねている。

「トシキ様、今日はニンジンのソテーにしましょうよ。甘くて美味しいんですよ」

そう言っ僕を目で殺してくる。さすがウサギ、ニンジンには弱い。売り子さんにもうつるうつとした目で見つめられ、僕は少し折れるし

かなかった。

「すみません、そのニンジン、毒味して頂けますか？ 平気なら食べますんで」

売り子さんは井戸水でニンジンを洗うと、一口かじって飲み込んだ。

1・2・3…異常なし。

「…分かりました、買います。コレとコレとコレを下さい」

「まいどありがとうございます」

自分で品定めしたのだから、まず間違いはないだろう。

その夜。

今日のこの顛末を話したら、お姐さま方にカンカンに起こられた。

「このアホンダラ！ あれほど物売りの話は聞いちゃダメだといっただろう」

「でっ、でも皆さんのお体に障りがあるわけではないですし、それに美味しいでしょ？ ニンジンソテー」

弥生特製。

「それにほら弥生も美味しそうに食べ…弥生!？」

弥生の様子がおかしい。

喉をおさえたかと思うと、側にあつた水をガブガブあり、それでもなお苦しいらしく、口をおさえながらこう言った。

「み、水…っ!！」

そしてイスごと倒れる。

「弥生っ!！」

お姐さま方から悲鳴があがる。僕は弥生を抱き起こして必死に呼び掛けた。

「弥生!？ 弥生っ!！ なんで、こんな、急に…」

「そのニンジンが怪しいな」

その場にそぐわぬ人をバカにするような声。誰かが叫んだ。

生意気猫だ。

「生意気猫!！」

「おいコラ誰が生意気猫だ。オレはチエシャ猫」

なんでこいつがこんなところに？ とは訊くまい。チエシャ猫はピ

ヨンとテーブルの上に乗ると、ニンジンソテーの匂いをクンクン嗅いだ。

「…やっぱりな」

「や、やっぱりって?」

「精霊にしか効かない毒が仕込まれている。弥生兔が気付かなかつたのは、ヒト型で調理したからだろう」

「そんな…! でも、誰が…」

「…アタシだよ」

また別の声が聞こえて、僕たちは一斉にそちらを向く。

ドアのところに立っていたのは、昼に来た野菜売りのお姉さんだった。

「あ、野菜売りの…」

「お姉様!？」

え？

「イワナガ! 今までどこに!？」 いや、それよりあんだ、なんてことを…!」

ええ!？

イワナガと呼ばれたお姉さんは不敵に笑った。

「有栖の神子の命、アタシが頂戴する」

背後には屈強な男たちと、狼が4、5匹揃っていた。

「影欠片を持たぬ神子に何ができる」

ホホホホという哄笑。僕は冷たくなっていく弥生の体を抱き締めた。

外は火が恋しいほど冷えるのに、目頭と喉の奥がやたら熱い。

アドレナリンがシャンパンみたいに吹き出して、絶望的な感情を片っ端から打ち消していく。

外野の声は聞こえなかった。代わりに誰かが頭の中で囁いた。

我が名を呼べ。さすれば汝、天の力を受け継がん。我が名は…。

「…ジャッ…ク…!!」

その後は、分らない。

三十話 反逆者

天田の三つ子ご一行様が空飛ぶ絨毯に乗って利輝を迎えに行くと、
なんだかそちらの方角が妙な雰囲気だった。

「…妙な風が吹くわね」

その違和感に、ヒルメがポツンと呟いた。

「今日の八卦では悪い卦は出なかつ…あら？」

ちょうど目的地の辺りから、爆発音と悲鳴が流れてくる。この風は
どうやら爆風らしい。さつきより威力を増して、絨毯が踏み留まる
には精一杯だ。

「何かあつたんだな。奴等に見つかったか…トシキの身に危険が及
ばなければいいが」

「………違う」

あぐらをかいて船を漕いでいたツキヨミが、目をつつすら開けて呟
いた。

「…あの7人に…こんなに強い術を使えるはずが…」

「分かるのか!？」

「“力”が発動している…それも…すごく強大な…」

ヒルメとスサは、それぞれ出くわした氷の術を思い出した。何もな
いところから氷が出現する様は、まるでよくできた手品でも見てい
るようだった。

「まさか、トシキ…!？」

「まさかじゃない。絶対よ！」

目的地…巫女修行の女たちの家についたときには、すでにそれが始
まっていた。

家からすぐ出たところに数人、それに向かって出てくる人影が確認
された。

「…やっぱり…」

少々くたびれてはいるが、大きな怪我はなさそうだ。利輝とは別サ
イドにいる連中の中心人物を見て、ヒルメが驚いたような声をあげ
た。

「イワナガ!？」

「なに!？」

夜でも目につくピンクの髪は、確かにイワナガのものだった。

イワナガはすつと手を挙げると、側に控えた狼たちに言い放った。

「行けっ！」

狼が歯を剥き出して襲いかかる。

しかし怯える女たちとは対照的に、利輝はいかにも余裕な風に佇んでいた。

そしてまた彼も手を挙げて言い放つ。

「風よ！」

すると利輝の立っている方角から突風が吹き、狼たちは宙に飛ばされた。

そして狼たちはそれぞれ1枚の紙に変わる。

「なんだ。紙切れだったのか」

「くっ…行けっ!!」

今度は屈強な男たちが雄叫びをあげて迫り来る。

「風よっ!!」

男たちもまた風に飛ばされ、それぞれ1枚の紙切れに姿を変じた。

「イワナガ、無駄な抵抗はよせ！でなければあんたを囲んでる障壁を壊してでも、神子様に荷担しなければならない！」

「私の術を破つてもだと？どこまで本気だ、クシナダ」

「全て本気だ」

利輝も同じく本気だったらしい。彼が続いて手を挙げると、森の中からシュルシュルとツルが現れた。

しかしイワナガはそのツルに縛られることなく、一刀ものに切り捨てる。

「イワナガ！」

「何も言うな」

そしてイワナガはかつての仲間たちを見る。

「私は王に選ばれなかったときから…何も信じぬ！」

最後の『ぬ』まで言いきったときだった。

さつきとは別の方向から、ツルがシュルシュルと現れたのは。

今度ばかりはイワナガも油断していたらしく、障壁を破ったツルは過たず獲物に絡み付く。

足から首にまで絡み付いたツルは、逃がさんとばかりに強く締め付

けてきた。

「……っ……」

イワナガは喉に絡み付くツルをほどこうとした。が、戒めは抵抗すればするほど強くなつてゆく。

「なぜこんな…影欠片は確かに始末したはず…っ、あんた、一体何者だい!？」

「何者だと？ 余の顔を見忘れたか」

暴 ン坊將軍ではない。というか、見忘れるも何も今日が初対面だし。

利輝は頭上にいる天田3兄弟を見つけると、見上げた姿勢のまま威厳ありげに言った。

「成敗!」

だから暴 ン坊將軍じゃないってのに。

視線を受けたスサとツキヨミが、空飛ぶ絨毯から飛び降りる。スサはイワナガに向かって剣を抜き、ツキヨミは首の勾玉を下唇に当てた。

その時。

「やめてえっ!!!」

利輝の後ろで固唾を飲んで見守っていた女のひとりが、走ってイワナガを背に立っていた。

「サクヤ？　そこをどけ！」

「嫌っ！　どかない！」

妹は姉に絡み付くツルを切っていた。しかしそこに新たなツルが絡み付き、一向に戒めがほどける気配がない。

「そいつは神子の命を狙う反逆者だ。反乱の種は始末せねばならない」

「…お姉様は…誰よりも国のことを…っ」

「…サク、ヤ…」

「どけ！　でないと、イワナガごとお前を切り捨てることになる」

スサの言葉にも、サクヤは動じなかった。

「アタシには分かる…お姉様の気持ちが…だからどかない」

「…サクヤ…ダメだ…」

イワナガが息も絶え絶えに言った。

「ダメだ…あんたは、アタシ、と、同じ道を歩いちゃ…いけない…っ」

拘束具の締め付けが過ぎたのか、イワナガはそれを最後に意識を手放した。

「お姉様！？」

拘束具であるツルはメジャーか掃除機のコードみたいに、シュルシユルと森に戻っていく。

倒れたイワナガを庇うようにして覆い被さり、サクヤはスサとツキヨミを威嚇するようにキツと見つめ返した。

その態度に反応したのは、スサでもツキヨミでもなく、後ろに佇んでいる利輝だった。

「スサ、ツキヨミ。引け」

2人は目を丸くした。一瞬幻聴かと本気で思った。

「…何を言ってる…トシキ」

「お前の命を狙った奴だぞ！？」

「余を誰と心得る！」

そう言われてしまえば、引くしかない。スサは剣を収め、ツキヨミは術の構えを解いた。

「身を呈してまで実姉を庇うとは天晴れな覚悟。致し方ない、その覚悟に免じて…今回は…見逃して…やろ、う…」

ふにやりと利輝が脱力する。

瀕死の状態で憑依していた弥生の代わりに、利輝の体を引き受けたのは、すぐ後ろにいたクシナダだった。

三十一話 お目覚めの…

弥生はこんこんと眠り続けている。

息もしていなければ、心臓も動いていない。まるで死んでるようだ。

+++++

微かにイワナガの睫毛が動く。

開いたばかりの朦朧とした眼差しが、高い天井の模様を追っている。

「…目が覚めたか。元気か？ 起きられるか？ 何か食う？ 鍋に粥あるぜ」

茫洋とした眼差しが声の主を見て、夢見るようにゆっくりと瞬いた。

「…スサ？」

そればかりではない。椅子の背凭れを逆向きに座ったスサの隣には、ツキヨミが眠たそうに立っていた。

「…なぜ…殺さなかった…」

意味を理解したスサは呆れた声を出した。

「はあ？ アホかお前。そんなことも分かんねーの？ 馬鹿じゃないなら少しは考える。それでも分からなかったら、教えてやるよ」

「反逆に対しては斬首と、それが慣例のはずだ」

「そうかもな。姉上もそうだと言っていた。だが、トシキ…神子がそれを拒んだ」

戸惑ったような沈黙の後、不審と警戒の色が差した。

「…それで…神子に、何の得がある」

「何もないんじゃないかな。イワナガ、今回の神子が慈悲深い方で良かったな」

「…良かった？」

「どこが。」

「そんな馬鹿げた話を、アタシが信じてるのとも思ってるのかい？」

「好きにしろよ。別に俺たちは何も困らねーし。信じる信じないは、

お前の自由だからな」

虚を衝かれたようなイワナガに気付いてか、それまで黙っていたツキヨミが口を開いた。

「…その前に…お前に訊きたいことがある…」

「やっぱりそうきたか。なんだ」

「…弥生の毒は…どうすれば解くことができる…」

イワナガの目が再び天井に向けられた。

「…解けないのか？」

「解くことはできる…だが、あの小さい体じゃもう毒が全身に回ってるだろう」

「では…」

しかし、とイワナガはぼつんと言った。

「あれは特殊な毒だ…ひとつだけ、全身に回った毒を消す方法がある」

「どんな！？」

イワナガは視線を合わせることなく言った。

「毒を無効化する方法…。…それは…」

＋＋＋＋＋

弥生はこんこんと眠り続けている。

「そんなに見守ってても、目を覚まさねえよオ」

「うるさい、チェシャ猫」

「見守っていれば呼吸するのか？止まった心臓は動くのかよ」

「うるさい！」

前回弥生が倒れたときは、10日間眠っていたとはいえ呼吸はして
たし、心臓も動いていた。看病していれば、見守っていれば、いつか
目を覚ますだろうと漠然と思っていた。

けど、今回は。

「弥生兎は死んだんだ。ここでもんやり見守るより、潔く葬ってや
った方がよくねーか？」

「ふざけるなあっ!!」

弥生が死んだ？ そんなこと、信じたくない。

信じない。

「怖い怖い」

「トシキ！」

チエシヤ猫が呟くのと、スサとツキヨミさんが雪崩れ込んでくるのは同時だった。

「弥生の毒の解毒方が分かった」

「本当に!？」

僕は椅子から立ち上がって2人に問い詰めた。

「どんな薬つかえばいいの？ 材料は、器具は、レシピは」

「…それがだな…トシキ…」

「なに？」

兄弟はバツが悪そうにお互いの顔を見合わせた。

「弥生の毒は…すでに全身に回っていて薬では効かない…。そこである術を、神子であるお前に施してもらいたいんだが…」

「どんな!？」

「弥生の口から呼気を吹き込むんだ」

.....はい？

今なんと仰いました？

「手っ取り早く言うと、口付け」

うわあー。やっぱりマウストゥーマウスとか言ってるよおお！ 頬
っぺとか額にならなんとかできるけど、く、く、く、口になんてっ
！！

「嫌か？」

「い、嫌とかそういう問題じゃなくて！...目を覚ましたときに、弥
生に怒られたりしないかな」

「まさか。仮にも命の恩人に怒るなんて」

だよねー。とはいっても、高校生くらいの女の子に口付けするのは
こそばゆい。

「わ、わ、悪いんだけどサ、僕が呼気を吹き込んでいる間、ちよっ
と後ろ向いててくれない？...ほら、チエシャ猫も」

2人と1匹はくるりと背を向けてくれた。

僕は弥生に覆い被さるようにして、出来る限り顔を近付ける。

そこまではできるのに。

（やっぱり…こそばゆいって言うか、照れ臭いって言うか…）

「なーにボサツとしてんだよ！ 早く済ませろ！」

「ぶっ」

チエシヤ猫に頭を蹴られた。

その拍子に、唇が。

「……………」

「……………」

「……………ねえ」

「なんだ？」

「僕、いま、微かに弥生と…確かに…」

「…ああ…」

「見た見た」

面白がって覗いてたな？ くそー。

「ていうか弥生、起きないじゃん！」

「あつれゝ?」

「…欺かれたか…?」

僕はもう、自暴自棄になって弥生を揺すったり抱き起こしたりしていた。

「弥生! 弥生っ!!」

「トシキ、その寝台は…」

「へっ?」

案の定、遅かった。

僕の体は木造の屋根を突き破って、弥生を抱いたままロケットみたいに急上昇した。

「嘘おおおおーっ!?!」

このログハウスにも大御神殿やお城と同じように、様々な仕掛けが用意されていると聞いた。中には防犯のために仕掛けた、そのまま天に召されるものもあるらしい。

でもそんな、こんな方法で天に召されるわけには…。

でも僕、2回ほど天に召されてなかった?

「また!?!」

弥生を抱き締めてることもあり、落とさないことにはかり気が集中して空気が肺に入ってこない。

僕は酸素を求めて、池のコイみたいに口をパクパクし…。

結局、前回前々回同様気を失った。

「キサ…キサ…キサ…」

キサ、って何？ 何度も軽いタッチで頬を叩かれて、肩を揺さぶられている。

「利輝様」

「うわ弥生っ」

トシキサマの『キサ』だったのか。弥生の顔のさらに上に、秋の気配漂う空が広がっている。

ペットショップの入り口の前だ。

「…あれ？…弥生…死にかけてたんじゃ…」

しかも服はミラ国仕様のものではなく、若い女の子に流行りのファッションだ。

なんだ。またしても気絶して夢を見てたのか。

「…あの…利輝様…」

「なに？」

起き上がった僕に、弥生はもじもじと体を揺り動かす。心なしか（人間の）耳まで赤い。

「助けていただいて…ありがとうございました」

弥生はペコリと頭を下げた。白いうなじが眩しい…。

じゃなくて！

「うひゃ」

スサヤツキヨミが言ってたように、口付けで弥生は生き返ったのか。そして僕と一緒に日本に来ちゃって、素早く日本仕様の服に着替え たってこと！？

弥生の腕時計が、チクタクと時を刻んでいた。僕の腕輪の文字盤が、朝日をペカリと反射した。

皆さん、お騒がせしました。

僕たちはいま、生きてます。

第三章 完

閑話 三つ子の幼少期

これは天田^{あまたの}3兄弟がまだ幼い頃。都ではなく乾の方角にある、領主の館にいた頃のお話…。

+++++

俺には“力”の欠片もないから、散々ヒルメ姉さんやツキヨミ兄さんと比べられて惨めな思いをしてきた。

自分で言うのもなんだけど、武術を磨くまでの俺は苦勞人だったんだ…。

「異界に生まれし有栖の神子！我が声を聞き、我が姿を見よ！さすれば影…」「」

肌の色から睫毛の長さまでそっくり同じ、4色の髪も同じ長さのヒルメ姉さんとツキヨミ兄さんが、同時に術を発動させようとしていた。

ちなみに当時の俺たちは弱冠5歳。それでも簡単な術くらいは使える。

「わー！！ 待ってくださいヒルメ姉さん、ツキヨミ兄さん！ 屋敷で術を使うのは禁じられているはずです！」

「スサ！」

「余計な口出しをするな！」

「でもですねっ！」

だって、とツキヨミ兄さんが涙を浮かべた。

「ヒルメ姉さんが俺のおやつ取ったんだもん（泣）」

「何をぬかすか愚民が！ この世は力の強い者が征す。弱肉強食は世の理なり！」
ことわり

俺は駆けつけた先からずっこけた。

「そっ、そんな理由でわざわざ術を使わないでください！！」

「「うるさいっ！！」「」」

2人の矛先は俺に向けられた。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！」

そしたら光が…光の球ができたんだよ！？ う、嘘じゃない。

確かにできたんだ！ そして、その光の球は俺のもとへ…。

「うわっ！？」

俺は間一髪でそれを避けた。

光の球がかすった服の一部が…少し、焦げていたけど。

「なっ…なっ…なにするんですかあっ！！ 仮にも屋敷の中で、しかも三つ子の末っ子に術をぶっ放すとは何事ですかっ！？」

「手加減しといたわ。それ以上、焼かれなくなかったら…あたしたちに口出ししないでちょうだい」

効果なし。

「異界に生まれし有栖の神子。我が声を聞き、我が姿を見よ」

するとヒルメ姉さんは赤く、ツキヨミ兄さんは青く光った。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり」

びよおおおお！

ごおおおおお！

ヒルメ姉さんの赤い光と、ツキヨミ兄さんの青い光が、それぞれ向かい合わせに立つ相手へと伸びていった。

光は真ん中で拮抗している。素人目で見れば2人の力は五分と五分。

「やつ、やめ…」

「やめなさい！！」

横から母さんの声が出たかと思うと、ヒルメ姉さんとツキヨミ兄さんは母さんの拳骨で空高く吹き飛ばされた…。

その後、俺たちは一列に正座させられて、こんこんとお説教されるハメになった。

怒られるときは当然のごとく俺も一緒だ。俺は止めようとしただけなのに（涙）。

だが我が両親にとってみれば、俺たちは3人で1つなのだ。

それは、たとえ俺たちのうち誰が王になっても変わらない…。

+++++

「…サ…スサ…」

揺り動かされて、俺は目を覚ました。

「…姉上」

「どうしたの？ ツキヨミじゃあるまいし、お茶の途中で寝るなんて…珍しい」

俺はボリボリと頭を搔いて起き上がった。

「最近、軍の方も色々あつてさ…疲れてんだよ…」

ふーん、と呟いて姉上はツキヨミの糖蜜菓子を盗んで食べた。

「っ、ツキヨミ…」

だがツキヨミは菓子を盗られたことにも気付かず、ボーッと宙を見

て別世界にいる。

彼らはいっかな変わらない…俺は、姉上とツキヨミを見てそう思う。居場所も変わらなければ、その顔ぶれが変わることもない。

姉上の治世はどのくらいだろう。死なない王朝はない、あまりに明白のことでありすぎる。…でも今は大丈夫だ。少なくとも、俺たち3人が支え合っている限りは。

…ひょっとしたら、大御神様はそんな俺たちに、国を治めてもらいたかったのかもしれない。

閑話 三つ子の幼少期（後書き）

いよいよ次回から第4章スタートです／＼（・・）ノ

三十二話 観覧車からのダイブ!?

今日は人生 回目のデート。

「…どーしてこんなコトにどーしてこんなコトにどーしてこんなコトに…」

「どうなさいました？ 利輝様」

ヒト型弥生と。

「…いや、なんでもない…」

事の始まりは和田店長が、僕にタダ券をくれたことだった。

『なんですこれ…動物公園？』

『知り合いに貰ったんだけど、遊園地とか犬猫以外の動物とかあんまり好きじゃないからさ。研修だと思って行っておいで』

仮にもペットショップの店長が、動物好きくないって何事ですか。いやそれより…。

『なぜにペア券？』

『2枚貰ったから』

『そうじゃなくてデスね、僕に男友達と行けと言っんですか』

『男友達じゃなくて、いるでしょ？ 彼女』

僕の思考は一時停止した。まず『彼女』という単語が誰と結び付くのかが分からなかったのだ。

『僕いま彼女とか恋人とかいない…』

『こないだ店に来た、高校生くらいの女の子とさ』

まさか。

『弥生と！？』

『弥生ちゃんていうんだ。…とにかく、その子と行っておいで』

『え、いや。弥生は彼女でも恋人でもないデスっ。誤解誤解、五回五階ごか痛っ』

またしても舌を咬んだ。

とにかく弥生とは親友みたいなもので、彼女でも恋人でもないと言
得した。

はずなのに。

「どーしてこんなコトになっちゃったんだ…」

いつの間にか僕は、弥生と2人で観覧車に乗っていた。

絶好のデート日和となった本日午後、カップルと親子連れと“女友達数人で来ています軍団”で混み合う中を、パンフ片手にうろついていた。

その“女友達数人で来ています軍団”の一组が、聞こえよがしに指を差す。

「ねーねー見てあのカップル」

「キヤーかわいいー。お人形さんみたーい」

「あんなにくつついちゃって、熱々よー。でもきつと今のうちだけよね」

「ナイスなりアクションありがとうございます。今のうちというより、今だけです！」

動物コーナーも堪能して、絶叫マシンは大抵乗ったし、お化け屋敷ではくつついて行動した。売店のクレープは美味しかった。そして今、観覧車で2人だけの時を過ごしている。

「でも前を見ると、彼女じゃなくて弥生ウサギ」

「ご不満ですか？ では隣に座りましょうか」

そういう問題じゃないというツッコミも待たず、縦にも横にもSサイズの身体が隣に移動した。そのとき、ちよつと手が触れ合って…恋に落ちそう。

人間の女の子ならね。

いきなり異世界に呼びつけられ、太古の人風情の皆さんに取り囲まれて、あなたは神子なんですって様付けで言われたら、誰でもこれは夢だと思う。

ところが目を覚ました自分の手首には、あちらで貰ったアイテムが。あれからずっと身に付けている、腕時計タイプの黒い腕輪。銀の文字盤の点滅は、夢ではないのだと訴える。

僕は“有栖の神子”として、役目を果たすと決心したんだ。

あの国のために。

「そつえばさ弥生…」

この際だから気になることを訊いてみた。

「弥生には恋人とかいないの？」

すると弥生は隣の席から降りて、僕の前に跪いた。芝居入ってる。

「私も“影欠片”は“有栖の神子”様のためだけに存在する者。全ては神子様だけのもの、恋愛など御法度です。何かのアニメでも仰っていますでしょう？『お前の物は俺の物、俺の物は俺の物』」

「ド えもん視てる時間あるんかいっ」

それ以前に、僕はそんなガキ大将な性格じゃないからね。

とにかく跪いてる弥生を座席に戻そうと、中腰で立ち上がった。

「やつ、弥生。他のお客さん達から変な目で見られるから、席に戻
っ……」

ときだった。

「うおあああああー!!」

立ち上がったそこに穴が開いて、僕と弥生が同時に落ちた。

まさか、そんな！ 観覧車の床下に、非常用出入り口があるなんて
！ というより今こそ非常時だ。こんな高さから落ちたら肉団子に
なってしまう。しかも。

「ふ、深すぎるでしょこれはあーっ!!」

あのスペースにこれだけの深さが？ ってくらい、その穴は深く暗
かった。そろそろ外に出てもいいんじゃないの？ ってほど。

だからってまさか、たかが遊園地の乗り物で、紐なしバンジージャ
ンプができるはずは……。

でも僕、過去に3回ほど落ちてなかった？

「また!？」

でもそんな、この深さで無事に済むなんて無理だ！ 物理的にも生

物学的にも無理だ！ プンセステ コーのイリユージョンだったとしても、無事に済む確証はどこにもないのに！

父さん、母さん、それに本ばかり読んでいた姉さん。

次に会うときは頭力チ割れてるかもしれません…。

三十三話 公爵夫人の案内状

僕は道路に俯せになって、脇の野原の草の匂いを思いきり嗅いでいた。舗装されていない道路なんて久しぶりだ。春の日差しは心地よく、草と土の匂いは芳しかった。

明らかに遊園地とは違う場所で目を覚まして、今更取り乱したりはしなかった。

だって、また喚ばれたんでしょ？ 僕。

穴に落ちて異世界にGO！ しちゃうのは初めてじゃない。下水道や池じゃないだけ今回の方がマシだ。…マシ…なんだけど…。

「何をしている！ どけ！！」

案の定、誰かに叱り飛ばされた。

「なにゆえ御進を妨げる！」

「ああ、す、すみません」

慌てて野原に腰を移動させると、牛車の中から淑やかなご婦人の声が聞こえた。

「…神子様？」

「え？」

そのご婦人は牛車を停めるよう命じると、御簾の向こうから静々と現れた。頭がカラフルで装飾品がてんこ盛りだ。

「…どこかで会ってます？」

へたなナンパみたいな質問にも、ご婦人は気を悪くするでもなく答えてくれた。

「わたくしは先帝^{ちだの}地田ナギが妻女、地田ナミと申します」

「ああ！！」

思い出した。

確か前の王様の奥様だという地田公爵夫人は、僕が初めてミラ国に来たときに横目でチラッとお会いした。

「トシキ！」

そのとき僕を案内してくれた面々が、僕を迎えに来てくれる。弥生もいつの間にウサギ型になったのか、後ろからピョンピョン跳ねてくる。そして地田公爵夫人に気付くと、慌ててペチャツと潰れる（平伏のつもり）。

「あ…公爵夫人」

そして2人も慌てて膝をつく。

「どうぞ皆様お立ち下さい。ほら、精霊さんも」

元妃殿下様は、身分に頓着しない性格なのだろうか。扇をパラリと広げて口許にあてる仕草はどこまでも優雅だ。

「そうですね。皆様、お城に向かわれるのでしたら、ご一緒にいかがですか？ わたくしもこれからお城に向かうところでしたの」

「は。かたじけのうございます」

この国では公爵夫人と王様の兄弟と、どっちが格上なんだろう。

とにかく僕たちは地田公爵夫人の牛車に乗って、お城へと向かったのだった。

+++++

彼は例年と同じく、今年も故郷の地田まであと少しという街の宿で、旅の休憩をとっていた。

露台から外を眺めていた彼は、ふと扉の向こうでさわさわとした幾つもの気配に気付いた。

「…私に行かせてよ」

「あなた去年お手紙届けたじゃない」

「そうよ、ひとりだけ抜け駆けして…」

彼は唇をゆるめると、扉を開いた。

「私に何かご用でしょうか」

宿で働く若い娘が3人、思わぬ不意打ちにビックリしたようにピヨンと飛び上がる。ふと、彼は真ん中に立つ娘が手にしている盆に目を落とした。小皿に菓子に乗っている。

娘たちは揃って顔を真っ赤にすると、真ん中の娘が勢いよく頭を下げながら盆を突き出した。

「お口に合わないかもしれませんが、どどどどうぞ！ 私たちで作りましたっ」

彼は菓子と娘たちを見比べ、首をかしげた。…私、に？

「…私が頂いても宜しいのですか？」

「もっ、もちろんです！」

「それでは、是非。嬉しいものですね」

彼は盆ではなくまず娘の髪に手を伸ばした。落ちかけていた娘の髪

飾りを指先でそつと直してやり、それから菓子盆を受けとる。

「きつと、引く手あまたでしょう。貴女方の心を射止める男たちが実に羨ましいものです」

微笑まれた娘たちは揃って耳まで赤くなった。

狼狽えながらペコリと頭を下げ、転がるようにして階下へと駆け降りていく。

扉を閉めた彼の耳にはもちろん、階下に降りた娘たちの『きゃー』という嬌声と興奮は聞こえなかった。

「相変わらず、なんて、なんて素敵でカッコいい、どら息子様なのー！」

+++++

「公爵夫人…まあ、久しぶりです！」

「ご無沙汰しております、女王陛下」

そう頭を下げる様子も麗しい。

ということであまたの天田三つ子、地田ナミ公爵夫人、僕とウサギ型弥生でテーブルを囲んでお茶会となった。

「それで、どうなさったの？ 公爵夫人がわざわざ自らいらっしゃるなんて」

「はい。…恥を忍んで正直に申し上げますと…」

公爵夫人はお茶を飲んでから深い溜め息をついた。

「…わたくしの、どら息子のことなんです」

「…ふあ？」

スサが菓子を頬張りながら先を促した。

「うちのどら息子は国中のあちこちを飛び回って、まるで家に居着く気配がございません。今はわたくしがいるからいいものの、あの子が地田当主を次いだらどうなるか」

「…はあ…。？」

ツキヨミさんが眠たそうな相づちで先を促す。

ヒルメさんにも目線で先を促され、公爵夫人はコクリと頷いた。

「そこでわたくしに一計がございまして」

そう言うと、公爵夫人は胸元から封筒を取り出した。

「いちばん丸く収まる可能性が高いのは、やはり嫁です」

3兄弟は今度こそ目を点にした。…嫁？

「今度、馬嘶館^{はせいかん}で大々的に舞踏会を行う予定です。それで、女王陛下とご兄弟にも参加して頂ければと」

国規模の舞踏会…なんかオオゴトになってきた。

「ということは、城の使用人の娘たちも参加してよろしいのね？」

「もちろんです。その中から、嫁候補が見つかるとうれしいのですが…」

「てことはさ弥生、もし見初められたりしたらさ、ゆくゆくは公爵夫人だよ？ スゴいじゃん！」

これには非難ごうごうだった。

「弥生が！？」

「弥生が嫁候補だって！？」

「え？ ぼ、僕になにか変なこと言いました？」

トシキ、とツキヨミさんがおネムな声で呼び掛けた。

「…またそんな戯れを…」

「そうだとシキ、弥生が嫁候補になれるわけないだろう」

「トシキ、精霊は奴隷階級なのだから……」

そもそも、舞踏会に参加できるはずないじゃないですか。

三十四話 ドタバタ舞踏会準備

地田公爵が一男、地田ワカヒコ。

一ヶ所に留まらず各地を旅して回っている遊び人で、その名はあまなく知れ渡っている。

肩書きにおいては元王太子殿下として、また私的な面においては…。

「もうもう他のオトコとは格が違うわよね!」

「噂によると、とろけるような美男子なんでしょ!？」

「でもでも、あの人は美貌っていうか、中身よ! 優しくて穏やかで誠実で。微笑まれたりなんかしたらもうダメ…」

「ああん。あれでどら息子だなんて、もー本当に信じらんない!」

家柄、美貌、教養ともに選り抜きのお嬢様でさえ骨抜きにしてしまう遊び人…それがワカヒコであった。

よって、その日公に発表された情報に、名家のお嬢様は震撼を覚えた。

親の持ってくるつまらない縁談話に飽き飽きしていたお嬢様たちの声なき歓喜に、大地が震えた。

『馬嘶館にて地田公爵夫人による舞踏会が開かれる』

つまりは地田ワカヒコのお嫁さん求人。

…やるしかない！

次期公爵夫人の座がかかっているということもあり、本人はもちろん親も娘の美容に全力で応援した。

新しく衣装を仕立て、化粧の研究をし、髪型を斬新なものにしたり、体格に問題のあるお嬢様はエステにも通った（エステサロンあるのかよ）。

今や国中のお嬢様というお嬢様はみな別嬪さんだった。その様子を見ていた地田公爵夫人は、喜ぶより先に涙を飲んだ。

（ワカヒコなんかのために、皆さんこんな立派になられて…）

嫁をもらった暁には鞭入れようと、公爵夫人は密かに決意した。

そんな諸々の思惑が交錯する中。

ついに当日。

+++++

東にアイロンがけしておいての声あれば、弥生がすっ飛んで火熨斗を当て、西に靴を磨いというの声あれば、僕がすっ飛んで布を手に参加する。

「み、神子様！ そんな手ずから靴磨きなどなさなくても。ここは私たちに任せておいて、神様は馬嘶館に行く支度をなさってください」

「なに言ってるんだよう！ そんな男性の使用人さんたちや精霊さんたちばかりに任せておけないよう」

僕にも招待状は届いていたのだが、本人を目の前に丁重にお断りした。オクラホマミキサーとマイムマイムしかダンス経験がないのでお城で働いている女の人といったら、全国でも選り抜きのお嬢様たちだ。よって地田家お嫁さん候補の有力株。それだけ身支度にも念が入る。

数え切れないほどのドレスを着てみるのに忙しく、宝石を飾ってみるのに忙しい。

使用人の女性たちが身支度に忙しい分、掃除や洗濯は全て使用人の男性たちや精霊さんたちに回ってきた。もちろん彼等に舞踏会に出る余裕はない。

余裕どころか権利もない。

そこで僕は少しでも忙しい皆様の役に立とうと、城内東西南北を駆けずり回ってるわけで。

「では皆様、ごきげんよう」

「また舞踏会の後にお会いしましょう」

「お留守番はしっかりお願いしますわね」

そう言い残して馬嘶館からのお迎えの牛車にルンルンと乗り込んでいった。

女性たちが去ると、使用人の男の人たちや精霊さんたちは脱け殻のようになっていた。とにかく地獄のような日中だった。

「……………弥生」

僕は窓から遠くを見ている弥生（ウサギ型）に話しかけた。

「本当は弥生も行きたかったんじゃないの？」

耳がピクリと反応する。

「もしかして、僕が行くことにしたら、弥生もついてこれた？」

実際のところ、僕が皆さんを手伝っていたのは、少しでも女性の皆様にチャンスを与えようと思ってのことだった。

しかし実際はそう甘くない。あちこち飛び回るだけでドレスのひとつも準備できなかった。

もし…と僕は思う。もし僕が舞踏会に行くことにしてたら、弥生も参加できたんじゃないか、と。

しかし弥生は首を振って、僕をちょこんと見上げてきた。

「…いいえ。たとえ神子様に参加なさっても、私ども精霊はお供できる身分ではございません」

それに、と弥生は視線を落とした。

「私“影欠片”は神子様だけのもの。舞踏会に出席しても、意味がありませんから」

「…弥生…」

「…アンタも舞踏会に行きたいのかい？」

突然のその声に、僕は視線を上げ、弥生は振り返った。

ここは五階だというのに、人が逆さまにぶら下がっていた。

「うわあっ!？」

「きゃあっ!？」

「せっかく助力しようと来てやったのに、うわあきゃあはないだらう」

見覚えのあるピンクの髪。

よりにもよってこんなときに、反乱未遂犯・イワナガさんの登場だった。

三十五話 魔法使い

「イワナガさんは、舞踏会に出席しないんですか？」

部屋に入れてお茶のおもてなしをすると、かたじけない、と言って軽く頭を下げた。

お侍さんじゃないんだから。ゴザルとかナリとか付けてくれれば、もっとこう、ウケ狙いとか思えるかもしれないのだが。

「アタシは大御神様に支える身、色恋沙汰の舞踏会なんざ興味ないのさ」

それに、とお茶を一口飲んでから続ける。

「…恐れ多くも神子様の命を狙った不届き者だからね。生かされているだけで充分奇跡的な話だよ」

「そんなこと…」

「で、…その精霊さんは、舞踏会に行きたいのかい？」

その問いに弥生はピクリと反応した。

「わ、私は…」

弥生は視線を右に左にさまよわせる。

「私は“有栖の神子”様に支える“影欠片”です。恋愛など、ご法度です。…でも」

「…？ でも？」

「綺麗な格好をして、殿方と踊ることは、その…ひ、人並みに…憧れてはいます…」

そう言つて恥じ入るように俯いた。

「…で？」

「は、はいっ！」

急に視線を向けられ、僕は姿勢をピンと正す。

「神子様としてはどうなんだい？ 影欠片のこの言い分は許せるのかい」

「……。…僕は…」

しばらく黙つて考えをまとめてから。

「僕は…弥生が幸せになるなら、それでいいです。たとえ地田公爵夫人の息子さんに見初められて、地田家にお嫁に行くことになつても」

「そんな！ 神子様！」

悲鳴のような、叱責のような声で振り返る弥生に、僕は笑顔で応える。

「弥生も、僕と何だかんだ疑われるよりは、好きな人と一緒にいた方がいいでしょ？」

「そんな…私がお側にいるのは嫌ですか!？」

「違う!!…弥生には、本当に幸せになってもらいたいんだ」

…そういうことにしてもらおう。

僕にとって弥生は大切な親友みたいなものだけど、弥生にとっては僕が最良の相手とはまかり間違ってもいえない。

「…分かった」

そうポツリとこぼすと、イワナガさんは指を鳴らした。

「地田ワカヒコに見初められるようにはできないが、精霊だとバレずに馬嘶館に行けるようはしてみよう」

「え？　そ、それって…」

イワナガさんはニツと笑った。

「要するに、人間に化けて舞踏会に出られればいいんだろ？」

「いいんだろ？　って…イワナガさん、そんな術使えるの!？」

当たり前さ、とイワナガさんは茶托を鳴らした。

「もともとアタシらの使う術は、神子様の強大な御力を借りて発動させるものなのさ。これだけ至近距離にいりゃ、それくらいの御力は借りられるだろう」

「ええー!？」

勝手に借りないでよー!!

「で、どうするんだい？」

「…お、お願いシマス…」

逆らえるだけの勇気がなかった。

「アンタは？ 精霊さん」

「…はい…神子様がそう仰るのであれば…」

「決まりだね」イワナガさんはふう、と溜め息をつく、と胸元から扇子のようなものを2つ取り出した。それを広げ、蝶の羽のような形にクロスさせる。

「異界に生まれし有栖の神子、我が声を聞き、我が姿を見よ！」

弥生の体が光に包まれた。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり!!」

カアアアアアア…。

弥生はさらに強い光に包まれ、次に見えた姿は…。

「…神子様…？」

「…弥生…だよね？」

髪を結って、太古の人風ロングドレスに身を包んだヒト型弥生は、とびきり美人になっていた。

「ついでに神子様も」

「えっ！？　ぼ、僕？」

「当たり前だ。乙女が单身会場に乗り込んでどうする。付き人の1人くらいつけねば」

そしてまた扇子をクロスさせる。

「異界に生まれし有栖の神子！　我が声を聞き、我が姿を見よ！！」

カアアアアアア…。

眩しいくらいの光に包まれ、次に目を開けた僕の姿は…。

「…僕どうなってる？」

「栗色の髪をした、日本国で言う“いけめん”になってます」

「でひゃー！」

いま遠回しに『モトはカッコよくない』とか言われたー！

「あつ。で、でも元の神子様も素敵ですよ！」

「…遅すぎる慰めどうもありがとう…」

「さあさあ早く出発しないと間に合わないよ！ 城の外にアタシの馬車を待機させてるから」

かくして僕たちはイワナガさんの馬車に揺られ、馬嘶館へと向かったのだ。

三十六話 馬嘶館にて

「ついたよ。ここが馬嘶館だ」

日本生まれ日本育ちの僕としては、鹿鳴館みたいな、ちょっと欧米化っ！な建物を想像していたのだが、馬嘶館はその予想をことごとく裏切った。一見すると。

「…鐘が鳴るなり法隆寺…」

世界遺産でダンスパーティー。

「ありがとうございますイワナガ様…ですが…」

「？ ですか？」

「…靴だけがボロボロなんです」

なに！？

確かに弥生の靴は泥と傷だらけで、この荘厳な場所には不似合いだった。見学する分には無問題なのだが。

「ちっ、靴だけトチったか」

ちっ、て！ ちっ、てどういうこと！？

「仕方ない。これを履きな」

イワナガさんは何かの手品か魔法（たぶん後者）で、何もない所から靴を出現させた。太古のデザインの、ガラスで出来た靴だ。

「…ガラスのペタンコ靴…」

「きつくはないかい？」

「…ちょっとブカブカしますけど…大丈夫です。ありがとうございます。」

イワナガさんは満足げに笑った。

「最初に忠告しておくが、アタシの術は本日付だ。日付が変われば術の効果が切れる。それを忘れるんじゃないよ」

そして降りるように指示されて、エスコート役の僕が先に降りるこ
とになった。

「さ。気をつけて…下さい、弥生お嬢様」

「ありがとうございます、み…利輝、さん」

主従関係下剋上。

十十十十十

なかなか好みの娘がない、と地田ワカヒコは思っていた。

確かにどの娘も別嬪さんだが、イマイチ性格的に求めるものが足りない。

大抵の女は地位や権威のある男に弱い。放浪の旅の話に挨拶程度に触れながら、交友関係を聞き出そうとする娘や持ち物について話題に出す娘ばかりで飽き飽きする。

ワカヒコの求めているのは、もっとこう、清楚で淑やかで男の3歩後ろを歩くような娘だ。

あの娘のように。

(…ん?)

あの、娘のように？

見ると、栗色の髪をした色男の手をとって、未知の空間に迷い込んだかのようにキョロキョロしてる小柄な娘がいた。

そして偶然、遠目に彼女を見ていたワカヒコと目が合う。

そのとき、ワカヒコの体に微弱電流が走った。

気付けばワカヒコは、群がる女性たちを掻き分けてその少女のもとへ向かっていた。

「あれ…弥生じゃねーか？」

「ええ？」

栗毛の男から離れ、ワカヒコの手をとり踊っている少女は、確かに弥生にそっくりだった。

でもまさか。あれほど雑務に追われて、ましてや精霊の立場で、絢爛豪華な衣装や飾りを用意できるはずが…。

と、栗毛の男が挨拶に来た。…コイツも見覚えがあるような…。

「…トシキ…」

「なに？」

……………。

…謎は全てとけた…。

「なんつでトシキがここにいるんだよ！？ しかもなに男前に変身しちゃってんだよ！？」

「うわまた『モトはカッコよくない』って言われたー」

「スサ、静かになさい。トシキ？トシキなのね？　なぜ貴方が弥生を連れてここに！？」

「ままた待つてそんなに肩をゆさ、揺さぶらないで下さい。お城にイワナガさんが来て、イワナガさんの術で変装してここまで……」

「イワナガの？」

ヒルメの肩を揺さぶる手が止まった。

ワカヒコを見れば、一向に弥生から離れる気配がない。

「でっ、でも、日付が変わるまでって条件付きなので、勘弁してくださいっ」

栗毛利輝はそう言つて深々と頭を下げた。まったくもって威厳の欠片もない奴だ。

「……で、トシキは大丈夫なのか……？」

「何が？」

「だから、万が一弥生がワカヒコに見初められたとして輿入れしたとして、お前は何とも思わないのか？」

「うーん、まあ、寂しいなーくらいには思つたろっけど」

三つ子は互いに顔を見合わせた。

「日本に來られなくなるのは残念だけど、こっちに來たときに、また弥生の手料理ご馳走になれるもんね」

「はあ？ なに言ってるんのトシキ。弥生とワカヒコが結ばれたら、弥生はワカヒコのものになるんだよ。もうお前が弥生に何かしてもらう権利なんてなくなるんだ。料理くらい、新しい“影欠片”に作ってもらえ」

利輝は目を瞬いた。まるでそんなこと、考えもしなかったという顔だ。

ヒルメは鏡を持ってこなかったことを残念に思った。あれば子供のように狼狽える姿を見せてあげられたのに。

三十七話 舞踏会からの大脱走！

ワカヒコは、その娘を気に入ってしまった。

小柄な体格、真摯な目。家柄についてしつこく詮索するでもなければ、次期地田家当主だからといって好奇の目で見てくることはない。

ちよっとオドオドした所作も、ワカヒコには可愛くうつつた。

「きみ、名前は？」

「…弥生、です…」

弥生は嘘をつかなかった。

「ヤヨイちゃんっていうんだ。どこのお嬢様？」

「…お城に…勤めております…」

弥生は嘘をつかなかった。

「お城では、何を？」

「…神子様の…お世話を、させて頂いております…」

うーん。嘘をつかないにも限度があるな。

「きみ、好きな食べ物？」

「…お野菜、です…特に、人参とか…」

「ヤヨイちゃんってば兎みたいだねー」

まあ、半分ウサギみたいなものなんですけどね。

「ワカヒコ様のお好きな食べ物？」

「女。なんちゃって」

弥生は耳たぶまで赤くなった。

（可愛いなあ）

こういう恥じらう仕草とかも、ワカヒコの男心を容赦なく攪る。

「じゃあヤヨイちゃんってさ…」

ゴ…ン。

日付が変わることを告げる鐘の音が聞こえた。

弥生は真っ青になってワカヒコの手をほどいた。

「…行かなくちゃ」

「え？」

「ごめんなさい、失礼します！」

「ちょっと、待ってヤヨイちゃん！」

待たなかった。

+++++

日付が変わることを告げる鐘の音が、僕の耳にも聞こえた。

「神子…利輝さん！」

「あ、ああ。失礼しますヒル…女王陛下」

頭を下げてその場を去る。だんだん従者っぽくなってきた。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺。柿を食べ終わる前に…じゃなかった、

鐘が鳴り終わる前に馬嘶館から出なくちゃ。

「ヤヨイちゃん！ 待って！」

ワカヒコさんが必死の形相で追いかける。僕は弥生を引つ張る形で会場から抜け出した。だが、問題がひとつだけあった。

弥生の格好だ。ロングドレスにサイズの合わないやや大きめのガラスの靴では、動きにくいし速く走れない。

「ッ！」

僕は弥生の膝裏に手を滑らせ、お姫様だっこして先を急いだ。

「利輝さん！？」

「何も言わないで下さい、お嬢様！」

すっかり役になりきってる。

「おい、花嫁候補が逃げるぞ」

おいおい、いつから弥生はそこまで格上げされたんだ？

「戻れ！ あいつめ、花嫁候補をさらうつもりだーっ！」

「へええっ！？」

逃げると拐うじゃ大間違いだ。このままじゃ駆け落ち者扱いされてしまう。

急いだ拍子に弥生のスカートからポトツと何かが落ちた。

「利輝さん、靴がっ！」

「やだ！ 止まらない」

止まったら誘拐犯として連行されてしまう。

「止まれ！ 止まるんだ！！」

僕たちはなんとか鐘が鳴り終わる前に、法隆寺…馬嘶館の門を潜ることができた。

イワナガさんの言うとおり、僕たちにかかっていた術は呆気なくとけてしまう。

お姫様だっこしていた弥生はウサギの形に、僕の栗毛も（前髪を見るかぎり）黒髪に戻って、使用人仕様だった服もエプロン姿になっていた。

そこにタイミングをはかったかのように、追っ手の馬が僕たちの横で前肢を振り上げて止まる。

「おい小僧」

小僧、って。僕ちゃんとした大学生なんだから。

「このあたりを、女を抱えた男が通らなかつたか」

口を開けばボ口を出してしまいそうだったので、首を横に振るだけに留めた。

「探せ！」

そして馬がいなくなる。

「…神子様…これ…」

「ん？」

足元に何かキラキラしたものが落ちている。しゃがんでそれを拾ってみると、弥生が履いていたガラスの靴だった。

「これだけは術の効果が切れなかったんだな…弥生、舞踏会は楽しかった？」

不意打ちとも思えるタイミングでの問いに、弥生ははにかみながら、間をあけてコクリと頷いた。

三十八話　ワカヒコの手段

あの娘を嫁にもらいたい。

ワカヒコは唯一手元に残った硝子の靴を前に悶々としていた。

王城の使用人を調べ尽くしたが、その中に『ヤヨイ』という名の女性は見つからなかった。

こうなったらもう、あの手しかないのでは。

「誰か！　誰かここに！」

「はっ」

ワカヒコは硝子の靴を高々と上げた。

「この靴に足が入る者を、しらみ潰しに探し出せ。それから」

そう。

あの栗毛の男。

ヤヨイの使用人らしかったが、彼がヤヨイを抱き抱えて逃げたりしなければ、ヤヨイは自分のもとから離れなかったのだ。

…許せない…！

「二十歳前後の栗毛の男を至急指名手配せよ！ 国中のあらゆるところから引つ張り出せ！！」

「はっ」

ワカヒコは睨むように使用人を見た。舌打ちでも聞こえてきそうな声だった。

「大至急だ。よいな！」

+++++

「…あの〜」

「なんでしょう、神子様」

「…僕はこれから何をすればいいの？」

「なにも」

そう言われると、かえって困ってしまう。

こんなに長くお城にご厄介になったことはない。最初は事件に巻き込まれ、2回目は海外、3回目に来たときは王都から離れたログハウスだった。

最初こそ使用人さんたちのお手伝いをしててんやわんやだったが、女性たちは仕事に戻ってしまい僕は手持ちぶさた。

これじゃ何のために喚ばれたのか分かりやしない。

「お起きになりますか」

問われるところを見ると、このまま寝ていても起きても構わないらしい。

「起きます」

僕はキングサイズのベッドから身体を起こした。

洗面をし、服を……こっちに来たときに着てたやつを洗ってくれたのを……着替え、促されるまま隣の部屋に行くと、部屋の中央には朝食のせられたテーブルがあった。

「おはよう、弥生」

テーブルの側にいた弥生に声をかけると、弥生は嬉しそうに笑う。

「おはようございます、神子様。よくお休みになれましたか？」

「サイコーの目覚めだよ」

こんなに時間を気にしないで寝たのは久しぶりだ。平日は学校だし、休日もバイトがある。

僕は食卓を眺め、箸を持ちながら弥生を見た。小柄な彼女だが、椅子に座ると目線はだいたい同じになる。

「あれから随分経つけど…地田家から何も連絡来ないね」

童話や刑事ドラマなんかじゃ、遺留品からすぐにでも身元を割り出すものだけだ。

弥生は半分残念そうに、半分安心したように微笑んだ。

「きっと私のことなど、眼中になかったのでございましょう」

「そうは思えないな」

「失礼するぞトシキ！」

スサがバーンと扉を蹴破ってきたのは、一口目を口に入れたときだった。

「どうしたの、スサ」

「たった今、地田ワカヒコからの使者が」

「来たんだね!？」

ガラスの靴を持った王子様が！

しかしスサの顔は険しいものだった。なんか様子がおかしい。

「ああ。城で働いてる、20前後の栗毛の男をしょっ引いて行った」

……………え？

今なんと仰いました！？

「ええーっ！？」

探してるのは弥生じゃなくて、イケメンに扮した僕だってこと！？

僕たちは絨毯で空を飛ぶという、アラビアンナイトな交通手段で地田邸まで文字通り飛んでいった。

「ワカヒコさんっ」

「神子様…わざわざ遠路から如何様に」

「お城から連れていったっていう、栗毛の人たちはどうしたの！？」

「ああ…」

あのことが、という態度でワカヒコさんは案内してくれた。長い廊

下を渡りきると広々と開けた庭がある。

花もなければ池もない。

「ここどこ」

「刑場です」

ワカヒコさんが単純かつ明確に答えてくれた。

「刑場！？　なんで…」

「硝子の靴を残した少女を、栗毛の男が拉致しまして」

拉致って、ちゃんとしたエスコートですよ。時間もなかったし。

「国中からその男の特徴のある者を集めました、誰も少女のことには口を割りません。ですからこれから拷問にかけて…」

物騒な単語を耳にした気がする。

「拷問！？」

そんな！　待つてよ。不思議の集う不思議の国では、そんな非人道的なことが許されるの！？

僕が何か文句のひとつでも口にしようと思口をパクパクしてると、左右から縄を打たれた栗毛の男の人たちが現れた。

彼らは縄を打たれたまま椅子に座らせられて…ここから先は惨す

ぎてダメだ。

刑場で大の男たちが、走る痛みに悲鳴をあげている。

僕は直視できなくて、下を向いて目を閉じた。聴覚がとらえる痛々しい悲鳴には、爪が食い込むまで拳を握った。

(…ただ弥生を探すだけで…っ)

たった1人を探すために。それが大の男が悲鳴をあげるほどのものか。

呼吸と鼓動は荒くなり、生きた心地がなくなる。

それを打ち消すようにアドレナリンが吹き出して、全身に広がる活力と恍惚感。

記憶の襞から心の中で、誰かが優しく促した。

我が影をとらえ、我が名を呼べ。

さあ。

(そんなのは無理だ。僕にそんなこと、まだできるわけない)

ではどうしたい。

誰かの助けが必要か。

(違う)

自分に力が欲しいんだ。

我が影をとらえ、我が名を呼べ。

さすれば汝、天の力を受け継がん。

「…我が声を聞き、我が姿を見よ…」

「トシキ…？」

我が名は…。

「…ジャック…!!」

さすれば影、汝のもとにひれ伏せり。

三十九話 親子愛

神子様が変身した。

あの日と同じ、栗色の髪をした男前に姿を変えてみせた。

「…神子…様…？」

ワカヒコは驚愕を隠しきれず、首を横にブルブル振っている。

有栖の神子の豹変ぶりに、利輝陣営以外の者は目を丸くしていた。

現に拷問の手も止まっている…。

「…さて、地田ワカヒコとやら」

「ひいっ！？」

あまりの怒気にワカヒコは思わず情けない声を上げた。

「おぬしの探している男は目の前にいるが、いかがする」

「あれ？ 何か新しい小芝居が入ったみたいだな」

スサののんびりした声に振り向く様子もない。

「己の望みを叶えんと、罪なき者を拷問にかけるとは…」

そしてビシッと食指を突きつける。

「その所業、すでに人に非ず！」

「ひーっ…！」

ワカヒコは逃げようとして失敗し、その場に腰を打った。

「火よ、風よ、水よ、大地よ！ この者を捕らえてここにひれ伏させよ！」

すると突然。

火の気のないところから突然出火し、それが風に煽られてワカヒコの背後に炎の壁をつくった。

同様に水気のないところから鉄砲水が飛び出し、それが水の帯となつてワカヒコに絡み付く。

手の自由を失い、ワカヒコは足で逃れようとするが、両足が地面に埋まつて一切身動きがとれなかった。

「くっ…なぜ、このような…っ、有栖の神子様！ 貴方は一体何者ですかっ」

「何者だと？ 余の顔を見忘れたか」

これは暴 ん坊將軍ではない。

「地獄の鬼ですらそっぽを向くような残虐非道ぶり…断じて許すわけにいかぬっ」

「…ぐっ…」

水の帯の締め付けが強くなった。

「成敗！」

だから暴　ん坊將軍じゃないっつーのに。

ツキヨミが一步後ろに下がり、スサが成敗しようとスラリと剣を抜いたときだった。

「ワカヒコ！」

その場に凜とした声が聞こえたかと思うと、利輝陣営の後ろから地田公爵夫人が駆け寄ってきた。

公爵夫人は炎の壁からチラリと覗く拷問の現場を見て、小さく悲鳴をあげた。

「ワカヒコや、これはどういうことです」

「え、いや、あの、その…」

パー…アン！

「……………ッ！」

スサの代わりに、公爵夫人がワカヒコを成敗した。

その秀麗な顔に容赦なく、公爵夫人は平手を打ったのだ。

「…お前は、恥ずかしい子です。いくらお前の望みが強かろうと、他所様にこのような無体なことを…」

「…母上…」

公爵夫人は利輝に振り向くと、躊躇いもせずその両膝を地面につけた。

「有栖の神子様…ワカヒコのこの所業は、決して許されることではありません。しかしその責任はわたくしめにあります。どうか罰を下されるのでしたら、このわたくしが一切を引き受けましょう」

「母上っ！」

ワカヒコは遠のく意識の中で、真っ向から利輝を見た。

「有栖の神子様、母の言葉に耳を傾けてはなりません。この罪は全て私ひとりで行ったこと。どうか母上にはご慈悲をもって、罰はこの私に…っ！」

「ワカヒコ…」

スサが親と子のどちらを成敗すればいいのか迷っていると、後ろから静かな命令が聞こえた。

「スサ、もうよい」

「だがトシキ…！」

「余を誰と心得る！」

「…前にも同じようなこと言われたな…」

そう言われてしまえば、刀身を収めるしかない。

「地田ワカヒコ、己の所業を悔い、よくよく改心いたせ。余にも情けは…あ…る…」

炎の壁が一瞬にして消え失せ、水の帯も地面の足枷も無くなる。

利輝が前のめりに倒れて膝をつくのと、憑依していた弥生兎がその脂汗したたる顔を、心配そうに覗き込むのは同時だった。

「神子様、大丈夫でございますか！？」

意外にも利輝はにっこり笑ってみせた。

「うん。ちょっとフラついただけだから」

「い、意識があるのか！？」

スサモツキヨミも驚いた。いつものパターンなら意識を手放すところなのに。

「ワカヒコさん」

「…は、はい…」

すっかり元の黒髪に戻った利輝は、まだ利輝に畏怖を抱いているワカヒコに笑いかけた。

「ガラスの靴が残ってたでしょう？ あれ、この弥生がもう片方持ってますから」

「このヤヨイって…」

そこまできて、ハッと気付いた。

「まさか！」

弥生兎は申し訳なさそうに鼻をヒクヒクさせると、平伏するようにしてペシャッと潰れた。

四十話 帰郷…のはずが

ガラスの靴も若干ブカブカながらピッタリ合い、もう片方を弥生が所持していたということもあって、弥生は晴れて地田ワカヒコさんに…。

ということとはなかった。

ワカヒコさんは『精霊でも兎でも関係ない、是非とも私の第一夫人に』と（第一夫人って、何人奥さん貰う気ですか）言ってきたのだが。

『私は“有栖の神子”様の“影欠片”です。如何様に申されましても、神子様のために生きる覚悟を決めておりますから』

とアツサリ振った。

勿体無いことこの上無し。

ワカヒコさんのプロポーズを退けたその後、ワカヒコさんが僕に痛い視線を寄越したのがみょーに気になる。

「てことはトシキは、どんな美女にも振り向かなかったワカヒコを振り向かせた女を、独り占めできるってことだよな。すげーや」

「…もしかしくなくても…城中の女を敵にまわすかもしれないな…」

「う…それだけはお勘弁…」

なんとしても阻止せねば、いやその前にほとぼりが冷めるまで姿を眩まそうと固く決心した。

「こりやまた、えらく大胆なお誘いだな」

恨みが深くなならないうちに姿を眩まそうと、遊びに来ていたチエシヤ猫にお風呂を一緒にと誘った僕に、チエシヤ猫は緑の目を丸くした。

「一緒にお風呂場に来てくれるだけでいいんだって。」

「まあ湯殿に行くだけならべつに構わねーけど…」

「じゃあお風呂！　今すぐ！　ってなに入浴の準備してるの。猫のままでは充分だよ」

和田店長に教わった抱き方でチエシヤ猫を両手に持ち、勝手知ったるお城のお風呂場に向かった。

今は掃除中ですので、僕を制止したお掃除担当さんを押しきって、僕は湯も水もない空っぱの湯船へと押し進む。

「おい有栖利輝、湯が入ってない…」

「せーのっ」

どんっ。

呆気にとられるチェシャ猫の目の前で、中身のない湯船にダイブする。

僕の体は重力の法則に則って落下し、湯船の底で尻餅をついた。

「あいつたゝ…」

「何やってるんだ？」

「ごめん。ちょっと背中押してくれない？」

両膝と両手をつく格好になって、チェシャ猫に背中を向けてみる。

「押して」

「だから、何の遊びだ？」

チェシャ猫が僕の背中に絡み付く。いきなり重さが加わった衝撃で、湯船の底が落とし穴みたいにドーンと崩れた。

「…へっ、城の風呂場にこんな仕掛けが…、…どうした？ 有栖利輝」

僕は痛む臀部をさすりながら、落とし穴の中でゆっくりと立ち上がる。

戻れない。

「…戻れないんだ」

「まあそうだろうな。この深さじゃ自力で…」

「違うよっ」

僕はチエシヤ猫に怒鳴っていた。

「帰れないんだよ。家に、日本に！今までトラップ関係だったから、今度も何かの仕掛けでバビューンじゃないかって、お城のトラップの場所をヒルメさんに教えてもらってやってみただけど…どうしてもダメなんだよっ！」

掃除係の人に救出してもらって、今度は弥生も連れて大御神殿まで向かった。大御神様に報連相すれば、帰してもらえるかもしれないと、最初に教わったのを思い出したからだ。

ヒト型弥生が祭壇に向かって膝をつく。大御神様との交信方法らしい。

「…弥生…？」

「…ダメです。お声が聞こえません…」

そんな。

「そんな…どうにかならないのっ!？」

弥生は本当に申し訳なさそうに俯いた。

「申し訳ございません…大御神様の御力がなければ、たとえ時環^{ときわ}を身に付けていても帰れないのです」

「でもっ…」

「話の分からない奴だなあっ!」

それまで黙っていたチエシヤ猫が、僕に食って掛かってきた。

「お前はこの国の神子なんだから、どこにも行く必要はないだろうが。ずっと、半永久的に、永遠にいるのが当たり前じゃないか」

「でも…! 帰れないなんて…」

考えてもみなかったんだ。

「嘘だろ…家族になんて…いやもう何一つ言えないのかも。僕にだって妻子が」

「妻子がいるのか？」

「こんなときに揚げ足とらないでよ! 親姉弟だよつ。僕にだって両親も姉さんもいるんだ。友達だっているんだ。なのに急に会えな

くなるなんて…そんなバカな。そんな理不尽な話が…」

ちっ、とチエシャ猫が舌打ちするのがやけに大きく聞こえた。

「今度の神子様は、そのくれえの覚悟も持ってなかったのか」

僕は安易に受け入れすぎたんだ…。

別離は誰にでも訪れる。

どちらが去るか、ただそれだけ。

第4章 完

閑話 和田店長の1日異世界旅行

ぼくは入り口のマットをはたき、元通りに敷き直した。

今日は暑くもなく寒くもなくちょうどいい天気だ。

「利輝くんたち、楽しんでるかな…」

ぼくは背伸びしながら思った。きっと彼女と一緒に動物たちとふれあっていることだろう。

さてと、今日も1日頑張らなくちゃ。

そして入り口の扉を開け、片足だけ中に入った。

が、うっかり足を滑らせてしまい、尻餅を…。

「っあれ？」

つかなかった。

それどころかぼくの体は、深い穴へと落ちていくではないか！

「嘘だろおおおおー！？」

まさか！ そんな！ 勝手知ったる自分の店に、こんな落とし穴が

あるなんて！！ しかも大の男であるぼくがなかなか到達しないほど、真っ暗で深い穴だなんてっ。

（そうじ…利輝くん任せっきりだったからかも…）

なんて反省してる場合じゃない。

ぼくがいなくなったら、ペットショップはどうなるのー！？

+++++

「ん？」

「どうかなさいましたか？ 神子様」

弥生がお茶を淹れる手を止める。そして僕の手首を見て、あ、と声をあげた。

「時環がビカビカなってる…」

すると、向かいに座っていたヒルメさんが、ハッと窓に振り向いた。リンゴーンと荘厳な鐘の音が聞こえる。

3時のティータイム。

そこに事件は起きた。

「…時計塔じゃ」

「はあ？」

「いま、時計塔に“不適合者”が現れた…」

ヒルメさんは立ち上がってスサとツキヨミさんと僕を見た。

「勅命じゃ。今すぐ時計塔に向かい、“不適合者”をここに引っ捕らえよ」

「「はいっ!」「」

引っ捕らえるなんて、なんか物騒な響きだ。

とにかく僕たちはツキヨミさんの術で空飛ぶ絨毯に乗り、その“不適合者”を迎えに参じた。

「トシキ、ここは俺が…」

時計塔の中にまずスサが入ると、中から悲鳴が聞こえてきた。おそらく剣でも向けたんだろう。

……………ん？

悲鳴？

「…トシキ…？」

僕は薄暗い内部に入っていた。

そこにいたのは。

「……利輝くん……？」

「……和田店長……？」

僕のバイト先『犬猫専門ペットショップA L I C E』店長、和田さんだった。

「…ということです。つまり店長は、なんらかの事情によって異世界に落ちてしまったんですよ」

「ごめん。もう一回説明してもらっていいかな？」

「和田店長…これでもう8回目なのですが…」

「そんなこと言われたって、そんな話信じられないよー」

「店長さんって頭固いんだねえ〜？」

「うるさい！ 誰が信じるかそんな話！ 嘘をつくにもほどが」
「汝のもとにひれ伏せり…」

シュルシュルシュルッ。

ツキヨミさんの術で近くの草の根を掻き分けて、何かのツルが店長に巻き付いた。

「…これでもまだ信じられませんか」

ギリギリギリ…と店長をツルが締め付ける音がする。

「…し、信じます…」

絞め殺されてはたまらない。

「まあ、じゃあ貴方がトシキのお世話になっているお店の店長さん？
弥生からお話は聞いてるわ」

「ご無沙汰しております和田店長様」

女性2人とはすぐに打ち解けた（じゃないとまた殺されかけるから）

。弥生がヒト型で助かったよ。

店長はこの世界にとって“不適合者”であるため、ヒルメさんの術で送り返すことが出来るという。

というわけで女王陛下のささやかな休息、ティータイムを店長と一緒に過ごすことになった。本人からすれば早く帰りたいだろうに。

「ところで弥生、今日のお茶請けは何？」

「今日は“ころっけ”でございます」

と言われて僕たち日本人の前に出されたのは。

「…ジャガイモの素揚げ？」

「これのどこがコロツケ!？」

「え？ 歌のとおりに作りましたが…。『いざ進めやキッチン、目指すはジャガイモ、揚げればコロツケだよ、キャベツはどうした』。キャベツも添えましたし」

「「歌はしよりすぎ!-!」」

それより、キャベツはせん切りにして出してよ。

そして和田店長は大御神殿へと連れていかれた。

床に曼荼羅みたいな模様が浮かび上がっていて、和田店長はその中央に立っている。

ヒルメさんは額に貼っている飾りに手を当てた。

「異界に生まれし有栖の神子、我が声を聞き、我が姿を見よ！」

すると、床の模様が薄ぼんやりと輝き、下から風が吹きあがった。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！！」

その瞬間。

模様は深い深い穴へと変じ、店長は吸い込まれるようにして落ちていった。

光がおさまる頃、そこはただの床に戻っていた。

+++++

気がつくと、ぼくは店のカウンターでうつ伏せになっていた。

どうやらうたた寝してしまったらしい。

「…夢…？」

夢だね。だって動物公園でデート中の利輝ちゃんと弥生ちゃんが異世界にいるわけないし。

そのわりには痛いことがあっても目を覚まさなかったけど…。

カランカラン。

来客を告げるベルが鳴った。

「あ。いらっしゃいます」

今日も忙しくなりそうだ。

さあ、利輝くんのいない分まで頑張ろう！

閑話 和田店長の1日異世界旅行（後書き）

いよいよ次回から第5章スタートです、（・ ・ ・）ノ

四十一話 僕の決意

大御神殿で神子修行。

「…なんでこんなことに…」

「どうなさいました神子様？ さきほどから訳の分からないことばかりブツブツ仰ってますよ」

「…どうもこうも…」

白い毛並みと深紅の目、どのアングルから見ても“ウサギ”ではない彼女に、僕は大声で文句、否、泣き言を吐いた。

「…あつつつちいんだよおおおおッ！！」

そう。

暑いのだ。

健気にも時を刻み続けている、弥生の首に巻かれた腕時計によれば現在午後2時。ちなみに日付は文月…7月28日で、こちらの暦でも夏真っ盛りだ。

だのに、神子修行とか言われて大御神殿で座禅を組むこと約1時間。全面ガラス張りの大御神殿はそこだけ熱帯地域になり、僕は頭から

足の裏まで汗だくになってしまった。

「もういい加減いいでしょう？　僕さ、冷たいお水もらえると助かるんだけど」

「最低でもあと半刻は我慢してください」

僕はがくつと頭を垂れた。僕の“影欠片”弥生の教育はスパルタ的で、ヘタすりゃ死んじやうよ。『でもそんなの関係ねえ！』なんて古いネタなんか言ってられる状態じゃない。

「もう4ヶ月も経つのになあ……」

和田店長に弥生との関係を誤解されたまま行った遊園地の、観覧車から異世界へGO！　しちゃってから、かれこれ120日近くが経ってしまったわけだ。

この国に来るのは4回目だから、そろそろ常連さんとして認めてもらってもいいだろうと、さあいつでも日本に変えられるぞとメイド・イン・チャイナのシャツとズボンに着替えて準備万端で待っていた。

それなのに。

「あっちはもう冬になったのかなあ……」

帰れなかったのだ。

いきなり異世界に呼びつけられ、太古の人風情の皆さんに取り囲まれて、あなたは神子なんですって様付けで言われたら、誰でもこれは夢だと思う。

僕もそう思った。夢なら早く覚めてくれ、早く日本に帰してくれと、大御神様とかいうミラ国で崇拜されている存在に、拜んで拜んで拝み倒したりもしてみた。

だけでもう、そういう段階は通りすぎた。

落ち込んでいる暇はない。顔と名前を覚えなきゃいけない要心の数といったら、歴史の試験勉強かよと呆れるくらいだし、暇さえあれば弥生とヒルメさんの指導のもと神子修行しなければならない。

何の役に立つのかは分からないけど。

額から流れ出た汗が、目に入ってじんとしみてくる。目を閉じて額と瞼の汗を拭えば、目に入った汗が涙と一緒に流れ出る。

「大丈夫でございますか？」

脇で“お座り”してる弥生が見上げて訊いてきた。弥生は時々、同じ質問をする。

「暑いのは辛いけど、なんとか頑張れる…」

そう、頑張らないと。

あれからずっと身に付けている、腕時計タイプの黒い腕輪。銀の文字盤の点滅は、僕の背負うべき責任を訴える。

誰に押し付けられたわけじゃない。僕は“有栖の神子”として、役目を果たすと決心したんだ。

この国のために。

なんとか地獄の2時間修行を終え、大ジョッキを空にした僕に、幸いにして出来た友達の1人がタオルを差し出してくれる。

「なんとか頑張ってるみたいだなートシキ」

「スサ。それに、ツキヨミさんも…」

肌の色から睫毛の本数まで同じ、女王陛下とは三つ子の兄弟にあたる2人組が、わざわざ大御神殿まで来てくれた。

「…こっちの夏には慣れたか？ トシキ…」

「日本とそんなに変わらないかな？」

軽井沢とか避暑地を除けばね。

「悪いんだけど、今日の修行はここまでにして、姉上に会ってきてくれないかなあ〜」

「で、ですがこのあと熱湯風呂訓練が…」

「待てえーい！ ちょっとなにそのまた熱そうな訓練は！？」

熱湯風呂訓練って！ なんじゃそりゃ！？ 僕にバラエティー番組にでも出ると言うのデスカ！？ それもだいぶ昔のやつ。

スサはこっちのミニコントなど気にも留めず、帽子越しにボリボリと後ろ頭を搔いた。

「女王陛下の勅命だ」

え？ と僕も弥生も姿勢を正した。

「どうも、トシキに直々に頼みたいことがあるらしい」

四十二話 三僧兵

（僕に用事って、いったい何なんだろう…）

僕は御神殿の庭を突っ走り、階段を一気に駆け降りようとしたが、つい勢いあまって、ちょうど脇の戸口から出てきた誰かとぶつかった。しまった。

相手と僕とで『あっ！』と呻きに近い声をあげる。

「いたた…ごめんなさい。急いでいるものですから…」

と言って立ち上がるうとした刹那、意外と小さな手のひらでグイッと手首を捕まれた。

「急いでいるですって!？」

変声期真っ盛りの声で叫ばれる。

「そういう言い訳をすれば、人に突き当たっても『ごめんなさい』というだけで済むと思っておられるんですか？ そうは参りませんよ」

僕は、相手が13歳くらいの少年兵であることに気付いた。こないだお世話になった、ニイさんがゴオさんの配下だろうか。

「いや、決してわざと突き当たったんじゃないよ。だからこそ『めんなさい』と謝ったんじゃない。とにかく僕は、すごく急いでるんだ。頼むからその手を離して、あっちに行かせて」

僕はもがくように言った。

彼は手を離してくれたが、僕を逃がそうとはしなかった。

「礼儀を知らない人ですね。沢田公爵さわだのの子息たる僕にその口の聞きようとは、よほどの田舎者と見えます」

僕はカビーンと面食らってしまった。この国で名字を持つのは、東西南北八方に名田を持つ8公爵家だけだと聞いている。

（てことは、ニイさんやゴオさんより格上！）

しかし田舎者呼ばわりされた僕も力チンときていた。

「どんなに田舎者だろうと、君に礼儀作法は教わらないよっ！ あもつつ、急いでなければ今すぐにでも誤解を解きたいところなのに」

「お急ぎの方、僕は逃げも隠れもしません。いつでもお相手しますよ」

お相手？

なんの？

「…いつ？」

「日の沈む頃」

「日没後だね。じゃあええと、名前は？」

「沢田オモイカネ」

「僕はトシキ。じゃあオモイカネくん、お城で待ってるよ！」

なにがなんだかサッパリだが、名前と場所を告げておけば間違いはないだろう。

表門のところへ来ると、少年兵たちが立ち話をしていた。

2人の間には人が1人通れるくらいの間隔があったので、僕は申し訳ないけどそこを駆け抜けようとした。

が、運悪く体格のいい方の少年が間隔を狭めてきたので、結果的に僕は激突してしまった。

「ええい、忌々しいっ！」

お侍さんですか？ とツツコミそうになったが、まずは謝ることにする。

「ごめんね。急いでるものだから…」

ぶつかった少年がイライラした声で言ってくる。

「急いでいるときには、目はよそにおきわすれてくるのかよ」

「いや、だからゴメンって…」

「おい。言っておくが、やまだの山田公爵の息子に向かってそんな対応をすると、半殺しの目に遭わされるぞ」

僕はまたしても面食らってしまった。

（また8公爵家のお坊っちゃま！）

山田公爵の息子さんは、僕におどろかせる気配を見せた。

「急ぐから、後で説明するよ」

「じゃ、日没から半刻後に」

「分かった。ええと、名前は？」

「山田タチカラオ」

「僕はトシキ。じゃあタチカラオくん。お城で待ってるよ！」

そう答えて、僕は通りの角を曲がった。

山肌の階段を滑り降りるようにして駆けると、13歳ほどの女の子たちが愉快そうに話をしている。

着ているものからして、彼女たちもやはり僧兵なのだろう。こういうところは妙に進歩的だ。

僕は愛想笑いを浮かべて、丁寧にお辞儀をした。女の子たちは軽く頭を下げたが、ニツコリともしなかった。それに話しもやめてしまった。

僕は自分が邪魔者にされているような気まずさを感じたが、そのとき1人の女の子がハンカチを取り落として、気付かなかったのか靴で踏んづけてるのが目に留まった。

この場のバツの悪さを取り繕ういいチャンスだと思って、僕は腰を屈めるなりそのハンカチを靴の下から引っ張り出して、女の子に差し出した。

「あー、これ落としたよ？」

女の子は真っ赤な顔をして、引いたくるようにそれを受け取った。

「おやウズメ」

と女の子の1人が声をかけた。

「それでもあんたは、かぜたの風田公爵と面識はないというのかい？ 公爵からそんな手巾をもらっているくせに」

ウズメと呼ばれた女の子は、さも忌々しげな目付きで僕を睨み付けたが、すぐにスイッチを切り替えて穏やかな物腰に戻った。

「これは私の手巾じゃないわ。その証拠に私のは、これ、このとおり懷にある」

その言葉を聞くなり、僕は大変なしくじりをやったのだと悟った。それで恐る恐る口を出す。

「実は僕も、ハンカチが落ちるところを見たわけじゃないんだ。ただ、靴で踏んづけてたから、てっきり…」

「そう思ったのが間違いです」

ウズメちゃんはよそよそしく言い返した。

しかしこの話は、面倒なことにもならずにケリがついた。僕は女の子たちが立ち去ると、仲直りするにはいいチャンスだと思って、僕には目もくれずに立ち去ろうとするウズメちゃんの側に歩み寄った。

「あの…僕のこと、許してくれる？」

「いや。あんたのしたことはあの場合、物分かりのいい人間のすることじゃない、とご注意申し上げておくわ」

「えっ！？ それってまさか…」

「バカだとは思わないけど、いくら田舎者であるにしても、人が手巾を踏みつけたりしているのには、何か理由があるのだということ

くらい分かっっていそうなものよ」

田舎者呼ばわりされた僕は力チンときていた。年下の少女相手に大
人気がない。

「たつ、たとえバカやったにしろ、一度謝ったらそれでもう充分話
はついているつもりだ!」

「喧嘩を仕掛けるつもりじゃないけど、この場合コトが重大なの。
ひとりの貴人の名誉に関わることなんだから。なんであの手巾を私
に渡すようなヘマをしたの?」

「いや、そっちこそ。なんであれを落とすようなヘマをしたの?」

「むっかー! そう絡んでくるなら、水田ウズメみずたのの名にかけて、世
渡りの作法を教えてあげるわ!」

僕は幻聴かと思った。水田ウズメの…なんだって?

(またまた公爵家のお嬢様!!)

「いや、それはありがたいんだけど、僕いま急いでるんだ」

「…分かったわ。じゃあ日没から一刻後に」

「一刻後だね。僕はトシキ。じゃあウズメちゃん、お城で待ってる
よ!」

こうして僕はまた駆けていった。

(…はあ、はあ。や、やっと辿り着いた…)

「修行ご苦労様トシキ…どうしたの？ 浮かない顔をしてるわね」

ヒルメさんの複雑そうな顔に、僕は笑って答えてみせた。

「ええ、ちょっと…ここにくるまでに色々諸々ありまして…」

「そう…。…単刀直入に言うわね。実はトシキには探し物をしてほしいの」

「ええ!？」

またあ!？

「もちろん1人では言わないわ。ちゃんとお供をつけます。…ウズメ、タチカラオ、オモイカネ。ここに」

ん？

なんかどっかで聞いたような…。

「はい、女王へい…あ」

「あ」

平均年齢13歳の僧兵くんたち。

よりもよって約束の日没の前に、色々諸々あった少年少女とご対面となった。

四十三話 有栖の神子の任務

ことの経緯を知ったヒルメさんに、少年兵たちはガミガミ怒られると、揃って僕の前に膝をついた。

「神子様…申し訳ございませんでした」

「神子様とは知らなかったとはいえ、あのようなご無礼を」

「如何様にも罰をお受けします」

「…だそうですが…神子様…？」

「罰って…はあ。いいよ、もう。もともと悪かったのは僕だし。あのときは色々ごめんね」

3人は顔をパツとあげると、深く下げた頭をさらに深く下げた。

「なんと慈悲深きお言葉…！」

どうも“有栖の神子”という存在は、国王陛下と並ぶ偉いヒトのようだ。そんなお偉いさんに僕はなっちゃったの？

「それでヒルメさん、僕に探してほしい物って何？」

「宝物庫に来れば分かるわ。ちょっと来てちょうだい」

僕と弥生は宝物庫に案内され、少年兵たちは『ここでお待ちしてい

ます』と言つので残してきた。

ここは本当に宝物庫なのか？

壁にはズラリと剣が飾られ、棚という棚には盛装用の飾りが並んでいた。薄暗くて分かりづらいが、鏡もあちこちに飾られてある。ここまでではいい。だが。

「…剥製だらけ…」

部屋中のいたるところに、獣の剥製が大事そうに置かれていた。大きいものでは鹿、熊、馬。小さいものでは鼬、オコジヨ、貂。巨大なものでは。

「…これは…陶器の招き猫と、信楽焼の狸だよね…？」

オープン・ザ・プライス。

「それで、ヒルメさん。僕に探してほしい物って…」

「実はこれなの」

そう言つてヒルメさんは、棚からひとつの首飾りを取り出した。銀の細工の精緻な組み合わせで、真ん中にある4つの珠受け座を囲んでいる。

ん？

珠受け座？

「あれ？ 宝石がない…」

「そうなの。トシキに探してもらいたいのは、この4つの宝石なのよ」

ヒルメさんはそれを布で包むと、それを丁寧に棚に戻した。

「もともとこの首飾りは、大御神様が地上にお帰りになられたときにつて、古の細工師が作ったと言われているわ。ただ現存する資料にも、この首飾りに宝石が嵌め込まれていたという記述はない。だけど今日、占いで大御神様が…」

特殊能力LV、僕よりも30ほど上。

「…“有栖の神子”の力を借り、宝玉を探し出せと、結果が出たのよ」

「うへえっ！？」

まさか。

「無理！ 絶対無理です！！ 僕にそんな、ダウジングみたいな真似は…」

「これは“有栖の神子”にしかできないこ・と・な・の！」

「だってこつくりさんの10円玉が動いたことも心靈写真で幽霊見つけたことも姉さんの雛人形が動いたこともその雛人形の髪の毛が伸びたことも…」

だんだん占いから心靈現象になっていく。

ヒルメさんは何を思ったのか、神妙な面持ちで頷いた。

「それは日本での高度な占いなの？　それが“有栖の神子”の“力”に係るのかは、あたしの無知のせいで分からないけど…でもトシキなら大丈夫よ。神子の強大な力をもつてすれば、宝玉を見つけることくらい容易いわ」

「ホントにー？　氷の龍や枷やロープ状のツルやファイヤーウォールや水の帯よりもお？」

ヒルメさんは失礼にもブフツと吹き出した。

「とにかく、これは“有栖の神子”にしかできない仕事だから、頼んだわね」

「…まあ…時間はたっぷりありますし…時間かかっちゃってもいいならやりますけど…」

「ご希望ならスサとツキヨミもつけるわ。もちろん弥生も」

「あれ？　そういえば弥生は？」

振り返ってみると、弥生は剥製軍団にガラスの目で見つめられ、ウサギ姿でひっくり返っていた…。

四十四話 乾の方角に

大御神殿。

「神子様、どの方角に気配を感じますか？」

「ど、どの方角っていったってえ」

だからそんなダウジングみたいなこと、僕に出来るわけないでしょう。

ウズメちゃん、タチカラオくん、オモイカネくん。それにスサとツキヨミさんと弥生も引き連れて、僕は御神殿の庭で瞑想していた。だが悲しきかな、日頃のスパルタ教育の賜物も、ここでは発揮できないでいる。

だから僕は適当に言った。何事も最初の1歩が肝心だ。

「アノ方角が怪シソウダ」

なんで片言なんだ、僕。

月の昇る方を東とすると、僕は北西を指差したことになる。

「あの方角といますと…あまたの天田公爵様の領地ですね」

「…ああ…天田には巫女修行をしている女たちもいる。…くさいな…」

そんなバカな。

スサが腰の剣に手をかけた。

「ものは試した。天田、行ってみましようや」

「ええっ!？」

こんな感じで行き先が決まってしまったのでした。

+++++

「今日はずいぶんと静かだな」

王城に衛兵の目にも留まらず侵入した“少年”を見て、ヒルメは『はああ』と長息した。

「チエシャ猫…あんたって精霊は、不法侵入って言葉をてんで覚えてないようだねえ」

「ま、それがオレの身の上だからな。…にしても、なんでこんな静かなんだ？」

「首飾りの宝玉を探しに、ちょっと手勢をサいたんだよ」

「あ、ひよっとしてその宝玉って…」

チエシャ猫は首にかかっている紐を引っ張りあげた。そこには小さな袋があり、逆さに振ると中から小さな宝石が現れる。

「ひよっとしてこれ？」

現れたのは、親指の爪ほどの黒い宝石だった。

「……。…な…!？」

沈黙は、数秒だった。

「なんつであんたが宝玉もってんのよ！」

「じーが死ぬ間際に、遺産だと言って」

じーとは先代“有栖の神子”のことだろう。だとしてもなんでチエシャ猫が持っている。

ともあれ、4つの宝玉のうち1つはこうして手に入っただった。

+++++

天田領地、その海岸にやってきました。

「ひゃー！ 冷たい」

「神子様、そんな海に入られては…」

「入っちゃいけないってこと？ 大丈夫だよ服濡らしたりしないから」

「そうじゃなくてだなトシキ」

スサが看板を指差した。

「遊泳禁止なんだが」

「…そゆことはもっと早く言って…」

僕はしぶしぶ波打ち際から砂浜にあがった。ツキヨミさんがタオルを差し出してくれる。

足を拭いて靴を履いたとき、どこからか声が聞こえた気がした。

「…っあれ？」

「どうした？ トシキ」

「遊泳禁止つて、ここだけじゃないよね」

「…ああ…多分、ここら辺一帯はそうだろう…」

「じゃあなんで」

「なんで遊泳禁止区域から、キャツキヤと若い娘さんたちの声が聞こえるの？」

「…俺には何も…聞こえないが…？」

「これには皆もツキヨミさんに同意見だ。けれど僕には確かに声が聞こえる。」

「ちよっ、トシキ！」

「行くだけ行ってみる。ちよっと待ってて」

「馬鹿野郎お前1人だけで行かせられるかよっ」

そして僕らの大移動が始まった。

本当に大移動だった。

弥生ウサギの首の時計を見ると、かれこれ30分近く砂浜を歩いていることになる。しかし若い娘さんどころか、人が1人も見当たらない。

「…暑い…」

「トシキ、遊泳禁止区域からもうだいぶ離れたぜ？」

「でも」

僕は耳を澄ました。

「…声が近くなってるんだ…」

海端の砂地の先は段々に小高い丘になっていて、その辺を松の林が続いていた。

「神子様、あれは…」

そこで、ウズメちゃんに抱かれた弥生が声を発した。

あれというのは…松の木、だろうか？

と、ウズメちゃん、タチカラオくん、オモイカネくん、それにスサの目が険しくなった。

「ど、どうしたの？」

「しっ、…誰か来る…結構な人数だ」

僕たちは体を屈め、息を殺して木の影に隠れた。

しばらくして現れた人たちを見て。

「…な…っ」

僕は目を丸くした。文字通り目を丸くした。

「…巫女修行のおねーさんたちじゃん！」

「しーっトシキ、黙ってる！ 万が一見つかったらどうする！」

そう言われた理由がやっと分かった。

ご婦人方は周囲に誰もいないことを確認すると、次々と服を脱ぎはじめたのだ。

…ん？

服を、脱ぎはじめた！？

「あわばあああああっ！！」

その声にご婦人方が一斉に振り向く。

見つかったか！？ と思ったところを、僕は頭を殴られていた。

「殿方はしばらくお眠りになってください！！」

少女僧兵、ウズメちゃんが、僕たちの頭を次々に強打していった…。

四十五話 赤い石 隕石

7人の美女がてんでに着物を引っ掛けると、クシナダがウズメを見つけて声をかけた。

「おや、アンタは格好から見ると、大御神殿の僧兵のようだが…」

「きゃー。弥生ちゃん久しぶりだねえ相変わらずかーわーいーいーい」

「うー、ご無沙汰しております皆様…」

ウズメに抱かれた弥生はペコリとお辞儀した。

「ところで、あそこで潰れているのは、有栖の神子様と思われるが…ああ。やっぱりそうだ」

「着替える前に気絶させておきました。どうぞ目が覚める前にお着替えを済ませてください」

7人の美女は急いで着替えを済ませたのだった。

+++++

2人っきりのティーセレモニー。

ヒルメが錫の茶道具で煎茶を淹れると、卓上でチエシヤ猫に茶器を差し出した。

「どうぞ…粗茶ですが」

チエシヤ猫は茶碗をぐるりと回すと、一口だけ飲んでほつと溜め息をついた。

「結構なお手前で」

煎茶道なのか茶道なのかどっちなんだそれは。

「それで？ その4つの宝玉を集めるとどーなるんだ？」

「…知らん」

「はあ？」

「だって今日の占いに出ただけなんだもの」

「つかえねー」

「そこうるさい」

「でもよー」

茶碗を置いてチェシヤ猫は後頭部に手を組んだ。

「万一、いや百万が一その首飾りの宝玉が揃ったら、それ、どれくらいいいの？ あ、宝物庫に保管？」

「一応は、大御神殿の祭壇に奉納せよ、と出ているけどね」

「へえー…」

「何よ。その態度」

「いや。なんとなく『大御神サマの再来かな』とか思っただけだよ」

カタン、とヒルメも茶碗を置いた。

「…大御神様の再来…」

「ま、ありえねーだろうけどな」

大御神の再来…それは金剛石の時代の再来を意味する。

上に君なく下に臣なし。ただ天地をもって春秋とする世界。

「そんな世が、本当に来るのだろうか…」

「…さあな」

「……………」

「……………」

2人の間に、妙な沈黙が流れた。

+++++

「…なるほど、首飾りの宝玉をねえ」

頭にできたコブを始終気にしながらも、僕はご婦人方に事情を話した。

「だそうだ。聞いたことあるかい？」

「いいや」

「アタシもないよ」

これは全くの白だったかなと、僕が諦めかけたときだった。

「…そういえば」

「え？ 何になんか心当たりあんの？」

コブを気にしていたスサが身を乗り出す。

タマヨリさんが意味もなく声をひそめて、怪談でも語るかのような顔つきになった。

「20年近く前に天から赤い光が降ってきたらしい。そいつが向この島に落つこちで、島が燃えたばかりか隣の海岸まで3日3晩煮えたぎったとか」

「隕石だったんだ」

タマヨリさんは首を振った。

「小さな石」

「石？」

「そう。それから島の近辺には魚が寄り付かなくなって、隣の海岸も入るとビビビって痺れちゃうってんで、今も遊泳禁止になっている」

あれ？ でも僕が入ったときには…。

「1人だけ船漕いで島まで行った物好きがいてね、なんか赤くてピカピカして、触ろうとしたら気を失ったとか」

赤くてビカビカして、触ろうとしたら気を失った？

「そいつは半死半生で船に揺られながら帰ってきて、今でも意味わからないことブツブツ言ってるらしいよ」

稲 淳二みたいに語られたら余計に怖い。でもそれは僕の推測だとヒルメさんが言ってた宝石の1つじゃないかな。

ということはその赤い宝石をGETすれば、お魚さんたちも元通り、遊泳禁止も取り消される、と。

「いいじゃん。いいことずくめじゃん！ 今すぐダッシュで取りに行こうよ」

「…赤いビカビカが触ればいいけどな」

「ちょっと、タヂカラオ！」

「だってそーだろ？ これまで何十人も被害にあってるんだ。神子様に万一のことがあつたらどーする」

「それは大丈夫だと思いますよ」

オモイカネくんがコホンと咳払いした。

「遊泳禁止の海岸というのは、きっと僕たちがさつきいたところでしよう。神子様は水に足をつけても、腫れも火傷も無かった。つまり常人なら被害が出て、有栖の神子様なら大丈夫である可能性が高い」

「ホントに！？ オモイカネってやつは頭いい」

大学入試の問題よりも簡単だ。

スサがパンと手を打ち鳴らした。

「よっし、じゃあその島とやらにいつてみましょーや。な？ ツキ
ヨミ」

「…ああ…」

かくして、僕たちの向かう先はより具体的に決まったのだった。

四十六話 傾城の美女

「…異界に生まれし有栖の神子！我が声を聞き、我が姿を見よ！」

ビョワッ。

弥生を抱いた僕はスさとツキヨミさんに挟まれて、僧兵くんたちは3人肩を組んで宙に浮いた。巫女修行中のご婦人方の魔法だか魔術だかで、例の島まで運んでくれるらしい。

「トシキ？　だ、大丈夫か？」

「…だ、大丈夫…だと思う…」

「行ってらっしゃいませ神子様」

そしてすうつと息を吸って、7人同時に言い放つ。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！！」

びよおおおおお！！

「行つてきまああああすー!」

こうして、僕は飛び立った。

+++++

ヒルメは、黒い宝玉を一番上の珠受け座に嵌め込んだ。

「…これであと3つ…」

右、左、下の珠受け座が埋まれば。

と、呑気にもチェシャ猫は窓際で大きくあくびをした。もちろん猫型の話である。

「…なにあくびしてるのチェシャ猫。何か退屈？　なら帰っていいのよ」

「逆。どーせオレの帰るところなんてねーし。退屈とゆーより、興味

深く思っただけ」

「…なにが？」

「その首飾りつてさあ、大昔も大昔の人が大御神サマにつて作ったんだよな」

「と、聞いているけど…それがなにか？」

チエシヤ猫はまたひとつあくびをした。

「大御神サマつてさあ、どーやってその首飾り引っかけるつもりなワケ？ 頭も腕もないんだろ？」

伝説によると、大御神は自身の頭、両腕、血液、片方の翼から“神子”を生み出したと言われている。

これにはさすがのヒルメも返答に窮した。

「…それは…」

「それに宝玉が無くなって何千年も経って、何の差し支えもなかったはずなのに、今さら“全部”集めろ、なーんて。…どーも分からないな、なんか納得いかねえ」

「……………」

女王陛下は黙ってしまった。

+++++

生身のまま空を飛ぶという慣れない交通手段により、空酔い（他に当てはまる表現方法がない）になってしまった。

もちろん、僕だけの話だけど。

「トシキー、大丈夫かー？」

「…ムリ…」

ウズメちゃんが背中をスリスリしてくれる。女性らしい気遣いだ。

それにひきかえ。

「神子様、ご無理をなさらずに。顔がすごく悪いですよ」

「…弥生は僕のこと超ブ男だと思ってたわけ…？」

「間違えました“顔色” すごく悪いでした」

今どきマンガでも使われてないような、かなりベタな言い間違いだ。

しかもveryという強調文がつくから余計にタチが悪い。

「どうなさいました？」

ウズメちゃんでも弥生でもない、女の人の声が頭から降り注ぐ。

「だっ…」

誰？ と訊こうとして、それ以上声が出なかった。それだけあり得ない人が立っていたということだ。

立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花という言葉がピッタリな女性が、僕の目の前に立っていた。天女だよ、天女。ただし見惚れるというよりは、逃げ出して死にたくなる類いの美貌だ。

けれどそれだけだった。喋る動物（精霊）やら多彩な髪の色をはじめとした不思議に比べれば、これくらいの美人がいてもどうってことない。

僕は酔いもさめないままへらへらっつと笑った。

「ちよつと体調を崩しちゃいまして…」

「まあ、それはお気の毒に。…ですがそのお…」

「なんでしょう」

「…お供の方たちはどうされたんですか？」

「え？…あれっ？」

僕と弥生以外の『お供の方たち』は、鼻血を撒き散らして倒れていた。

四十七話 赤い宝玉GETだぜ！

ようやく正気を取り戻したスサたちに訊けば、なんでもあの女性の美貌は非常識らしい。

「大丈夫？ みんな」

「おつ、お前、よく平気で会話できたな。ツキヨミなんか逆に目が覚めて倒れたつてのに。しかも」

目が覚めるような美女って本当にいるんだ。さすが不思議の国。

「…オモイカネとタチカラオなんか、訳わかんねーことブツブツ言ってるし…」

ああそうか、と僕は合点がいった。

この島まで来たという人が、今でもわけの分からないことをブツブツ言ってるというのはこれだったんだ。あの女性を見てしまって、本人も訳わかんなくなってる。

僕たちはその女性のご厚意で、島のログハウスにご厄介になっていた。一人住まいには大きすぎるだろうと思ったが、話を聞くとあの宝玉落下事件で起きた火事で家族を失ったらしい。

お姉さんは果物の入ったカゴを置いていったが、誰も口にはしなかった。リングともザクロともイチジクともつかないその果物は、僕がこの国に来たばかりの頃、チェシヤ猫に騙されて口にした不味い

フルーツによく似ていた。もしくは同じものだろう。

「…それであのう…貴女はどちら様なのでしょうか」

今のところ、美人さんと会話可能なのは僕と弥生だけだ。

お姉さんは丁寧にお辞儀した。

「私はオトと申します、有住の神子様」

「オト…姫？ 乙姫様っていうんですか？」

絵にも描けない美しさだったのは、竜宮城ではなく乙姫様の方だったのか。

「どうぞオトとお呼びください」

笑顔で返された。

「私の方も、ひとつ質問しても宜しいでしょうか」

「なんです？」

オトさんは方膝について僕を見上げた。

「あなた様はどうしてこの島においでになったのですか？ その訳をお聞かせください」

僕と弥生は顔を見合わせ、頷いてから説明した。

「実はこの島に、赤い宝玉が落下したと聞いて。僕たちはそれを探しに来たんです」

オトさんは困ったような顔をした。

「確かに赤い石は…ここに落下しましたが…」

「じゃあ、あるんですね!？」

しかし、なぜか暗い面持ちで溜め息をつかれる。

「…ですが、3年前に石を触ろうとした無謀な者がやってきまして。その方が石にさわるなり、大火傷して石を海に落としてしまったのです」

「ええー!？」

落とさないでよー!

「…わかりました」

へ?

「こうして神子様が自ら来られたのですから、私も海の魚を集めて調べましょう」

「調べましょう、って…オトさん、そんなことできるんですか!？」

オトさんは麗しい笑みを浮かべた。

「先程お届けした木の实… どのような効能があるかご存じですか？」

「…いいえ…」

これには弥生が答えてくれた。

「あれは“不思議の力”を凝縮した木の实なのです。あれを食べたものは一生涯、その御身に“不思議の力”が宿るといわれております。…その代わり、お味はこの世のものとは思えないほど美味しくないそうですが」

「そ、そういう食べ物だったの」

たしかにあれはすごく不味かった。

オトさんは海辺に出ると、凜とした声で大海に言い放つ。

すーっと深呼吸して。

「この海原に住まう魚よ！お主らの中で赤い石を飲み込んだものはおらぬか！…！」

…海は、しーんとしていた。

と、そこに1匹のタコが現れた。

「この間から、赤鯛が喉に何かをつまらせて、物が食べられなくて困っていると言ってますが、きつとあれが呑み込んだに違いありません」

「うわタコが喋った！」

「神子様、あれはタコ型の精霊でございます…」

「よろしい。では、その赤鯛を連れて参れ！」

タコはダボンと海に潜った。

すると浜辺に赤鯛が現れ、その口を釣り針にかかった魚みたいに大きく開けた。その喉を調べてみると。

「あ。何か赤いビカビカが」

「…あーあ、呑み込んでる」

オトさんはそれを取り出すと、塩水で綺麗に洗って僕に見せてくれた。

「神子様がお探しの宝玉とは、このことですか？」

「たぶんそう…ってオトさん！ ビビビってこないんですか!？」

オトさんは花のような笑みを浮かべた。

「私も、あの果実を食した者ですから」

そして帰り際、オトさんはそれを螺鈿細工も精緻な箱に入れて手渡してくれた。宝石に触れるのは僕だけなので、必然的に僕が受けることになった。

「…開けたらお爺さんになるなんてことないよね…？」

「まさか。時を封じているならともかく、石の1個入った箱でそんなこと、起こるはずありません」

こうしてミッション1・赤い宝石を手に入れる！ はこうして遂行されたのだった。

四十八話 坤の方角に

ヒルメさんは赤い宝玉を、4つある珠受け座の一番下に嵌め込んだ。ビビビとこないということは、ヒルメさんもあの不味い果実を食べたのだろうか。

「…これであと2つ…」

残る珠受け座は左と右のみだ。ところであのー、黒い方はどこで手に入れたんですか？

「しかし本当に天田にあったとはなあ。俺も長い間住んでたけど気がつかなかったぜ」

「もしかして修行の成果が出たんじゃない!? あのスツごく暑い中での座禅とかの!」

「それはお前がオレに騙されて“不思議の木の実”を食べたから遊びに来ていたチエシヤ猫に一蹴された。

「で、トシキ。今度はどこの方角に気配を感じる?」

「ど、どの方角と言われましてもお」

またすぐに探しに行けと言うのですか。

僕は精神を研ぎ澄まし、ある方角を指差した。真顔で誤魔化せ。

「アノ方角ガ怪シソウダ」

だからなんで片言なんだ、僕。

今度は天田の領地と南北逆の方向：裏鬼門である南西を指したことになる。

「あの方角と申しますと…地田^{ちだの}公爵の領土ですね」

「…ああ…あそこは先帝の治めていた領土だし…時計塔もある…
…くさいな」

だから、そんなバカな。

スサガ力チャリと腰の剣を鳴らした。

「ものは試しだ。地田、行ってみましようや」

「うええっ!？」

かくして、またしても僕のカンひとつで行き先が決定してしまったのでありました。

十々十々十

一方、地田邸にて。

庭での微かな衝撃を、ワカヒコの五感は正確にとらえていた。公爵夫人も濡縁に目をやったところからすると、気づいたらしい。

しばらくすると、思った通り、部屋の扉が遠慮がちに開いた。

「失礼いたします。水を、お持ちしました」

現れたのは、邸の侍女だった。

侍女がワカヒコに水の入った器を差し出すと、ワカヒコは底に玉が入っていることに気づいた。

「もしや、門口に誰かいるのではないか？」

侍女は待つてましたと言わんばかりに告げた。

「はい。井戸の傍の桂の木の上に、あまたの天田公爵様のご子息が登っております」

ワカヒコと公爵夫人は目を剥いた。

「その方が『水がほしい』と仰るものですから差し上げましたところ、水は飲まないで器の中へこの玉を入れなされたのです。その玉は底にくっついてどうしても離れませんので、そのまま持参したのでございます」

公爵夫人は盛大に溜め息をつくとき、ワカヒコに言った。

「邸にお呼びなさい。ただし、丁重にね」

+++++

ちよつとだけ前のことだった。

「ねえ…なんか心が痛むんだけど。こーゆーの何て言うか知ってる？」

「偵察」

「違うよ出歯亀だよデバガメ。語源は昔、亀太郎さんっていう変態さんが出っ歯だったことから…」

「変態出っ歯の亀太郎の話なんかどうでもいい。坤の方角が怪しい

って言ったのはトシキだろ？ だからこうして、その土地に詳しい地田邸に来たんじゃないか」

「う。そ、そりゃあそうだけどさ…」

だつたらなんで、正々堂々と表門から入らないの？ とはおくびにも出さないでおく。

僕たちは井戸の近くの木の上で、誰か来ないか待っていた。弥生の一件があつて正々堂々入れないから、こうしてチャンスをつかがつたのだ。

するとそこに、綺麗で可愛い女の子が水を汲みに来た。井戸に映ったツキヨミさんの顔に気づいて、女の子は驚いて顔を上げる。

「…その水を一杯俺にukれないか…？」

女の子は言われるとおり、器に水を汲み入れて差し出した。

しかしツキヨミさんは飲む代わりに、首にかけている飾りの玉をひとつ取り外して器の中へ入れた。

「…この玉は取ろうとしても取れない…。…公爵夫人がワカヒコに來客だと伝えてくれ…」

女の子はぺこりと頭を下げ去っていった。

…数分後。

「ようこそ天田…み、神子様！？」

迎えに来てくれたワカヒコさんに発見された。

四十九話 青い宝玉の在処

「先日はうちの馬鹿息子でご迷惑をお掛けしまして、まことに申し訳ございません」

言いながら公爵夫人はお茶をすすめる。息子を卑下するところは万国共通、いや全世界共通だ。

「して、神子様方はどのようなご用件でこの地田邸に？」

率直に訊かれ、僕はスサヤツキヨミさんたちと目を交わしてから言った。

「あの、これくらい…小粒納豆くらいの、青か白の宝石を探してるんですけど…」

公爵夫人は黙ってしまった。今回のヤマカンはずレだったのだろうか。

「…それは、大御神様の首飾りに嵌め込まれていたと云われる宝玉のことでございましょうか」

「ええ…」

すると、公爵夫人は長息した。

「白い宝玉の行方は定かではございませんが、青い宝玉ならば、ここから坤の方角に位置する裏鬼門島にあるといわれております」

ビンゴー！！

「でもそこへ行くには、よっぽどの覚悟が必要ですよ？」

ワカヒコさんが縁起でもないことを言う。

スサが身を乗り出した。

「どういうことだ？　ワカヒコ」

「あの島には女鬼が住んでいると云われている。一度足を踏み入れたが最後、二度と帰っては来れないそうだ」

「め、女鬼……」

僕はぶるつと震えた。そんなものの昔話でしか聞いたことはない。そんなものが普通にいるなんて、さすが不思議の国。

「しかも青い宝玉は雷神が8人、うずくまるようにして守っているという。…生半可の覚悟じゃ行くのは難しいぞ」

「よーするにその女鬼や雷神をバツバツと倒せば、宝玉が手に入るわけだろ？」

ちよつとタチカラオくん、なに真面目な顔をして恐ろしいこと言ってるの。

「こつちには武装派が4人もいるし、いざというときにはツキヨミや神子様もおられる。なんとかなるでしょ」

「つて、えええ！？ そんなウズメちゃんまで…」

「なににせよ、その青い宝玉を手に入れないことには話になりません」

そうオモイカネくんは厳しい口調で言った。

「多少の困難は覚悟の上。参りましょう、神子様」

「そんな弥生まで…」

「まあ心配しなさんなつて。もしトシキがこないだみたいに瀕死の重体に陥ったら、お舟でドンブラコと運んでやつから」

「…スサ…無礼が過ぎる…」

スサとツキヨミさんの会話を聞いて僕は手を打ち鳴らした。

そつだよ。今回は船じゃん！？

十々十々十

「どうした？ ヒルメ」

チエシヤ猫は目頭をおさえるヒルメに声をかけた。このところヒルメの様子がおかしい。

「なんでもない…最近、目の奥が痛んで…」

「疲れてんのかな」

しかしそれだけではない気がする。額やこめかみをおさえる所作が増えたし、政務の間にもどこか遠くを見るようにボーツとすることが多くなった。これがチエシヤ猫のいうとおり、疲労から来るものならいいのだが。

「なーんか…その首飾りの宝玉を集めてから、調子悪くなってきてねえ？」

「…うん…」

「……………」

「……………」

どちらも言葉を見つけれなかった。

＋＋＋＋＋

幸いにも裏鬼門島は視界で確認できる距離にあり、砂浜には木で作られた筏が放置されていた。

「…まあ、途中でブツ壊れたりしなければ、それで」

僕たちは筏を海に押しだし、木っ端の総天然オールで漕ぎ進める…はずだった。

「あれ？　なんか筏が…」

筏がわずかに曲がっている。案の定、ツキヨミさんが居眠りしていた。

「わーっツキヨミ寝るな！　回る、まわっちまう」

スサの一喝にツキヨミさんの目が微かに開いた。

「…はへ？」

「は・へ・じゃ・ない！　漕げ、漕げてほらっ。引いてえ戻す！　引いてえ戻す！　ヒッヒッフー、ヒッヒッフー！」

「…スサ、それ、ラマーズ法だよ…」

「ご精が出ますねえ」

かくして僕たちはラマーズ法の掛け声で、青い宝玉GETのために、ヒッヒッフーと筏を進めたのだった。

五十話 島に着いて

ヒルメの体調不良が気になったチェシャ猫は、少年の姿で女王陛下の私室に向かっていた。

手にした果物はお見舞いのしるしである。

随分と長いことほつき歩いてた城なのに、いざ王の間に入るとなると足が重くなった。

派手な溜め息をつく。何人もの美男を侍らせていたりしたらどうしよう。

「…ヒルメに限ってまさか、そんなことは…」

王の間の扉を少し開いてから、思いきって全開にして挑む。

「ヒルメ、体調の方は…う…」

あまりにも意外な光景に、チェシャ猫は果物のカゴを落としてしまった。

「…チェシャ猫、入っていいって言った？」

「う、それは、悪かった。だけどよヒルメ、そのおー」

ヒルメが手にしているのは、身の丈よりも大きな鎌。

なぜだか知らないが部屋一面に、巨大な藁人形が置かれている。しかもそれらは人間でいう首の位置で、無惨にもザックリ切り取られていた…。

「…なにしてんの？」

「精神統一よ」

「せ…」

「こうして鎌でも振り回してないと、モヤモヤが溜まってしょうがないの」

ストレス発散に空想惨殺をしてるというわけか。ヒルメは笑みを浮かべながら、またひとつ藁を刈っていった。

いけないことを知ってしまった。できることなら知りたくなかった。

「チエシャ猫」

「はっ、はいっ!」

思わず“気をつけ”してしまう。

「このこと絶対、誰にも言っくんじやないわよ」

「…言いませんよ…」

あそこの皆さん同様にされたらたまらない。

+++++

かれこれ5時間くらい前に、汗と海水でずぶ濡れになりながら、僕たちは半魚人よろしく上陸した。

そのままの格好では色々と支障が出るだろうと、近くにあった掘っ立て小屋で身形を整え、ほんのちよつとの仮眠をとってから、すぐさま山登りを開始した。

「…信つじらない」

すっかり高くなった太陽に髪を焼かれ、後頭部が熱をもってズキズキする。靴底に当たる登山道は、お世辞にも平らとは言い難い。

「もっ、修学旅行で箱根の旧街道歩いたの思い出したよっ。あれも嘘でしょ！？　ってくらい険しくてさっ、獣道なんじゃないかって思ったよっ」

もはや言葉の区切りと弾む息が同時だ。足も重いし膝が笑う。

「それでもなんとかついてこれんだから、日頃の訓練の賜物だな」

「こんなところで役に立つとは、思わなかったけどねっ」

武装派4人は本当にパワフルで、スサ以外の僧兵くんたちは後続を引き離しての3人旅だ。唯一の非武装派・ツキヨミさんは弥生を抱きながら、遠い目をして黙々と歩いてる。

「…なんか、弥生だけ楽しんでない？」

「気のせいですよ、神子様」

気のせいだとは思えないのだが！？

「あの…」

「しっ！」

ツキヨミさんに勢いよく口を塞がれた。武装派4人組は岩陰に身を潜めて各々の武器に手を宛がい、弥生は耳をピクピクさせている。

「ほっ、ほーひたの（どっ、どうしたの）！？」

「誰が来る…ツキヨミ」

ツキヨミさんは勾玉を下唇に当てると、なんだか詠唱し始めた。

「…異界に生まれし有栖の神子…我が声を聞き、我が姿を見よ…」

ふあああああ…。

暖かい風と共に視界が緑かかる。毎度お馴染み目眩ましの術だ。

しばらくすると、向こうから賑やかな声がした。女の人だ。姿が見えるまで距離を縮める。

そこにいたのは貫頭衣に身を包んだ。

「りゃ、りゃむひゃん（ラ、ラムちゃん）？」

頭に2本、角を生やした彼女たちは、女鬼、という単語からは想像もつかない別嬪さんだった。要するに美人かつグラマーで、かの有名なマンガ『うる やつら』に出てくるラムちゃんと遜色なかったのだ。

「水を汲んでる…どこか行くつもりだ。あとをつけるぞ」

ここですよやく、僕の口は解放された。

女鬼さんたちが向かったのは、洞窟の中だった。

ぴちゅーんという水の音も不気味なその中に、僕たちはそろそろと

入っていった。

「あ、あれは……」

洞窟の奥の方で、何か青いものがピカピカ光っている。きっとあれが僕たちの探している“青い宝玉”だろう。

だがしかし、地田邸で仕入れた情報どおり、宝玉は雷神と女鬼に守られるようにして掲げられていた。

ヒソヒソ声で作戦を練る。

（どーするよ）

（とにかく、あれを片付けないことには近づけないぞ）

（四方に別れて機会を伺いましょう）

（そんな簡単に隙が生まれるかしら……）

武装派4人が話し合うなかで、ツキヨミさんは大あくび。

とそこに、視界の隅っこで銀のピカピカが目にも痛いくらい点滅していた。

「神子様、時環が……」

「え？」

言われて腕を持ち上げると、手首に巻かれた時環がケータイの受信

ランプみたいに点滅している。

「これは…？」

「…トシキ…まさか…」

と、足が動いた。

「トシキ！」

「神子様！？」

声は遠くにしか聞こえない。

ただ、聞こえない。

五十一話 葡萄の実と筈と赤い果実と

利輝は走っていた。

目眩ましの術を突破して、単身青い宝玉へと向かっていた。

「トシキ!!」

「神子様!？」

外野の声も届いてない。

利輝は女鬼や雷神どもを掻き分け、青い宝玉を掴み取るように手に入れた。

「やった!」

しかしそれを女鬼や雷神が見過ごすはずもなく。

「待て! その人間、止まれというに!」

女鬼たちは、こう言いながら駆け出した。その声に、利輝は何を思ったものか、馬鹿正直に立ち止まった。

そして。

「ジャック！」

そう叫ぶやいなや、ツキヨミが抱えていた弥生鬼の姿が消え、利輝の影に潜んだ。

「…憑依か…」

そしてゆっくりと女鬼たちに振り返る。

「炎よ！」

利輝がただそう唱えただけで、その手中に炎が宿る。その炎は女鬼たちに襲いかかり…。

「な…！？」

悲鳴をあげる暇があればこそ、女鬼と雷神たちは無惨にも消し炭に化してしまった。

「…うわ…こ、こんな惨い術は初めてだ…」

それこそスーパー上様モード利輝のスーパーたるゆえんだ。容赦ない。

幸いにも残った女鬼が口々に叫ぶ。

「なっ…なっ…なんてことをおおおおお!? 貴様あ一体何者だああ!?」

「何者だと? 余の顔を見忘れたか」

暴 ン坊將軍ではない。というか、見忘れるも何も今回が初対面だ。

「世に害する女鬼どもを、このままむざむざ生かしてはおけぬ」

「いやトシキ、どつちかってーと人間が征服しようとしたのをやっつけたたってだけで、別に故意に害を与えたわけじゃな…」

「成敗！」

だから暴 ン坊將軍ではない。というか少しは外野の話を聞け。

スサとツキヨミはアイコンタクトを交わすと、スーパー上様モードの利輝の腕を掴んだ。

「逃げよう、トシキ」

「ええい忌々しいっ」

青い宝玉も手に入れ、利輝たちはひとまず逃げることにした。

しかし女鬼たちも仲間を消し炭にされて黙っているはずがない。

「逃がすかあああああつ！！」

女鬼たちは怒濤のように襲いかかってくる。もちろん利輝たちは、捕まっでは大変とどんどん逃げた。

「ええいツキヨミ、その髪飾りを貸せ！」

逃げながら、利輝はツキヨミの髪に挿している髪飾りを後ろに投げつけた。

「変化！」

すると不思議や不思議。その髪飾りはみるみるうちに葡萄になって、美味しそうな実がたわわに実った。

女鬼たちは追いかけるのをやめて、その葡萄をもいでムシャムシャ食べた。

「…よっぽど腹が減ってたんだな…」

利輝たちはその間に、洞窟の入り口まで逃げ延びたが、すぐまた後ろから声が聞こえてきた。

「待て！ おうい、待たぬか！！」

「ええいしつこい奴等め…ならば今度は」

と、またしてもツキヨミのびんのクシを抜いて、その歯を一つ一つ折っては投げ、折っては投げしながら走った。その歯は片っ端から筍になってのびだした。

女鬼たちはまた、それを折って食べはじめた。

「…どれだけ腹が減ってたんだよ…」

「ただ単に意地汚いだけだろう」

そうして、筏のとめてある砂浜まで走っていった。

「ふうー。さてと、ここまで来れば大丈夫…」

ではなかった。

後ろを振り返ると、8人いた雷神のうち生き残った半数が、大勢の鬼を引き連れてどんどん追いかけてきていたのだ。

「ああくそつ、あんなに大勢いたら敵わねーよっ」

スサガ地団駄踏んだそのとき、利輝は海辺の防風林の気に、赤い実が生っていることに気づいた。

（ならばあれで…）

「スサ、ツキヨミ、ウズメ、タヂカラオ、オモイカネ！ あの実を鬼どもに向かって遠くの方へ投げつけよ！！」

「投げつけよ、つて、え？ あれを？」

しかし神子様命令とあっては逆らえない。皆は言われたとおりその真っ赤な実を、鬼たちの軍の中に投げ飛ばした。

利輝はしばし瞑目すると、カッと目を見開いてこう言い放った。

「変化っ！！」

すると突然。

ドゴオオオオオン！！

赤い実の落ちた箇所から物凄い爆発が起こり、鬼と雷神たちは無惨にも吹き飛んでしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…トシキ、今の何？」

「赤い実を爆発物に変化させた。我が国で言う爆弾というものだ」

「…ああ、そう…」

さすがスーパー上様モード。容赦ない。

こうして青い宝玉を手に入れた一行は、またしても汗と海水でずぶ濡れになりながら本土へと帰ったのであった。

+++++

ヒルメさんは青い宝石を、右の珠受け座に嵌め込んだ。

「これであと1つ…」

無事に手に入れたというのに、なんだかスサたちの視線がみよーに気になる。きつとまたお恥ずかしい術でも披露してしまったんだろう。全裸でいきなり踊るとか。

チェシャ猫がわざとらしい咳払いをすると、ヒルメさんは沈痛な面持ちになった。

「トシキ…今朝の占いで、白い宝玉の在処が分かったの」

「本当ですか!？」

ええ、と頷くと、ヒルメさんはチェシャ猫と目配せした。

「姉上、それはどこに」

「…白い宝玉の在処は」

ヒルメさんは伏せた目線をおもむろに上げた。

「…日本国に」

……。

はい？

日本国…だつてえ！？

五十二話 久方ぶりの帰郷

僕たちは大御神殿で“準備”していた。

「でもさ、僕いまの今まで帰れなかったんだよ？ 本当に日本に、大御神様は帰してくれるの？」

「それは分かん。けど、なんとかなるだろ。宝玉を探し出せと言った当の本人が、まさか探すための帰還に帰さないってことはないだろ」

「…そう願うしかないな…」

行くのは僕とスサとツキヨミさん、そして弥生。曼荼羅みたいな模様の上に、おしくらまんじゅうでもするみたいに背中合わせに立っている。ヒルメさんが僕たちを日本まで、魔法が何かで送ってくれる手はずになっている。

「それじゃ、いつてらっしゃい」

「…い、行つてきマス…」

ヒルメさんはにこやかな笑顔を一瞬にして引つ込めると、額にある飾りに指を当てた。

「異界に生まれし有栖の神子、我が声を聞き、我が姿を見よ！」

時環がビカビカと点滅する。

すると、床の様子が薄ぼんやりと輝きだし、そこから吹き上げるような風が起こった。

「トシキ！ 到着地点を思い浮かべてちょうだい！　そこまで風が運ぶわ！」

「わ、分かりました！」

僕は必死に着地地点を思い浮かべていた。まず候補に浮かんだのはミラ国に来る前にいた観覧車だが、スサヤツキヨミさんの分のチケットがない。次に浮かんだのが『犬猫専門ペットショップALICE』だが、スサヤツキヨミさんの格好ではさすがに奇抜すぎる。

となると、着地点はあそこしかないのでは？

（僕のアパート！！）

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり！！」

ゴオオオオオオ！！

僕たちは穴に吸い込まれていった。

＋＋＋＋＋

ヒルメは利輝たちを見送った後、祭壇に完成途中の首飾りを供えた。

「大御神様、彼らをお助けください…」

すると、突如として後頭部に激痛が走った。

刀で斬られたというよりは、何か硬いもので殴られたような鈍痛だ。

「おい、大丈夫かよ？ ヒルメ」

見送りに来ていたチエシャ猫が尻尾を揺らして訊く。このところヒルメの頭痛はより酷く、より頻繁に起きるようになっていた。

「…ちょっと…“力”使いすぎたみたいね…部屋で少し休むわ…」

そう言っ大御神殿から足を引きずるようにして立ち去った。

＋＋＋＋＋

「き...き...き...」

き、って何？ 肩を痛いほど揺さぶられて目を覚ました。

「トシキっ！」

「うわビックリしたっ」

利輝の『き』だったんだ。文字通り飛び起きて、僕は周囲を確認した。

6畳間の真ん中に置かれたテーブル、窓を頭に向けたベッド、風に翻るカーテン、棚の上のテレビ。

間違いなく僕の部屋だ。

「へー。これがお前と弥生の愛の巣かあ」

「だから違っって言ってるでしょー!!」

半同棲状態ではあるけれど、決してそのようなことはございません！

「...日本国は...いい気候に恵まれているみたいだな...」

ツキヨミさんの言葉を聞いてハッと気づいた。ミラ国に滞在していた月日を考えると、日本はいま冬になっているはずなのに。

「…なんでこんなに穏やかな気候なの？」

条件反射でカレンダーを見てしまったが、一切めくってないので時は止まったままだ。僕はポケットからケータイを取り出して日にちを確認した。

「あれ？ あのときのまんま…」

弥生と遊園地デートに行ってから、月日どころか時間も変わっていないかった。これは一体どういうことだろう。

「つまりその時環が、トシキの都合のいい時間まで運んでくれてるってことだな」

「そ、そんなすごい機能ついてるの？ これ」

さすがメイド・イン・不思議の国。

「…それで…これからどうする…トシキ…」

「あ？ ああ、とりあえず有栖本家に連絡とって、出向いて事情を説明してー、ああでもその格好のままだと奇抜すぎるから、僕の服に着替えて、それから髪も染めないと。…そういえば、弥生は？」

「…ああ…なんか、ギンピカのところでは何か作ってる…」

ギンピカ？

「皆様、お待たせしました。まずはお腹を満たしてからにしましょう」

僕たちが論議してる間に、弥生はご飯とお味噌汁ときんぴらごぼうを作っていた。

五十三話 いざ、奈良へ

僕たちは新幹線に乗っていた。

「嬉しゅうございますー。私、舞妓さんって一度見てみたかったです」

「…弥生…それ…京都なんだけど…」

「では“鹿にお煎餅あげたかった”？」

「うん。それなら正しい」

そう、僕たちの行き先は奈良県。ただし間違っても目的は鹿にお煎餅とか観光ではなく、有栖本家に白い宝石の手掛かりを探るためだ。

スサとツキヨミさんの格好は目立ちすぎるので、髪を黒く染めて僕の服に着替えてもらった。ガタイが僕と同じくらいで助かったよ。

しかし今度は顔が目立ちすぎる。女の子モードの弥生は可愛いし、黒髪を後ろで1本に結んだスサとツキヨミさんはイケメンさんだ。十人並みの顔でしかない僕としては、肩身の狭いことこの上なし。

そんなわけで僕は隣に弥生、通路を挟んだ隣にスサとツキヨミさんに乗せて、久方ぶりの里帰りというわけで。

「ところで神子…利輝様？ なにか浮かない顔をしておりますが、どうなさったのですか？」

「ん？ ああ、いや。久々に両親に会うから、緊張してるだけ」

「実のご両親ですのに？」

「いや、まあ…なんていうか…僕の両親で、変わった人だからさあ…」

その言葉の意味を弥生たちが理解するのは、奈良についてすぐだった。

「お帰りなさい、利輝さん」

息子を“さん”付けで呼ぶのはどうかと思うぞ、母さん。

「母さん…僕もう大学生なんだから出迎えはいらないよ…」

「あらーだってえ、すっごく久しぶりなんですもの」

ホホホホとこれまた漫画でしか聞かないような笑い方。

僕の両親は、いわゆる過保護。その影響が僕もどこか天然なところがあるらしい（大学の友達によくそう言われる）。しかしまあ上に姉さんがいてくれたおかげで、曲がりなりにもまっとうな人生を歩

んでる。

「まだお腹は空いてないわね？」

「空いてるわけないだろー!？」

「今日はたっぷりとお御馳走用意しましたからね」

その言葉の意味を弥生たちが理解するのは、実家に帰ってすぐだった。

食卓に並び、ご馳走、ご馳走、ご馳走。

「さあ皆様、何でも召し上がって下さい」

「すっごーい」

弥生が感嘆の声をあげた。

「お寿司にステーキに天ぷらに鰻重にスパゲッティ…ビックリですう！」

「…昔からこうだったんだ…」

小さい頃からね。

「トシキ―、これどう使えばいいんだ？」

スサとツキヨミさんはナイフとフォークを目の前に困惑顔だ。不思議の国にナイフとフォークはないらしい。

「ええと、この切るやつは右手に持って、刺すやつは左手に持ってえ」

「随分と殺伐とした食器だな。第一、この持ち方だと使いづらいんだけど」

「仕方ないでしょー！？　そういうマナーなんだから」

「まなー？」

「それで利輝さん？　その方たちとはどういう関係なの？」

「えっ！？」

僕は箸で摘まんでいた細巻きを醤油の中に落としてしまった。

どういう関係？　強いて言えば友達だ。ただし出逢った場所が普通じゃない、異世界で出来た友達だ。どう説明すればいいんだ！？　実の息子が日本とミラ国を行き来してるなんて、この過保護な母親にどう話す！？

「分かった！　ミラ国からのお客様ね」

「あへ？　そ、そっだよ…って」
はい？

今なんと仰いました!?

「母さんなんでミラ国のこと知ってるの!？」

「有栖家に嫁ぐときに俺が教えてやったんだよ」

と、縁側から野太い声がした。

「あらあなた」

「有栖家は代々、異界の神子を輩出してる由緒ある家だってな」

よりもよってこんなときに、一家の大黒柱にして果樹園主、我が父上の参上だった。

五十四話 鹿にお煎餅

お食事は、父さんの帰宅（？）により家族会議となってしまった。テレビを目印にして左側に有栖家、右側にミラ国からのお客さんが座っている。

「なるほど、ミラ国の宝石を探しにねえ」

父さんは海老天をかじりながらうんうんと頷く。

「…なにか、心当たりありませんか。お父さん」

うん、と父さんは首をかしげた。ていうか、なんでミラ国のこと知ってるの。

（今まで気付かなかった僕って、一体…）

「やっぱりこれは、桜井にある本家に連絡をとった方がいいだろうなあ」

「…やっぱり、そう思う…?」

うん、と父さんは再びエビをかじった。

「とにかくそれまで、ゆっくりしていきなさい」

「そうだわ利輝さん。皆さんに奈良を案内したらどう?。」

「うん、それがいい。本家に連絡がとれるまで時間がかかるだろうからな」

「もちろんそれまで我が家にいても構わないわよ」

「うへえっ!？」

なんて悠長に構えてるんだー!

「…せっかくですが、そんなに長くお世話になるわけにはいきません」

「へ?」

スサガステーキ用ナイフ&フォークと格闘しながらキツパリと言った。

「俺…私たちはそう長く国を空けていられる身分ではございません。できれば早急にことを進めたいのですが」

「うゝむ。では、何日以内に」

ツキヨミさんが目を閉じたままボソツと言った。

「…3日…」

「3日だね。よろしい。それまでになんとか本家に用件を伝えてお

こっ」

1日目。

「きゃー。鹿さんがいっぱい寄ってきますうー」

カクカクシカジカ俺たちや煎餅早く食いたいよ（ダ　ハツのCM風に）

鹿煎餅を持った弥生に、鹿たちは一斉に群がってきた。やっぱり半獣人だからなのだろうか、同じく鹿煎餅を持ってるスサヤツキヨミさんより明らかに近寄ってきている。

とりあえず本家の準備が整うまで、僕たちは奈良を観光していた。遷都1300年記念キャンペーン中（？）ということもあってどこも賑やかだ。

法隆寺も見に行ったり大仏様も見に行った。鼻の穴と同じ大きさの空洞を通り抜けられたのは弥生だけだった。なにか今回の旅のご利益になればいいけど。

2日目。

有栖本家とのコンタクトもとれ、僕たちは桜井線に乗車していた。

手にした奈良漬はミラ国へのお土産だ。ヒルメさんたちが気に入ってくれたら嬉しい。

相変わらず僕たちはちょっとだけ目立ちながら、車窓の景色をぼんやりと見つめていた。

「ドキドキするなあ。代々神子を輩出してきた家柄の本家だなんてよ」

「そんなに期待しなくても、ごくフツウの家だよ」

そう。

ごくフツウだ。

築30年くらいの一軒家が、庭も狭くポツンと建っている。むしろ果樹園を営んでいる我が家の方がイレギュラーだろう。

本家の伯母さんに中へと通されて、僕たちは客間で伯父さんが来るのを緊張しながら待っていた。

「…トシキ…これが日本国での“普通の”家なのか…？」

「マンションとかアパートとかを除けば、だいたいこれくらいの規模が普通のステータスだよ。あ、テレビでも見る？」

僕はリモコンのスイッチを押した。一瞬後に画面に映像が表れる。

「えー！？ すっげー！ トシキ、今のなに！？ 手妻！？」

「…ソーとかシャ プとかが聞いたら泣くよ…」

そして機会があれば今度言つてやれ。

とそこに、伯父さんが現れた。

「よお利輝、久しぶりだなあ」

「お、お久しぶりです伯父さん」

「で。…そこにいらっしやるのがミラ国からのお客様が」

だから、なんで知ってるの。

僕は出されたお茶を飲みながら、日本にあるという白い宝石のことを訊いた。

伯父さんは難しい顔をした。

「…やっぱり、ご存知ないですか？」

無言。……………？

「ここで手がかりをつかめないと、僕たち八方塞がりなんですけど…」

やっぱり無言。……………。

「どーにかしてくださいお願いしますタイムリミットはあと1日だけなんですっ！」

伯父さんはお茶を啜ってから口を開いた。

「とにかく今日は泊まっていきなさい。その白い宝石のことは、インターネットで調べておくから」

「インターネットで分かるもんなんですか!？」

「トシキー、いんたーナントカって何だ？」

スサたちは黙ってて！

3日目。

「き...き...き...」

「う...ん...もう少し寝かせて...」

「お前はツキヨミか！ 起きろッ!！」

頬を思い切りひっぱたかれて目を覚ました。

「いつ!?!...たあい！ 何すんのさ!！」

「しっ」

スサが僕の口を塞ぐ。弥生は僕の後ろに隠れ、ツキヨミさんは半身を起こしてなにやらブツブツ唱えていた。

真夜中だ。

「は、はひ（な、なに）…？」

「追っ手だ…つけられついたようだな…」

……………え？

追っ手！？

「ほへほーひゅーほほ（それどーゆーこと）？」

「反対勢力の差し金だろう。今ツキヨミが足止めしてる…思ったより早かったな」

なんだかとてもないことになってきてる。

五十五話 白い宝玉

ツキヨミさんの術は障壁…手っ取り早くいうとバリアを張ってるらしい。

僕たちはパジャマ代わりのＴシャツ姿で庭に出て、その追っ手とやらを確認した。

「な、なんなのあれ…！」

『ネバーエ ディングストーリー』のファ コンみたいな白い竜が、一軒家に向かって炎を吐いていた。もちろん、それはツキヨミさんのバリアに遮断されてこっちは届かない。

「…嘘でしょコレ…本物じゃないで…ん？」

「なんだ、トシキ」

目の端に映る明滅に腕を見れば、時環がビカビカ光ってる。

「ッ！」

と、僕の足が勝手に動き出した。

「神子様！？」

弥生の声は遠くにしか聞こえない。

スサが呆れたような声で呟いた。

「あーあ、またかよ…」

そりゃこっちが言いたいよ。

+++++

利輝はツキヨミの張った障壁を易々と破り、白い竜に相對していた。

白い竜の紅玉の目が利輝に向けられる。

「ジャック！」

弥生の姿が消え、利輝の影に滑り込む。憑依。

利輝はつり上がった目を竜に向けると、その両手を力ハメ波でも放つかのように構えた。

「炎よっ！！」

と、利輝の手中に炎が現れ、瞬く間に白い竜を呑み込んだ。

「やった！…って、え！？」

スサはあんぐりと口を開けた。

…白い竜は、涼しい顔で星明かりの中を飛行していた…。

「って全っ然効いてねーぞトシキ！！」

「バカな…くっ！」

白い竜が吐いた炎を、利輝は間一髪で飛びすさる。

「風よ、あの者を異界へ運び入れよ！」

ビュオッ！

立っているのもやっとな突風が白い竜を襲う。

しかし竜はやはり涼しい顔で、有栖邸の上を旋回していた。

「ッ、…どうなってるんだ…！？」

しかしスサは風が吹いたその一瞬を見逃さなかった。

…あの鬘の揺らめきは…！

（まさか）

「トシキ！ くっ」

スサは障壁を乗り越え、すかさず竜が放った炎を剣で薙ぎ払う。

「トシキ、あの竜は炎と大気の具現かもしれない！ だから炎が効かないんだ！」

「炎と大気の具現だと？」

スーパー上様モードの利輝は、その情報を口内で反復する。

炎と大気の具現？

ならば。

利輝は両腕を高々と天に向けた。

「雨よ…！」

すると間もなく。

一面の星空のどこからか雨雲が出現し、ザァーッと容赦ない本降りとなった。

更に。

「泥土よー!!」

ぱーんと、合図にしたがってマンホールの蓋が開き、汚水と泥が竜に向かつて空へと昇っていった。

竜は虫でも追い払うかのように、空中でくねっては上昇したり下降したりを繰り返した。

しかしついに力尽きたようで、みるみる間に一直線に下降していく。

「成敗!」

日本に来てても暴　ん坊將軍気取りだ。

スサはその命令に従い、落下する竜の首を剣で跳ねた。

竜は鐘が割れるような大音声をあげると、…雨水と泥に汚れた紙に変じた。

「…や、やった…っ」

「やったな、トシキ」

力の抜けている利輝の代わりに、スサがその紙をビリビリに破いた。

「…見事だった」

突然の声に利輝、スサ、弥生が振り返る。

そこには傘を差してパジャマ姿で突っ立っている有栖本家主人の姿

があつた。

「“不思議”の欠片もない日本で天を操り、地を操るとは。当代の神子は相当のものだとみえる」

「…これはあんたの差し金か？」

スサが陰のある目付きで主人をねめつけると、まさか、と主人は首を振った。

「日本で“不思議”を操れる者などいない。これはミラ国からの差し金だろう。…ついてきなさい」

利輝たちは雨の中、有栖本家の納戸へと案内された。

数々の骨董品が並ぶ中で、一番奥に小さな桐の箱がちんまりと置かれている。

「…これを最初に見たのは…ばくのお祖父さんが言い伝えを教えてくださいましたときだった…」

「言い伝え？」

うむ、と主人は目を閉じた。

『…この宝石は滅多な者、滅多なことには人に渡すんじゃないよ。たとえそれが有栖の神子であつてもな』

『なんでー？』

『……。この宝石はな、世界を滅ぼすかもしれない女神を呼び覚ます石の欠片なんだ。もし全部揃ったら……。そのとき、ミラ国は破滅の一途を辿るだろう……』

それを聞いたスサは仰天した。

「バカな！ 大御神様は俺たちを守りこそすれ、世界を滅ぼすなんてことがあるものか！」

「ぼくも正直そう思った……しかし最近になつて思うのだよ。その女神は世の泰平なるを望んでいるが、一向にそれは叶わない。ならば自分の手で世を造り直そうとするんじゃないか……ってね」

「……それは……どういう意味でしょう……？」

主人は桐箱を開くと、小粒納豆くらいの小さな宝石を摘まんだ。

「しかし、当代の神子にこれだけの力があれば、易々と女神の思うままにはならんだろう……持っていてきなさい」

主人は白い宝玉を利輝の掌上に置いた。

すると突如。

利輝たちの足元に大きな穴が現れ、彼等はその中に落ちていった。

＋＋＋＋＋

「そう、見付け出してくれたのね！」

僕たち（with、奈良漬け）は無事ミラ国へと帰還し、最後のアイテム・白い宝石も手に入れた。

あとは奈良漬けをお茶請けにティータイムしながら、土産話をヒルメさんに聞かせる。

「そしたらいきなりファ コンが…ヒルメさん？ どこが悪いんですか？」

目の奥が痛むのか、眉間に皺を寄せて指で押さえている。

「…なんでもない…ちょっと、最近疲れてるのよ…」

「本当に大丈夫ですか？…って、え？ スサとツキヨミさんも！？」

スサは右腕を、ツキヨミさんは左腕を、痛みを抑えようとするかのように握りしめる。

「…やっぱり無理してたのね…隠すなんて狡いわ」

「それはお互い様だろ、姉上」

「いつからなの？ その痛みは」

「…日本国に行く直前くらいだな…だろう？ スサ…」

「まあ、そのくらい？」

ていうか、今の今まで気付かなかった僕って一体…。

束の間のティータイムを終えると、僕たちはあらためて大御神殿へと向かった。

サーサー流れる滝の手前、祭壇に首飾りが置かれている。

「…大御神様：ようやく全部揃いました」

そして最後の珠受け座に白い宝石を嵌め込む。

すると。

「！ うっわ」

首飾りはふわりと宙に浮き、サーサー流れる滝の、水煙のあたりで止まった。するとそこから首が、胴体が、上腕が、足が現れる。

「な、なにこれえ！？」

「俺だって分からねーよっ！」

「静かに！」

しっかり押し出された胸の膨らみから、現れたのは女性だと思われる。そこまできて僕はピンときた。

ミラ国に来て早々、各神様の像を見たことがある。確かその中に、両腕と頭が無かった像があったはずだ。…目の前にいる彼女のよう

に。

思い出した。確かあの人は。

ツキヨミさんが寝ぼけ眼で呟いた。

「…大御神様…」

第5章 完

閑話 桜井の神子

これは日本国・桜井における、いにしえより伝わる『白い宝玉』のお話…。

+++++

その国は、かつて“不思議”を操る女王が支配し、栄華を極めた。

しかしその女王が亡くなると彼女の弟が王となり、国を引き継いだ。

しかし国は乱れるばかり。

そこで民が下した結論は、再び“不思議”を操る女王を選ぶというものだった。

そして、この国の安定がある…。

「…出ました…」

動物の骨の割れ目を見て占いをしていたトヨは、にっこりと笑って告げた。

「安心なさい。間もなくこの日照りは雨雲に遮られるでしょう」
それを聞いた下々の者は怪訝に思った。

「まさか！こんなにカンカン照りなのに…雨の降る気配なんてこれっぽっちも…」

しかしその直後。

トヨのいうとおり、瞬く間に分厚い雲が空を覆った。

「…まさか…」

眩いた者の頬に、一粒の水滴が落ちる。

トヨの預言どおり、日照りは唐突に恵みの雨へと変わったのだ。

「やった！本当に雨が降ったぞー！」

「トヨ様は神の御使いだー！」

正確には、トヨも先々代と同じく簡単な天気予報ができたというだけにすぎないのだが、ここは“奇跡”として処理させてもらう。

「…出ました…」

また行列のできる占い師でもある彼女は、今日も今日とて民草の悩みを解決してあげていた。

「奥さん…旦那さん、浮気してらっしゃいますね」

婚姻制度が当時あったのか？ という基本的な質問はスルーさせていただきます。

「慰謝料、たつぷり取れますよ」

慰謝料が当時あったのか？ という基本的な質問にもスルーさせていただきます。なにぶん大昔のことなので真偽は知りません（責任逃れ）。

「ですが、きたのかみ北守、はしのかみ橋守、なかのかみ中守は、慰謝料は取れないと仰るのですが…」

トヨの目がキラリと光った。

「あんな者の言うことを信用してはなりません！ 所詮は無表情と遊び人と酔っ払いです。私の言うことが常に正しいのです！」

何て傲慢な言い種なんだ。

「トヨ様、それはなんですか？」

彼女は金印にも銅鏡にも関心を示さなかったが、殊の他執着しているものがあつた。

小粒納豆くらいの白い小さな石だつた。

「そのようなものにご執心なさらずとも。トヨ様にはいかなる玉たまでも、手に入れられる御力があるではございませんか」

トヨはフッフと笑つた。

「これはこの世に2つとない、得難いもの。例え天女の羽衣を差し出されても、交換に応じるわけには参りません」

「それはまた、どうして」

「これは」

トヨは真剣な眼差しで言つた。

「不思議の国の産物なのです」

「不思議の国……？」

「そこは私の不思議など、到底及ばない不思議の集う場所。しかもそれは大陸の向こうにも海の向こうにもない、求めて行くことはできぬ場所にあるところ」

「？…失礼ですが、それは貴重なものだから、手放すことができない、ということでしょうか」

トヨはふつと翳りを見せた。

「それだけではありません」

「と、仰いますと？」

「これを手放すには“世界”を犠牲にする覚悟があるからです。あちらにも、こちらにも」

「世界……？」

「そなたには関係のないことです。そう……“アリスの神子”の名を受け継ぐ者以外には」

＋＋＋＋＋

そして1700後。

白い宝玉は有栖の神子の手によって祖国へと返される。

「…大御神様…」

ここに世界の行く末を担う神…大御神が復活した。

閑話 桜井の神子（後書き）

いよいよ次回から最終章スタートです／＼（・・）ノ

五十六話 大御神の再来

滝はサーサーと音をたてて落ちてゆく。

その水煙の位地に浮かんだ首飾りのまわりに、在るか無きかの姿が現れた。

首に胴体、上腕に脚、片方だけの翼と、しっかり押し出された胸の膨らみ。

「…これが…大御神様…？」

「いかにも」

声はひたすら無機的で抑揚を持たない。その声に何の感情も窺えないのは、彼女に顔がないせいなのかもしれない。

「さても、この世は見苦しいところじゃの」

「そう…でしょうか」

彼女は抑揚のない声で続ける。

「再来は金剛石の時代が再び戻るまで、と言った。しかし世を見るがよい、青銅の時代よりもひどくなっておるではないか。人は妬み、僻み、嫉んでおる。いっかな武器を身に付け棄てようとはせぬ」

「……………」

「これでは金剛石の時代など訪れぬではないか」

ならば、と彼女は残った右腕の上肢を上げる。

「妾^{わらわ}が九州を平らげ古きにかえし、新たなる天地を創世する！」

言ってる意味がよく分らない。

「待ってください大御神様！」

叫んだのはヒルメさんだった。

「それは今ある世界を滅ぼし、新たなる世界を築こうというわけで
「ございますか!？」」

「……。え? え!? ええ!? いまのはそーゆー話!？」

「と、いうことみたいだな……」

スサが呟いたとき、大御神様は左腕の上肢も上げた。

「まずは、妾の身体を返してもらつ。…まずひとつ」

彼女の左上腕から光が生じる。

かと思えば後ろの滝から水、としか言い様のない腕が伸び、過たず
ツキヨミさんの左手首を握りしめた。

「！！ いったっ！」

「ツキヨミっ！！」

水の腕はツキヨミさんの左腕をもぎ取ると、そのまま大御神様の光
つてる場所…左上腕へと運ばれた。

「…これでひとつ、…次は…」

同様に今度は右上腕から光が生じ、水の腕はスサへと向かっていっ
た。

「！！ ぐあっ！」

「スサっ！！」

そしてスサの腕ももぎ取られ、それは大御神様の右上腕に接合した。
すると、首飾りの青い宝石が輝かしいばかりの光を発した。

「…これでふたつ、…次に…」

今度は首が光ると、1本だった手は2本になり、くねりながらヒル
メさんの頭へと伸びる。

「！！……………」

「姉上っ！！」

しかし、今度は勝手が違っていた。

頭をもぎ取るというエグい方法をとるのかと思いきや、ヒルメさんの頭から影（他に該当する単語がない）を抜き取ったのだ。

影が首に接合すると、ヒルメさんはフラリとその場に倒れた。

上の黒い宝石が輝いた。

「…これでみつっ、…そして…」

ここまでパーツが集まって、大御神様の全容が分かった。

年の頃は分らない。若いようでもあり、中年を越えているようでもあった。抜けるような白雪の肌に、濡れたような紅い唇、なよやかな美しさ。天の姫のような人だった。いや、天の姫でも人でもなく神様なんだけど。

しかしまだ足りないものがある。

片方の翼だ。

「…ふん、妾の翼となるのが弥生兔か。面白い」

水の腕はしゅるしゅると弥生に迫っていた。

そうだ、弥生！

「きゃあっ!？」

「弥生いつ!!」

弥生は腕に掴まれて、まるで人間に変化したときのように片方の翼に変化し、接合された。

白い宝玉が輝く。

「…これでよつつ、…最後に…」

水の腕の指先は僕に向けられている。

「…有栖の神子…」

「……………ッ」

出し抜けに、大瀑布が大御神様の前にザァーッと流れ落ちた。

「わっ。な、なな、なんじゃ!?!」

「皆様! 早くここから避難してください!!」

その声には聞き覚えがあった。最初に食事を共にした巫女見習いのナナさんだ。

「巫女の術だな、これは助かった。トシキ、逃げるぞ!!」

「でも、弥生が…!」

スサとツキヨミさんは残った腕でヒルメさんを抱き抱えると、後ろを向いて舌打ちした。

「今は駄目だ。捨て置いておくしかない」

「でも！」

「トシキー！」

「ッ……！」

スサの言うとおりだった。ここにこのまま残って弥生を助ける手段があるのかと訊かれたら、無いとしか言いようがない。

僕たちは後ろ髪を引かれる思いで、大御神殿を後にしたのだった。

五十七話 八大神

医療チームの迅速な処置によって、スサとツキヨミさんは一命をとりとめた。

けど、ヒルメさんは…。

「…どうやら…大御神様は…姉上の頭の“機能”だけを…盗ったみたいだな…」

ヒルメさんは生きている。しかし…。

その感情の封じられた瞳。手を引けば歩く。口許に水差しを向けると嚙下する。けれどそこに、何一つヒルメさん自身の意思はなかった。まるで生ける人形のように。

「…どうです、治りますか」

「…やはり、ダメです」

つきつきりでヒルメさんを看ていたお医者さんは、力なく肩を落とした。

「薬や暗示ではどうにもなりません。何か神がかり的なもののようなのですが…女王陛下以上にそれを操れる者はおられません」

「そんな…なんとかならないんですか!？」

僕は意味もなく全員の顔を見回した。しかしどの顔にも絶望の色しか見られない。

と、いつの間にか来ていたチエシヤ猫がポツリと呟いた。

「…これは、オレたちの手には負えねえ。八大神にすぎるしかねーだろ」

「八大神？」

スサとツキヨミさんが、その単語を聞いて面^{おもて}をあげた。

「八大神？ 八大神って…もしかして天上に帰ったっていう、あの8人の神か？」

スサの問いに、そーだ、とチエシヤ猫は頷く。

「八大神ならヒルメを助ける術^{すべ}を持つてるかもしれない」

「…八大神は…天上に帰られたのではなかったのか?…そもそも…実際におられるのか…?」

「無論、いる」

来な、と言われて、僕はヒルメさんの手を引き、チエシヤ猫についていった。

チエシヤ猫は通路に向かう。そこにはかつて僕も足を踏み入れている

た。最初に弥生に案内された、大御神殿へと繋がる通路、のはずだ。チエシャ猫は易々とそのトンネルを抜ける。僕はやっぱり手を出し、バタバタさせ、頭を出して上半身を出してから転がり出るように通路から抜け出した。

「…っ、やっと出られた！ まっ、前にも思ってたけど狭すぎだよ！ 頭おかしくなるかと思った…って」

そこには見知らぬ少年が立っていた。

「……………。誰？」

「誰とは何だ誰とは！…オレはチエシャ猫」

……………え？

「ええええええチエシャ猫おおお！？」

まあ確かに弥生だってヒト型になれるのだから、チエシャ猫だってなれるはずだ。しかしイメージが違う。あまりにも大人しそうな少年だったのだ。ありえない。

「偉い御仁に会いに行くつてのに、猫型のままじゃ失礼だろ」

「…猫型…ド えもんみたいだね…」

ていうか、ここどこよ。

そこは大御神殿よりも小さな部屋だった。最初に辿り着いた時計塔

の内部によく似ている。目の前には8人の神様の絵が貼ってあって、チエシャ猫はその絵に一礼すると、更に建物の奥へと向かった。

そこには木製の扉があつて、チエシャ猫はコンコンとノックする。そうしてしばらく待つと、やがて扉の向こうから、チリン、と音がした。

チエシャ猫は扉を開ける。入るように促され、僕はヒルメさんの手を引いて扉を抜けた。

そこは小規模の大御神殿だった。

床の広さは廟堂のそれほど。だがここには天井がなく、奥の壁がなかった。純白の壁を作っているのは、いかほどの高さがあるとも分からない大瀑布。それを背にして8つの人影があつた。チエシャ猫に倣^らって礼拝^{らいはい}しながら僕は8人を窺い見る。

(…この人たちが八大神…)

衣服は袈裟か貫頭衣、男の人も髪を長く伸ばし、半分は女性で半分は子供だった。そう…まるで石膏像で見たそのままに。

ただ呆然と立ったままのヒルメさんを見て、大人の女神様のひとりが口を開いた。

「…意思ごと奪われたようじゃの…」

声は大御神と同じで抑揚を持たない。

チエシャ猫は深く一礼した。

「ご覧ぜられますとおり、拙の手には負えません。皆様のお力にお
すがりしとうございます」

「うわ…チエシャ猫の口から敬語が出ると違和感あるなあ…」

「そこうるさい」

「…あの物好きめ、世に不満をもって暴走したと見える。自身の肉
体から子を作っておきながら、今になってそれを返せと言うか」

「……………」

「……………」

沈黙が落ちた。誰も動かなかった。僕には神様の誰もが、彫像に変
じてしまったように見えた。

「みつ…見捨てないで下さい！」

裏返った僕の声に、全員の眉だけがピクリと動いた。

「ミラ国にはヒルメさんが必要です」

「意思を取り戻しても、あやつを止めることは不可能に近い。…お
前、影欠片かげらも無しに止めることができるかえ？」

情感もなく言われ、僕は唇を噛んだ。

弥生なしでは僕も“術”を使えない。スサミたいに剣術に慣れてる

わけでもない。同行したところで邪魔になるだけだとは分かつてる。

それでも。

「…確かに…僕には何の力もありません」

けれども、と僕は8人の神様を見上げた。

「まがりなりにも僕は“有栖の神子”です。何の力がなくてもヒルメさんや、ツキヨミさんや、スサヤ、弥生や、…この国の救いに導く義務があります」

彼らはやはり声もなかった。いかなる表情もなく、じっと双眸を何も無い宙に据えている。

やがて男の神様が、ヒルメさんの方へ視線をやった。

「…あの女から奪われたものを、取り返してやろう」

「では…！」

「しかし“影欠片”は、いまはならぬ。…さがれ。そして戻るがいい」

言った途端、轟音をたてて僕たちの前に瀑布が流れ落ちてきた。全ては水煙に呑み込まれ、声を上げる間もなくたたらを踏む間もなく、目を閉じて気がつくと、そこは入口だった。

僕は慌てて周囲を見た。未だ意思を取り戻さないヒルメさんと、…ただチェシャ猫だけが、扉の前で平伏していた。

深々と叩頭したチエシャ猫は、体を起こして僕に振り返った。

「連れて戻れ。しばらくはこの調子だろーが、八大神がああ言った以上、この状況は必ず治るだろ」

僕は無言で頷いた。

+++++

大御神は、突然の頭痛、腕痛に膈長けた面を歪めた。おもて

「くっ…な、なんじゃ。この痛みは…！」

自分の中から、再び頭、両腕が離れようとしている…！

「くっ…せ、制御が…効かぬ…っ」

大御神は激痛に耐えながら、まだなんとか付いている腕で翼をもぎ取った。正確には弥生を。

（ならば）

「当分借りるぞ…その身体…」

五十八話 乗っ取られた弥生

スサとツキヨミさんの腕は、僕たちが帰ってくる時には元通りになっていて、そのとき、微かにヒルメさんが瞬いた。

「…ヒルメさん？」

花びらのようにヒルメさんの睫毛が震える。

「姉上、お分かりになりますか」

ヒルメさんはしばらく呆然としたようにスサたちを見上げ、…そして頷いた。

「…ツキヨミ…スサ…。…それに、トシキ…」

微かな声はもう、何の迷いもなかった。次いで頭痛を抑えるかのように頭に手を宛がう。

「…あたしは…？」

「…意識が戻ったようだな…」

ツキヨミさんはホッとした笑みを浮かべ、スサはヒルメさんの肩を抱いた。

「大御神様に、意識を奪われてたんだ。…大丈夫だな？」

「…そう…そうだったのね…」

「ああ…顔が真っ青だ…とにかく休んで」

ヒルメさんは戻ってきたスサの右腕に支えられ、部屋をあとにした。

+++++

大御神は再び頭と両腕を失った。

しかしまだ翼が残っている。

横たわる精霊の少女を見て、大御神は無い顔でゆつらりと笑みを浮かべた。

「…この娘の身体さえあれば…」

精霊は“実態”がないだけ、憑依されやすい。逆を言えば、大御神の新たな身体として憑依しやすい。

それに、有栖の神子はこの弥生兔に心を許しきっている。

大御神は弥生の頬に無い指を伸ばした。

+++++

「…異界に生まれし有栖の神子…我が声を聞き、我が姿を見よ…」

ビュオワッ。

ツキヨミさんの詠唱で、花莫座が僕たちを乗せて軽々と宙に浮く。
搭乗しているのはボクとスサ、ヒルメさんとツキヨミさんの4人だ。
ヒルメさんも素早く同じ台詞を唱えると、花莫座はより一層高く浮いた。
“術”は重ねて使うとパワーアップするらしい。

「…いきますよ…」

「いくわよ!」

ツキヨミさんは勾玉を下唇に当て、ヒルメさんは額の飾りに指を当てながら唱えた。

「さすれば影、汝のもとにひれ伏せり!」

ビュオワゴオオオオオツ!!

「うわああああああつ!」

花莫塵は、ジェットコースター並みのスピードで飛んでいった。

「トシキー、大丈夫かー?」

スサが背中をなでなでしながら話しかけてくる。

「う…なんとか…」

「なんじゃ。騒がしいのう」

大御神殿から聞こえてきたその声に、全員が振り返った。もちろん、

僕も。

声の主が視界に入ったとき、三つ子は息を呑み、僕は安堵の息を吐いた。

「弥生！」

少々血色は悪いが、そこに立っていたのは間違いなく弥生だった。

近付こうとする僕を、スサが肩を掴んでそれを阻止する。

「スサ…？」

「…違う…あれは弥生じゃない」

言い切ると、弥生はフツと笑った。

「ほおう。よくぞ見破った。誉めてつかわす」

「…大御神か…」

弥生…じゃない、大御神様は首に首飾りをかけていた。白、黒、青の石が、これでもかと言わんばかりに輝いている。

「左様。最後のひとつをいただきに、この娘の身体を借りた」

「最後の、ひとつ…？」

すると、大御神様は何もないところからポンツと弓矢を出し、それを僕に構えた。

「有栖の神子に流れる、妾^{わらわ}の血を返してもらおう」

+++++

弥生は、心の中で泣いていた。

身体を乗っ取られ、意識はまるで檻の中に閉じ込められたかのように動かない。…動けない。

それでも自分の手が、指が、利輝に矢を放とうとしているのを感じた。

(…いや…)

スサが剣を構え、ツキヨミが障壁を張る。しかしそんなことで防げるほど、ほぼ覚醒した大御神の術はヤワではない。

(…いや…)

それだけは嫌だ。自分の主人を射るなど、影欠片^{かげら}としてあるまじきこと。

しかし弥生には阻止する術^{すべ}がない。

自分の指が矢を放った。

（いやーっ！！）

矢は光跡を残して真っ直ぐに飛んだ。

ツキヨミの障壁もスサの剣も掻い潜り、…利輝のもとへ。

「！ かは…っ」

「トシキいつ！！」

突き刺さった場所から鼓動と同じ拍数で血が溢れ出す。口からも血が溢れ出る。

大御神は颯爽と利輝のもとに歩み寄ると、溢れ出る血を指で掬い、口に含んだ。

「…これで全て揃った」

首飾りの赤い宝玉が眩しく輝いた。

五十九話 チェシャ猫、憑依

利輝の身体からドクドクと絶え間なく血が流れ出る。

「トシキ！ トシキいつ！！」

「ダメだ姉上！ 動かしたら…」

利輝はかろうじて意識がある。しかし…ヒルメもツキヨミも傷を癒す術は使えなかった。特にヒルメはやつと意識を取り戻したばかりだ。

スサガチラチラ利輝を見ながら、弥生の身体を借りた大御神に剣を構えてると、その場にそぐわない呑気な声が聞こえてきた。

「やあっぱりこーなつたか」

どこから出てきたのか、のっそりと猫が歩み寄ってくる。

「チェシャ猫！？ お前なんでここに…」

「そりゃ、オレも元“影欠片”だからだな」

非常用通路を使わせてもらった、と尻尾で示した。

「それに、あんたらの腕やら意識やらが奪われたんで、ひよっとし

たら“有栖の神子”にも危害が及ぶんじゃないかなあ、なあんて思ってた……」

そしてチエシヤ猫は大御神の方を振り返った。

「やっぱり血が欲しかったってわけかい」

「……………っ」

チエシヤ猫は倒れこむ利輝に歩み寄った。

「…有栖利輝の怪我を緩和させてやろうか」

その言葉に三つ子は目を剥いた。

「できるのか!？」

「してやる。運がいいな。オレはこの世で3番目に大御神が気に入らねえんだ」

「…なんだか随分中途半端な順位だな……」

上位2つが気になるようなならないような。

「で?…どーすんだ? オレに任せるか?」

「……………」

三つ子は無言で頷いた。少しでも利輝の状態が良くなるなら。

「決まりだな。よし…そんなじゃ、ちよいと身体を借りるぜ。有栖利輝」

刹那、チエシャ猫はするりと利輝の影に潜り込んだ。

ツキヨミはそれを見て、チエシャ猫が何をしようとしたのか悟った。

「…憑依か…」

憑依。以前、弥生も利輝の命をとりとめるためにしたことがある影欠片の技。しかしそれは影欠片自身の身を危うくする。

すると、利輝の睨が微かに震え、やがてうつすらと目を開けた。

「トシキ！」

「……。…僕は…？」

しかしそのとき。

利輝の腕輪…時環^{ときわ}がピカピカと点滅した。銀色の点滅は徐々にその輝きを増してゆく。

ツキヨミとスサには見覚えがあつた。そう、利輝がミラ国に来たばかりの頃、弥生が精神破壊術で操り人形にされたときに。

もしや。

「…まさか…」

「あの時の！？」

と、利輝が立ち上がった。

「な、な、なんじゃっ！？」

「トシキ！」

声は届いていない。利輝はゆらりと大御神の方へ歩き出す。

「よ、寄るでない！ 去ねい！！」

「……………」

やがて大御神を壁際まで追い詰めたとき。

「！？」

「トシキ…！？」

…利輝は、大御神を…弥生を優しく抱き締めた。

「なっ、なにをひやる…ううっ」

「……………」

「トシキ、矢が…！」

矢が背中まで貫通するが、利輝に離す気配はない。

利輝と大御神は、やがて時環の発する銀色の光に包まれた。

六十話 利輝vs大御神

ふわふわとした、浮遊感があった。

足の裏は確かに地面を踏みしめて、1歩、また1歩と前に進めているのに、まるでその感覚が得られない。

雲の上を歩くと、こんな感覚なのだろうか、僕は考えていた。

まるで1枚の羽根になった気分だ。

しばらく歩いてると、1枚の扉が前を塞いでいた。しかし扉だけで壁がない。某猫型ロボットの秘密道具みたいに、扉だけがポツンと立っている。

横から扉の向こうを覗いてみても、いま僕がいる場所みたいに上下左右に靄がかかってるだけだ。

ならば。

（ここから入ってやる！）

扉を押すと、難なく開いた。

僕はそのままバーンと開け、扉の中を駆け出した。

＋＋＋＋＋

「…何よこれ…どうなってるの…？」

今、ヒルメたちの目の前には2人の人間がいる。1人は弥生の身体を乗っ取った大御神、もう1人は利輝。

その大御神を、利輝が抱き締めていた。大御神は抵抗する素振りもなく、利輝は矢が貫通しているというのに離す気配はない。

そして何より、子の2人は今、銀色の光に包まれていた。その光は利輝の時環から発せられているようで、腕輪の丸い装飾が眩しいほどの光を放っていた。

そう…この現象は、弥生が精神破壊術にかかったときにも…。

ただひとり、その光景を初めて目の当たりにしたヒルメは、信じられない様子で2人を見る。利輝が大御神の耳許で何事か呟き、そのたびに大御神は目を瞬かせる。

「…これが、“有栖の神子”の力なのね…？」

ツキヨミが無言のうちに頷いた。

+++++

扉を通り抜けると、そこは白い空間だった。

障子紙でドームをつくって、上から光を当てればこんな感じだろうか。

しばらく走ると人影が見え、またしばらく走るとその姿がハッキリした。

白雪の肌、濡れた唇：間違いない。

大御神様だ。

大御神様は僕に目をとめると、シニカルに口の端を上げた。

「ほう：よくぞここまで入り込んだ。褒めてつかわす」

「…弥生は、どうしたんですか…！」

「ああ…」

と、大御神様は手中に白く光る珠を浮かび上がらせた。

「このことかえ？」

「…弥生を、返してください！！」

「ほう…“有栖の神子”が“影欠片”ごときに、随分と情が移ったものじゃの」

そしてまたシニカルに口の端を上げる。

「諦めよ。妾は完全に再生しておる。この娘の体で、この腐敗した世界を立て直すのじゃ」

「…弥生を返せっ！！」

大御神様はいとおしげにその白い光を撫でた。

「ふん。そこまで言うからには、何か他に世界を変える手段でもあるのかえ？ それとも、ただ単に己の“影欠片”に惚れたか」

「ほっ…！？」

「仕方のない奴じゃ。ならば見せてやろうかの。かくも愚かな人間どもが、精霊にどんな扱いをしてきたのかを」

そして大御神は指をパチンと鳴らす。

すると、今まで真っ白だった世界が、緞帳を下ろしたように真っ暗になった。

「なっ…なにこれえ!？」

しばらく真っ暗な世界に立っていると…本当は立っているのか座っているのか、浮かんでいるだけなのかもわからないけど…光る珠が目の前に現れた。

僕は何の気なしにその珠に触れた。

六十一話 弥生は僕の…

僕は、そのうちのひとつを手にとった。

「なにこれ…うわっ!？」

すると、珠が破裂し、そこから景色が溢れ出した。

「?…?…!?!？」

そこは暗い室内で、その隅で誰かがうずくまっていた。まだ小さい子供のようだ。

(…ウサギの耳がある…弥生? でも、なんでこんなところに…)

『痛い…痛いよお…』

(! 喋った!)

小さい頃の弥生は呻くように呟き、顔を伏せる。

生暖かい空気が体に絡み付いて、不快だった。じつとりと湿った世界に風はない。

細い手足のあちこちには、いくつもの青あざがある。服で隠されているところにも、きつと点在するんだろう。

ただぶつかったり、転んだりしたただけでは、こんなにアザはつかないはずだ。意図的に、硬いものをぶつけない限り、あるいは誰かに殴られたりしない限り…。

軽い頭痛を覚え、僕は眉をしかめた。手を伸ばして頭を撫でてやろうとするが、指は幼い弥生の頭部をすり抜けてしまった。

弥生が部屋の隅から動けずにいると、真っ暗だった空間に一筋の光が差し込んだ。ドカドカとけたたましく近付いてくる足音と共に。

声はヒステリックに叫んだ。

『私の目のつくところにいないで!!』

女性の長い爪が、易々と弥生の頬を掻ききった。弥生は必死で亀のように体を丸め、嵐が過ぎるのをひたすら待った。そんな弥生に、彼女はいつそう眦をつりあげる。

『勘違いしてるみたいだけど、あんたが次の“有栖の神子”の“影欠片”だから養ってやってんだからねっ!!』

ああそうか、と僕は合点がいった。

おそらく彼女は精霊を毛嫌いしているのだ。視界に入るだけでイライラするくらいに。弥生はそれでも泣かない。泣けば彼女の癪に障っただろうが、泣かなくても癪に障ったみたいだった。

『泣きもしないなんて、かわいくない子!!』

腸が煮えくり返る様子が目に見える。彼女は傍らに一輪挿しを見つけると、それを感情のままに弥生の頭に振り下ろした。

「！」

弥生のその後を見届ける前に、またひとつ珠が弾けた。

…雪が降っていた。

重い大きな雪片が沈むように降りしきっていた。

天を見上げれば空は白、そこに灰色の薄い影が無数にじむ。染み入る速度で視野を横切り、目線で追うといつの間にか白い。

（あそこに立つてるのって…弥生？）

僕は弥生の肩に軟着陸した一片を見る。綿毛のような結晶が見えるほど、大きく重い雪だった。

次から次へ、肩から腕へ、そして真っ赤になった掌にとまっては、水の色に透けて溶けていく。

雪の白よりも、弥生の吐息の方が寒々しかった。子供特有の細い首をめぐらせると、動作のとおりに白く吐息が動きを見せて、それがいつそう目に寒い。

小さな手も剥き出しの足も、熟れたように赤くなってすでに感覚がないようだった。

『強情な子っ』

母屋から声が聞こえてくる。

『泣くくらいだったら可愛げもあるのに』

弥生はただ立ち尽くしている。

『でも、こんな雪の中裸足で外に放り出さなくても…』

(！ 裸足…！？)

よく見ると弥生は裸足だった。きつともう足先の感覚はない。

『精霊ごときが、これくらいの雪で、風邪なんかひくわけないですよっ』

(……………)

そしてまた別の珠が弾ける。

今までそこにあつた景色がどんどん遠ざかり、視界に映るものが目まぐるしく移り変わる。

珠が次から次へと弾け、超高速で移り変わるそれが弥生の過ごした“時間”の“記憶”なのだと、気付くにはそう時間を要さなかった。

それぞれが一瞬ずつしか見られなかったが、その全てが僕の脳裏に焼き付けられ、断片的ながらも記憶として蓄積され、やがて一連のものとして形を成していく。

幼いときのものもあれば、比較的最近のものもあった。

共通しているのは、それが弥生の記憶であることと、精霊だからと酷い扱いを受けていること。

僕は見るに耐えられなくなって、…ズズツとその場に座り込んだ。惨すぎた。

膝を抱え、呼吸を整えていると、前の方から小さな足音がした。

「…いいんです神子様…。…精霊はどこでもこのような扱いですから…」

聞こえてきた声に、僕はパツと顔を上げた。

「でもなぜでしょう。胸がとても痛むのです…」

「…弥生…！」

思わず名前を口に出すと、目の前にいた弥生はビックリしたように瞬いた。

「神子様…私が見えるんですか？声も…？」

すると、顔を赤らめて仄かに笑った。

「嬉しゅうございます…神子様には最後に、お礼を言いつつございしましたから」

「…違うつ!!」

僕は膝の中に顔をうずめた。

「お礼を言われるようなことなんてしていない…！ 現に、弥生のこと、これっぽっちも知らなかった…。あんなに近くにいたのに…」

泣きたくはなかったけど、溢れる涙が止まらない。

ミラ国でも、日本でも、弥生はいつだって傍にいたのに。僕はといえばそんな弥生に、呆れるほど無関心だった。

そう言つと、弥生は跪いて僕を抱き寄せた。

「…弥生…!？」

「…すべては、神子様のおかげです」

「…なに…言つて…」

「神子様が私に良くしてくださったから…精霊だから、影欠片だからと差別なさらず、友のように接してくださったから…私は、今日までやってこれたんです…」

「…弥生…」

「……。…もう、時間みたいですわね」

「え？」

緞帳がおりたように真っ暗だった世界は元の白いドームに戻り、そこには大御神様の姿もあった。

「神子様…ありがとうございました。私…とても幸せでした」

弥生の姿が透けていく。

大御神様が掌に乗せている光も明滅していた。

「弥生っ！！」

「…さよ…なら…」

そうして、弥生の姿は完全に大御神様の元へと吸い寄せられていた。後には僕と大御神様以外、最初から誰もいなかったみたいにしんとしている。

「…分かったである」

大御神様が唐突に口を開いた。

「人間がどれほど愚かなものか。生まれいずる悪意もそのすえの悪行も、すべては己より下の者に押し付ける。憎み、妬み、嫉み、争う。それはいつかな止まぬ」

「……………ッ！」

「安心しや。妾はこの娘の体さえ手に入れば、後は地を平らげる

のみ。おぬしの血は必要じゃったが、なにも致死量まで奪わぬ」

「…弥生を、返せっ！！」

大御神様は見下すような目付きをする。

「分からぬ奴め。この娘は誰にも必要とされておらぬ。いま妾が使っても、誰に支障が出ることもない」

「…だつたら」

僕は齒を食い縛り、真っ向から大御神様を見つめ返した。爪が食い込んだ掌が痛い。

「だつたら僕が必要としてやるよ。弥生の力を借りて、あんたの言うこの腐れた世界を再生させてやる」

そこで初めて大御神様は息を呑んだ。

「だから…返せよっ」

剣があれば、と僕は思う。手にしっかり吸い付くグリップの剣。

…思うと、僕の手元にそれは現れた。RPGや時代劇を見て覚えただけの構えで大御神様に近づく。

「弥生は…弥生は、僕の大切な…！」

大御神様に斬りかかった。

その後は、分からない。

最終話 別れの時

冷たい…。

何だろうと目を瞑ったまま額に手を伸ばすと、濡れた布のようだった。そこでトロトロと目を開ける。

「…気がついたみたいね」

「…ヒルメさん？」

覗き込んできた顔を見てそう呟く。よくよく目を凝らすと更に下がったところに、スサとツキヨミさんもいた。

「あれ？ 僕…なんで…痛っ！」

「無理しない方がいいわ。矢が貫通した傷が、やっと塞がったばかりだから」

「…矢が…貫通…？」

ああそうだ、と僕は思い出した。

大御神様に矢で射ぬかれて、それで気が遠くなって、脚の赴くままに弥生に駆け寄って…弥生？

「ひ、ヒルメさん！ 弥生は！？」

しーっ、とヒルメさんは人差し指を唇に当てる。スサが親指で示す方には別のベッドがあつて、そこに弥生が横たわつてた。

（まさか…）

僕はのろのろとベッドをおりる。

「トシキ！ 怪我が…！」

「平気」

そして弥生のもとに近付き、…ホッと安堵の息をついた。

「…よかった…よく寝てる…」

「弥生が大御神様から解放されて良かったわ。…それにしてもどうやったのかしら…」

そう言つて僕の方をジトーっと見てくる。ヒルメさんだけでなくスサやツキヨミさんも見てくる。ああまた僕お恥ずかしい術を披露してしまつたのか！？

「それでねトシキ」

ヒルメさんがジト目をやめて僕の肩を叩いた。

「怪我が完全に治つたら、大御神殿にいらっしゃって。大御神様から直々のお達しよ」

…それから数日が経って。

僕はヒルメさん、ツキヨミさん、スサと一緒に大御神殿の庭に来ていた。弥生も連れてくる手はずだったが、まだ眠ったままだったので。

大御神殿の入り口に立つと、どこからか大御神様が現れた。

両腕も頭も翼の片方もある。ただし、それはあるかなきかの大御神様の姿よりずっと臃気に。

「あの…」

「…傷は癒えたようじゃの」

大御神様は濡れたような紅い唇で笑みをつくった。

「え？ あ、いや、まあ…」

「…妾の代わりに世を金剛石の時代に成すと言ったな」

いきなりの発言に僕は文字通りブツ飛んだ。もちろんヒルメさんたちもぴよんと飛び上がる。

「ええ僕そんなこと言ったんですか！？ うわーすみませんすみません！」

「じゃがの、それは10年や20年で成し得るものではない。おぬし、このミラ国にそこまで留まることはできるかえ？」

「…む、無理です…」

「じゃろっ」

「トシキ！」

小声でヒルメさんが叱責したが、それは大御神様に黙殺された。

「ならば」

僕はぐつと身構えた。またしても今の世の中を滅ぼして、新しい世の中を創ろうと言っんじゃないかと。

でも、その予想は外れた。

「…妾は金剛石の時代が再来するまで、また天上で見守っていよう…」

「！？ それって…」

大御神様は月光に曝された薔薇のように微笑した。

「ああ。妾はおぬしの子々孫々が、影欠片と共に世を平定してくれるのをまっている」

「…大御神様…！」

そして、大御神様はゆっくりと瞑目した。

「…いつまでも…待っておるぞ…」

大御神様が煌々とした光に包まれる。

そしてそれは一筋の光となって、急速に天へと昇っていった。

それと同時に大御神様の立っていた場所から、何か歪みのような空間が生まれた。よくよく見るとそれは街の風景に近い。

日本の。

「これは…!？」

「…大御神様の、最後の力ね。あちらとこちらを繋ぐ道」

「え？」

振り返ると、スサもツキヨミさんも俯いていた。ヒルメさんは涙をこらえていた。

「あれは日本国に帰る道だわ。そして…もう二度と現れない」

「つまり今を逃したら、トシキは未来永劫、日本に帰れなくなるってこと」

スサがいつものように軽口を叩くが、目は笑っていなかった。

「え？ でもヒルメさんの術を使えば…」

「…あれは大御神様の力を借りて使う術。また天上にお帰りになった以上、大御神様はこちらの呼び掛けに応えることはない…」

「…トシキの次の“神子”が現れるまで…日本国との扉を閉ざすつもりだろう…」

それは何十年先のことが…ツキヨミさんはそう呟いた。

「でも僕…っ！」

「早く行けっ！！」

ヒルメさんはもう、涙をボロボロ流している。スサとツキヨミさんも、目を充血させて僕が帰るのを待っている。

「行けよトシキ…あっちにはお前を待つてる人間が大勢いるんだろ？」

そう…僕の本当の居場所は、ここじゃない。

戻ろう。僕の生まれ育った世界へ。

次代“有栖の神子”の生まれる世界へ。

「みんな…、今までありがとう」

僕は歪みの中に駆け込んだ。

さようなら、ミラ国。

さようなら、みんな。

僕、絶対に忘れないよ…。

+++++

後日。

「あゝっ…疲れた…」

今日も一日大学の授業が終わり、バイトが終わり、僕はベッドに俯せに寝転んだ。

こんなとき夕食作るの面倒だからパスタでいいや〜とか思うのだが、好機を逸してしまったようで、夕食を作る気力もない。

「…いつもなら弥生が夕食作ってくれてるのになー…」

失ってから分かるとは…僕は今更ながら弥生にサヨナラも言わなかったことを後悔した。

ミラ国でのことが走馬灯のように浮かんでは消える。

チエシャ猫、スサ、ツキヨミさん、ヒルメさん、…そして。

「…本当はね、好きだったんだよ？…弥生…」

「…過去形で仰られると寂しゅうございますね」

え！？

僕はベッドからガバツと飛び起きた。そこには小柄な女の子がいる。

「や、や、や、や、や、や…！」

「…矢？ まだ傷が痛むのですか？」

「違っつ！！ 弥生、なんで、ここに…！？」

弥生は小悪魔めいた笑顔になった。うゝん、可愛いからそういう笑顔も似合うなあ…。

「それは、あのあとすぐに神子様を追いかけたからですね」

「へ？ でも、そしたら二度とミラ国に帰れないんじゃない？」

「そうですね…そしたら、一生後悔するな、と思ひまして」

「…何を？」

「…神子様と、離れ離れになることを」

僕は深くため息をついた。弥生もずいぶん大胆なことをしてくれる。

「…弥生…いま言ったこと、取り消すよ」

「え？」

僕は弥生の腕を掴み、ベッドに引き倒した。

「きゃっ!？」

「…大好きだ！ 弥生！」

こうして弥生とは長い付き合いが決定した。

でもこれで、ミラ国のことは一生忘れないだろう。

大御神様との大事な約束も。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3182j/>

不思議の国の有栖!?

2011年9月11日17時36分発行